

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

設立40周年記念誌



阿寒町タンチョウ鶴愛護会



北海道新聞提供 撮影 岩松 健夫



阿寒町タンチョウ観察センター タンチョウの群 撮影提供 山崎 定作



山崎定作氏の給餌に近づくタンチョウ 撮影提供 小荻 喜一



阿寒国際ツルセンター コスチューム飼育 提供 北海道新聞社



2003年12月8日 阿寒の給餌場に飛来したカナダヅル 撮影提供 山崎 定作



撮影提供 帯広市 菊田 吉紘

タンチョウ愛護発祥の碑

平成8年3月2日建立



碑文

この愛護発祥の碑は、昭和二十五年の冬からタン
チョウに餌を与え続け、今日のタンチョウの一大楽
園を築かれた山崎さん一家をはじめ、愛護活動に大
きな足跡を残した阿寒中学校ツルクラブや地域の人々
を讃え、後世にその業績を永く伝えるために建立す
るものです。

平成八年三月

揮毫者

文化功労者 文学博士

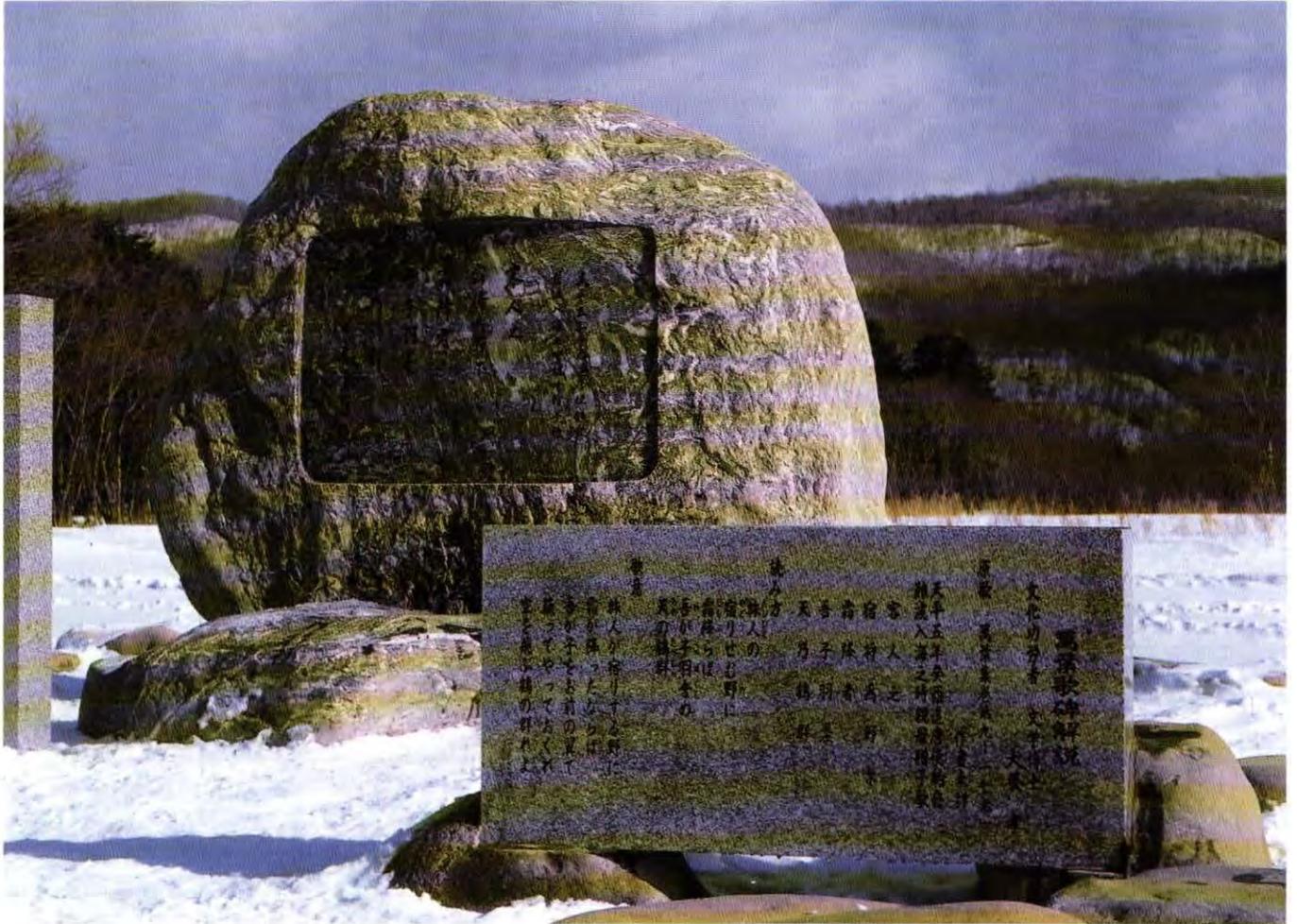
犬養 孝

建立

阿寒町タンチョウ愛護会

犬養 孝 萬葉歌碑

平成8年3月2日建立



萬葉歌碑解説

文化功労者 文学博士 犬養

孝

原歌

万葉集第九一七九一 作者未詳

天平五年癸酉遣唐使船發

難波入海之時親母贈子歌

客 人 之
宿 将 爲 野 尔
霜 降 者
吾 子 羽 裘
天 乃 鶴 群

読み方

旅人の

宿りせむ野に

霜降らば

吾が子羽舎の

天の鶴群

歌意

旅人が宿りする野に霜が降ったならば
吾が子をお前の翼で蔽ってやっておくれ
空を飛ぶ鶴の群れよ





■書道家 加藤秋霜
かとう しゅうそう
 【本名 康之助】

足跡

昭和20年9月 18歳 書道入門。昭和22年宇野静山(小樽市)に師事
 昭和27年4月 芦別市に於いて「書道研究 書峰社書道」を結成。

「日本書道美術院展」に出品。

昭和35年10月 「日展」初入選

昭和37年6月 札幌市に転出、「書峰社書道」運営の傍ら、本格的に
 書活動に入る

昭和39年3月 社団法人創玄書道会創立に際し、学童部審査員とし
 て参加

昭和42年 「創玄展 第二科審査員」に推挙される

昭和43年 「北海道書道展」で準大賞受賞、「審査員賞」に推挙
 される

昭和44年 「北海道創玄」設立、初代幹事長に就任

昭和45年 「毎日書道展 近代詩文書部審査会員」に推挙される

昭和46年 「創玄展 第一科審査会員」に推挙される

昭和52年 「日展 会友」に推挙される

昭和53年 「北海道書道連合会」設立。理事長、事務局長を歴任

昭和50年以降 「創玄書道会理事」「毎日書道展運営委員」「近代詩

文書作家協会理事」「全日本書道連盟高野山書道協会
 理事」「北海道書道連盟常任委員長」「北海道書道展
 理事」「毎日北海道展実行委員長」など歴任

昭和63年 「札幌市民文化奨励賞」受賞

平成8年9月 69歳「日展会友」「北海道書道連合会」以外の、全て

の書道界役職を退任。(以後無所属)

目次

グラビア

表紙写真「日本の鶴」より 林田 恒夫氏寄贈
 タンチヨウの写真 岩松 健夫氏とコンテスト入選作品
 タンチヨウ愛護発祥の碑・萬葉歌碑 犬養 孝博士
 皇太子殿下御歌の碑 御歌書家 加藤 秋霜氏

発刊にあたって	阿寒町タンチヨウ鶴愛護会 会長 吉田勝美	1
愛護会設立40周年記念に寄せて	阿寒町長 中島守一	2
阿寒町タンチヨウ鶴愛護会設立40周年を祝して	阿寒町議会議長 山崎征勝	3
タンチヨウと「共に生きる」時代を迎えて	北海道釧路支庁長 高原陽二	4
設立40周年を祝して	北海道教育庁釧路教育局長 田中了治	5
愛護会40年の歩みに感謝して	阿寒町教育委員会教育長 奥山勝男	6
「タンチヨウに学ぶ」	元阿寒町教育委員会教育長 廉澤邦雄	7
「阿寒町のタンチヨウ鶴」	賀茂鶴酒造株式会社 代表取締役会長 石井泰行	8
千羽鶴の陰に	専修大学名誉教授 元阿寒国際ツルセンター名誉館長 正富宏之	9
阿寒町を頼り 越冬するタンチヨウ	釧路市丹頂鶴自然公園名誉園長 高橋良治	10
タンチヨウと私	写真家 林田恒夫	11
「赤いベレーの恋人」と呼んで	写真家 岩松健夫	12
四十年の歩み		15
座談会「鶴への想いを語る」		63
町内給餌に尽くした人々		77
町内愛鳥校紹介		91
鶴群より	愛護会事務局長 小林靖之	109
資料編		129
編集委員感想一言		142
編集後期	編集委員長 奥山勝男	144

発刊にあたって

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

会長 吉田 勝 美



当愛護会は昭和四十年十一月に設立以来、当時としては唯一のタンチョウ鶴の愛護団体として発足いたしました。

今年で四十周年を迎え、五月にタンチョウ保護調査連合の発表で一千三羽が確認され、喜びに堪えません。また、阿寒町は釧路市へ合併する年の節目にあたり、当愛護会が地道に給餌活動、保護思想の啓発活動、そしてマリモとタンチョウという二つの特別天然記念物を守り続ける町という誇りと実績を後世に引き継ぐことを記念して、十月一日に式典・祝賀会を開催し、記念誌を発刊いたしますこととなりました。

顧みますれば、愛護会の設立動機となりましたのは、昭和三十八年、釧路地方は冷夏で畑作物が不作となり、タンチョウの餌となるトウモロコシが獲れず、ツルクラブ員が放課後、給餌活動に餌が足りないことをNHKが知って、ツルクラブ員の活動と餌の足りないタンチョウの現況を伝える子ども向け番組「こちらワンパクテレビ局」が昭和三十九年一月八日夕方六時に全国放送される。

その反響は絶大で全国のタンチョウを愛する子どもから老人までが餌になる現物を送ってこられ賀茂鶴酒造さんをはじめ多くの方々から「鶴を助けて下さい。餌代に」とクラブ員宛に激励のお便りと五百件を超える現金が送金されて、取り扱う阿寒中学校としては処理の限界に達しておりました。ツルクラブ担当の先生を通して、私の自宅に相談にこられましたので、早速、町教育委員会の藤沢社会教育係長とも相談いたしました。阿寒町独自の愛護団体設立へと進展いたしました。

私自身が全国のタンチョウを愛する人々の心を受け止めて、タンチョウの飛来地阿寒で関係のある方によって組織ができ町教育委員会が事務局になっていたことが、今日に至る実績を積み重ねることができました。

事業として、タンチョウの飛来期間の給餌支援、小中学校に愛鳥啓発の作品展、タンチョウ祭を開催して、町民への啓発、丹頂鶴音頭の作詞、作曲、振付を創作完成させ、普及に努めました。

阿寒町国際ツルクラブセンター建設によって、事務局をセンター内に置かせていただき、センター近くにタンチョウ愛護発祥の碑を建立するなど数多くの事業を展開してまいりました。

この間、関係機関、町内外のタンチョウを愛する方々から厚いご支援とご指導を賜りましたことを深く感謝申し上げます。

おわりに、愛護会を支えて下さいました歴代の役員の方々、この式典・祝賀会、記念誌編集委員としてご尽力を下さいました皆様に深甚の感謝を申し上げます。

愛護会設立40周年記念に寄せて

阿寒町長

中 島 守 一



阿寒町タンチョウ鶴愛護会が設立四十周年を迎えられ、これまでの功績を記す本記念誌を発刊されましたことに対しまして、心からお祝いとお喜びを申し上げます。

タンチョウが昭和二十七年二月に国の特別天然記念物に指定されて以来五十三年が経過し、一時は絶滅寸前だったタンチョウも町民各位をはじめ多くの関係者の方々のご尽力により、今では町内において二〇〇羽余りの群が私達町民や全国から訪れる多くの旅行者に優雅な舞を見せてくれるほどになりました。

振り返りますと、昭和二十五年、故山崎定次郎氏が大雪で食べるものを失ったタンチョウに自家用のトウモロコシを与えたことが始まりで、その後町内各地においても自らの家業の傍ら、飢えに苦しむタンチョウに厳冬の寒さの中で給餌を続ける町民の方々の姿がありました。

その後、昭和三十三年には、当時阿寒中学校長であった故大井健次氏が、寒波のために餌を失ったタンチョウの保護活動に奔走し、その熱意が生徒達に浸透、学校全体としての保護活動にまで発展し、現在も鶴特別委員会として活動を続けられております。

そのような中で発足された本愛護会ですが、それまで対策が講じられていなかった臆病なタンチョウを見学に来る人々から守ることの重要性を提唱し、給餌対策以外にもタンチョウを保護する活動や、賛助会員制度の導入などを行い、愛護思想の普及に努められているところであり、これらの活動実績にはただただ敬意を表する次第であります。

特に、町教育委員会が委託をしております冬季のタンチョウのねぐらの巡視においては、酷寒の中を広範囲にわたって一つひとつの状況を巡回するという大変な作業であり、愛護会発足当時から永年続けられている活動の一つでもあります。また、阿寒国際ツルセンター主催の事業活動にも一方ならぬご支援ご協力をいただいているところであり、心から感謝を申し上げます。

また、本町は、本年十月十一日に釧路市及び音別町と合併することになりますが、夏はタンチョウの営巣地である釧路湿原と、冬は餌を求めて飛来する丹頂の里とのつながりは今後益々強くなっていくものと思います。この「マリモとタンチョウの里阿寒」を後世に継承するため、私共行政といたしましても、多くのタンチョウが飛来するこの阿寒の地の自然環境の保全に努め、タンチョウにとつてより住みよい地として護り続けていかなければならないものと思っております。

最後になりましたが、本愛護会が今後も益々発展されますことを心からご祈念申し上げますとともに、会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

阿寒町タンチョウ鶴愛護会設立40周年を祝して

阿寒町議会議長

山崎 征勝



本町が新釧路市として新たに歩み出す歴史的な年に、阿寒町タンチョウ鶴愛護会が、設立四十周年の記念すべき年を迎えたことは、誠に喜ばしい限りであり、心よりお祝い申し上げます。

一時は絶滅の危機に瀕していたこともあるタンチョウを、地元関係者有志の方々で愛情を持って保護しようということから愛護会が設立され、飛来分布調査、生息観察、一斉調査、給餌対策及び標識説明板の設置、さらには、愛護思想の普及を図るべく、タンチョウに関する資料の出版等数々の事業活動を展開され、中でも昭和四十二年に制作された「丹頂鶴音頭」は、阿寒の郷土芸能として地域に根ざし、子供たちの運動会をはじめ、ほろろん祭りなどの諸行事で披露され、地元町民がタンチョウへの愛情を一層深いものとしていくところでもあります。

この間、保護意識を啓発すると同時に、タンチョウそのものを自然の状態で保護していくことを目的に、故山崎定次郎さんが給餌に成功した地、上阿寒地区に昭和五十二年タンチョウ観察センターが完成し、コーヒーを飲みながら優雅なタンチョウの舞を観察できる唯一の施設として注目を集め、開館と同時に多くの人々が訪れにぎわいを見せました。また、五十五年には、生息地である釧路湿原がラムサール条約の加盟湿地として登録され、翌年の五十六年には、保護活動が実り阿寒町のタンチョウ飛来地一帯が鳥獣保護区に指定されました。さらには、愛護会はもとより町民の皆様の念願でありました阿寒国際ツルセンターが関係機関のご努力により平成八年に完成し、世界的なツルの調査研究の拠点施設として期待され、その役割を果たしていることは大きな喜びであります。

又、本年一月の一斉調査においては、千羽を超える生息が確認され、調査史上最高の数となったことが報道されました。

これらの成果は、今日までタンチョウに愛情を持って保護活動にご尽力された愛護会吉田会長を中心とした会員の皆様の並々なご努力の賜と心より敬意を表する次第であります。

最後に、この四十周年記念事業を契機として、タンチョウ愛護運動がより一層高まり、阿寒町の地に未来永劫にわたって飛来し続けることを念願するとともに、タンチョウ鶴愛護会の益々のご発展とご隆盛をご祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。

タンチョウと「共に生きる」時代を迎えて

北海道釧路支庁長

高 原 陽 二



このたび、阿寒町タンチョウ鶴愛護会設立四十周年記念行事の一環として記念誌が発刊される運びとなりましたことに対し、心からお喜び申し上げます。

「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は、これまでにタンチョウの給餌活動を始め、飛来地やねぐらの監視活動、ツルに関する資料の発行などタンチョウの保護や保護思想の啓発活動を行い、今日、阿寒町に毎年二〇〇羽の群が越冬するまでになったと聞いております。

タンチョウが昭和二十七年に特別天然記念物に指定されてから今年で五十三年、半世紀を越えました。昭和三十九年には道民投票により「北海道の鳥」と認定され、本道の象徴として広く親しまれています。

昭和二十五年、大寒波大雪に見舞われた阿寒町で、トウモロコシをついばむタンチョウの姿が確認されてから地元住民による「人工給餌」が始まったと伺っております。愛護会編纂による山崎定次郎さんの心温まる物語は強く私たちの胸を打ちます。厳しい農業の暮らしの中で、自らの糧をタンチョウに分け与え続けた先達のご努力と深い愛情には、頭が下がる思いでもあります。

また、飛来地域の小中学校で続けられている生息数の一斉調査や、レポート、作文、絵画をはじめとする教育活動は、豊かな心をはぐくみ、郷土への誇りを一層高めるに違いありません。愛護会が、教育委員会を中心に発足したというのもうなずける話です。

北海道は、タンチョウの保護増殖事業を北海道教育庁から昭和五十九年に引き継ぎ、環境省の委託を受けて監視事業・給餌事業・生息状況一斉調査を実施しております。一時は絶滅の危機に瀕したタンチョウが現在千羽を超える数にいたったのは、地元の皆様方の暖かい心と熱心な保護活動が実ったからにほかなりません。

今後のタンチョウ保護活動は、生息数を増やすことに主眼を置きながらも、その生育環境を保全していくことが大きな課題となっております。生息数の回復とともに、これまでは考えられなかった不適な場所で営巣をするつがいもいると聞きました。かつては約三万ヘクタールと言われた釧路湿原が一万八千ヘクタールに減少したことは、タンチョウの生活圏を脅かす事実として重く受け止めなければなりません。

地球規模で急速に環境が悪化していく現代においては、民度の高さは環境保護への関心の高さで推し量ることができるかと思えます。阿寒町のみなさんの取り組み、愛護会の活動に心から敬意を表するとともに、自然保護運動の大きな推進力となることを期待しております。

設立40周年を祝して

北海道教育庁釧路教育局長

田 中 了 治



このたび、阿寒町タンチョウ鶴愛護会が、設立40周年の記念すべき節目を迎え、ここに記念事業の一環として、記念誌を発行されますことに対し、心からお祝いを申し上げます。

さて、阿寒町タンチョウ鶴愛護会は、昭和40年十一月に発足し、以来、タンチョウと人とが共存する地域の発展に寄与することを基本理念とし、給餌活動、タンチョウに関する資料の発行、愛護発祥の碑の建立などを通して、タンチョウの保護活動に努めてこられました。一時は絶滅の危機に瀕したタンチョウが、阿寒町において、毎年およそ二百羽の群れが越冬する今日の状況に至るまでには、愛護会の果たしてこられた役割は誠に大きなものがあり、深く敬意を表するところであります。

北海道教育委員会といたしましても、昭和三七年度からタンチョウ給餌員の委嘱を開始して給餌活動に取り組み、昭和三九年には、道民の皆さんを対象とした投票の結果を受けて、タンチョウを「北海道の鳥」に指定いたしました。その後、タンチョウ保護の立看板の設置（昭和五三年）や、釧路市動物園に委託しての標識調査（昭和五六年）等にも取り組み、昭和五七年には、タンチョウ保護三〇周年記念式典を関係者の御協力と御臨席を賜り、盛大に開催することができました。これら一連の取り組みに対しまして、阿寒町タンチョウ鶴愛護会の皆様には一方ならぬお力添えをいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

また、国においては、平成五年、タンチョウを、オジロワシ、エトピリカ等とともに、「絶滅のおそれのある野生動物種の保存に関する法律」の「国内希少野生動物種」に指定し、環境省等による保護増殖活動が行われており、このことは、国の問題としてタンチョウの保護に努めるという意識の高まりの表れとして、タンチョウの保護を一層前進させる上で、重要な出来事であったものと認識しております。

これまで、四〇年の長きにわたる阿寒町の取り組みは、子どもから大人まで地域の誰もが参加し、時代を超えて継続的な実践が求められる生涯学習活動であるとともに、タンチョウの保護活動を通じた地域づくり活動ともなっております。今後とも、タンチョウ鶴愛護会の皆様が、地域の貴重な共有財産であるタンチョウ及びタンチョウが生息できる自然環境の保全のための地域ぐるみの活動の推進者として、引き続き御活躍されますことを御期待申し上げます。

このたびの四〇周年記念誌の刊行を契機として、改めて、これまでの保護活動の歴史をたどり、併せて、国の特別天然記念物であり、北海道のシンボルでもあるタンチョウが北の大地に永遠に生息することを祈念し、お祝いの言葉といたします。

愛護会40年の歩みに感謝して

阿寒国際ツルセンター建設時を想起

阿寒町教育委員会教育長

奥 山 勝 男



阿寒町タンチョウ鶴愛護会が、タンチョウに深い思いを持たれた皆様の長い活動の中、その歩みにすばらしい金字塔を打ち立てられて、本年四十周年の節目を迎えられましたことに敬意を表しますとともに心からお祝い申し上げます。

今は故人となられた山崎定次郎翁がタンチョウの絶滅を危惧されての愛の給餌から、今では次代に引き継がれ、愛護会の活動と相俟ってその成果が評価されているところですが、皆さんが実践される愛鳥思想が会の発足当時から子どもたちに伝承され、阿寒小、中学校をはじめ、町内各校の校庭に親子づれのタンチョウが飛来し、子供たちの情操に大きな力となっておりますことに活動の意義の深さを思うものであります。

鶴群の優美な姿を目の当たりにします時、一層その歴史の重みに触れる思いであります。

私は、現在の阿寒国際ツルセンター建設計画当時、町企画担当として携わり、道・自然保護課との事業調整にあたったことがあり、この度は教育委員会の立場で関わらせていただくことで建設当時を想起しております。町議会議員の皆様をはじめ、町民の皆様の給餌から今に及ぶ思い・熱意から「是非にもツルセンターを作りたい」意思が結集され「ツルセンター誘致促進期成会」が組織されて陳情等の活動が展開されました。当初は、全面的に道費で建設の期待もありましたが実現が困難となり、道の補助や制度活用の方で計画することになりました。

当初は道の財政見地も厳しく実現が困難を極めました。意見調整の時、道の担当者から「阿寒町はこの施設建設の目的を観光の面で考えているのか？」との問いに、「タンチョウは道鳥に指定されながら今まで学術的な研究はなされておらず、私の町の一人人がはじめた給餌から、それに追従した町民の皆さんの活動が奏効して今の羽数にまで増えた思いがある。これに関連して子どもたちの活動も愛鳥思想の育成に大きく役立っている思いもある。この建設計画が実現し、研究の成果が現れる時点にはその研究成果については広く一般に供して行くべきと考えている。」として観光は二の次と理解されて事業採択となった。

そこに到達するまでの期成会の行動の成果は地元支庁や道議会の気持ちを動かしたことは言うまでもなく、当時の道議会議長さん、釧路支庁の担当課長さんの配慮に感謝するものである。

皆さんの熱意で建設が実現した施設が、今日、観察センターと連動する建物として研究成果共々一般に提供され、全国の多くの皆さんにご利用頂いていることに安堵し、更に愛護会と共に歩んでいることを嬉しく思うところであります。町のシンボルであるタンチョウの優雅な舞と共に、阿寒町タンチョウ鶴愛護会の活動が一層全国の皆様に理解され発展されるようご祈念申し上げます、愛護会の四十年の歩みに感謝しつつ、心から節目の年をお祝い申し上げます。

「タンチョウに学ぶ」

元阿寒町教育委員会教育長

(札幌市)

廉 澤 邦 雄



タンチョウについて、コンパクトに実に見事に表現しているのは佐藤さんの写真集の解説(P30)である。彼は写真のエキスパートだし文章も洗練されていてうまい。それに鶴の里の山崎定次郎さんと、その一家の連綿として続く苦勞も忘れずに述べているから感激もする。

阿寒町にはじめて赴任したのが布伏内小学校である。ここでは初経験が多い、その一がスケートリンクづくりである。そのリンクに鶴が舞い降りたから驚いた、そこで山崎さんのことを思い出しやってみようと準備した。白衣に黒い帽子、トウモロコシのバケツを持って、ソロリ、ソロリと息をのんで餌をまきながら近づいたが逃げられてしまった。それから根くらべに入った、姿を見たら出て行く。「鶴きてるよ」と児童も声を殺して教えてくれる。少しづつだが距離が近づいてきて餌が届くようになった。馴れたようで餌を啄むのを見て、やっと通じたかと、天を仰いだ。

一組のタンチョウだったが、きっと児童も教師も窓から見ていたことだろう。とても嬉しく大きな満足感が湧いてきた。「教育は愛にはじまり、愛に終る」と銘記する。

布伏内には六年いたが、ここでは悲壮な出来事に出遭う。「閉山」である。人のなだれと言うか、津波のように人の姿が消えていく、悲しみを啖と味わい阿寒中学校に参りました。

ここは「鶴の学校」で有名で、吉川英治賞が輝いていました。この伝統を受け継いだ「鶴クラブ」は「つると共に十九年」と愛護の記録をまとめあげました。その中には山崎さんの孫たちがいて中心になって活動していましたが、鶴の心に学ぶ部員は勿論、全生徒は鶴翔青雲の志しを昂げて高く生きていました。私も四十九年秋に文部省派遣の海外派遣に北海道代表として選ばれ、七か国十都の教育視察に参加することが出来ました。最大の初経験で見えるもの、聞くもの初ものばかりで一か月もの緊張続きで、よくもったなと、この幸運をふりかえています。

再度、阿寒入りますが、その前に鶴居中学校に勤務しました。この村はその名の通り鶴の居る村で、伊藤サンクチュアリや給餌員の渡邊トメさんが有名になり、新聞ニュースも写真も鶴居が多くなり、取り戻すのに苦勞しました。それは国際ツルセンターの創設あり、サイクリング・ターミナルの建設でした。六十三年にはターミナルは実現できましたが、ツルセンターは日の目を見ず舞で退任となり残念でした。ターミナルの時には石岡さんはじめサイクリングの皆さん、栗野さんにえらいお世話になり、またツルセンターでは吉田愛護会長さんや会員の皆さん、佐藤照雄さんに大変なご苦勞をかけたことに深く感謝いたします。五十九年一月二十九日、皇太子同妃両殿下のタンチョウ観察センターのご視察に同行できたことは、忘れられない光栄なことでした。

「阿寒町のタンチョウ鶴」

賀茂鶴酒造株式会社
代表取締役会長

石 井 泰 行



阿寒町タンチョウ鶴愛護会設立四十周年、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。私が賀茂鶴酒造株式会社に入社いたしましたのは、昭和三十二年でした。振り返ってみますと、ほとんど愛護会の歴史は私の会社での一生とも重なってきて感無量のものがあります。四十年間、丹頂鶴の保護につとめて来られた皆様の努力に対しまして深く敬意を表するものでございます。たまたま私の家内の父が日本画の児玉希望という絵画きなものですから、丹頂鶴が題材になることが多く、私どもも見る機会に恵まれているのですが、それでも鶴の持つ魅力は多種多様のもがあります。多くの画家が丹頂鶴を画いているのは、鶴の持つ家族性と、その優雅な姿ではないでしょうか。

児玉希望は亡くなるまで一度で良いから鶴がヒマラヤ山脈を越えて行くところを見たいと云ってました。一度二週間ばかり超えるところを見る為にインドに出かけた事がありますが遂に見ることが出来なかったようです。私もひまが出来たら是非みたいと思っております。それにしても渡りの習性の丹頂鶴が阿寒町に住みつくということは町を上げての熱心な鶴に対しての保護策が永年にわたって行われた事の実績と思われまます。四十年にわたって愛護に当ってこられた阿寒町の皆様にただただ頭の下がる思いです。どうか、これからも五十年、百年にわたって続けられる様お祈りをいたしますと共に、私どもも会社が続く限り、応援することをお誓いして御祝いの辞といたします。



阿寒町を頼り 越冬するタンチョウ

釧路市丹頂鶴自然公園名誉園長

高橋 良治



このたび、特別天然記念物保護四十周年を迎えられました阿寒町タンチョウ鶴愛護会に対し、心からお喜びと感謝を申し上げます。昭和三十三年からタンチョウと共にしてきたものにとって、タンチョウは生涯を通じ深い因縁のあります鳥でございます。顧みますと、魚釣で、カモ猟と農作物で、タンチョウを知りました。平戸前（現北斗）の湿原を流れる長沼、穂祢平（現山花）旧河川や、三ヶ月沼、大栗毛川には、多種のカモ類が渡来して、特に冬鳥として渡来するカワアイサは、単独か2〜3羽で渡来するのを追って猟を行っていました。昭和二十六年に湯波内（現櫻田）でタンチョウが射殺された事件があつてから、タンチョウを注意して見るようになりました。秋から冬に気温が下がりはじめ、沼も小川も凍ると、鳥たちは阿寒川へ移動するのです。淀の浅瀬で見たタンチョウは、年々場所を上流へ上流へと移し、湯波内（現櫻田）から下舌辛へと移動して来ました。この頃から冷害が続き、トウキビや豆科の作物が不作となり、タンチョウは餌を求めて移動したように思われましたが、天候異変による大雪が、タンチョウを移動させました。特に春先のドカ雪は、大洪水となって阿寒川を怒り狂ったように流れ、土手を壊し、川底を変えたのです。それまで、下舌辛地区で餌を求めては、川の中で見られたタンチョウも、年々さがる気温に川岸が凍り、浅瀬が無くなり、阿寒町十七線三十八番の阿寒川にカモ達といて、タンチョウは3羽と5羽連れで陸に上がって地面を掘り、何かを食べるようになりました。この場所は元木材が流送され、木材を引き上げていた水切場であり、積み重なっている木の皮の下に凍死の虫類が見られました。また周辺に住む人々は、トウキビの殻を二才に立て、トウキビを与えていましたが、十七線の川も凍るようになって、タンチョウは十九〜二十三線へ移動し、その数は五十一羽を確認しました。阿寒町タンチョウ鶴愛護会は、砕石業者の協力を得て、阿寒川をタンチョウが安心して過ごせる川に仕上げられましたが、マイナス三十一℃と厳しい日はその川も凍り、タンチョウ達は二十六〜二十九線の上流に移動しました。タンチョウ鶴愛護会は川の氷を割り、タンチョウを二十三線に戻してくれました。風もなく、やたらと気温のさがる日は、ねぐらの舌辛川へ行く群れがあつて、愛護会の保護区域は広いものでした。また阿寒地区は冷害にもトウキビや穀物が実り、地区農家の畑にはいつもタンチョウの採餌の姿が見られます。

阿寒住民に救われたタンチョウ達。厳しい冬も安心して身を守る川、阿寒中学校にツルクラブがあつて、住民を代表してくれる山崎定作さんがおります。阿寒タンチョウ鶴愛護会が、いついっまでも引き継がれますよう、心からお祈り申し上げます。

千羽鶴の陰に

専修大学名誉教授
元阿寒国際ツルセンター名誉館長

正 富 宏 之

それは華やいだ会場であった。

タンチョウ保護へ貢献した人の表彰式もあったし、新しく創られた丹頂鶴音頭も踊られた。出席者への土産袋には、音頭を録音した赤いソノシートも入っていた。そのときの挨拶や祝辞の内容は覚えていないが、愛護会長の吉田勝美さんが、今とお変わりなく活躍されておられた印象が強く残っている。

おそらく、釧路市の博物館長宛ての案内を手に、私は阿寒の会場へ足を運んだのだと思う。しかし、当時タンチョウへ関心を向けていた私にとり、愛護会によるタンチョウ祭りへの出席は、儀礼以上の、期待を込めたものであった。

そのころ、タンチョウの数は二百羽足らずであった。それでも、最初のセンサスの三十三羽という、まさに危機的状況に比べると、いささか華やかな会を開いても許される数となっていた。

あれから四十年。タンチョウの数は、今年やっと千羽を越えた。だが当時、千羽という数と、四十年という歳月を誰が予想したであろうか。

確かに、今年千羽という数を確認したのは、タンチョウ保護調査連合というグループである。しかし、現実にタンチョウの数を増やしたのは、シバレル朝も吹雪のなかも、トウモロコシを与え続けてこられた給餌人の方々や、それが滞りなく行われるように裏方として努力された行政関係者、さらには餌などを寄贈してくれた善意の一般の人々である。なぜなら、タンチョウの数の増加を抑えていた最大の要因は、冬の間の餌不足だったからだ。

それでは、愛護会の四十周年記念はお祝いムードだけでよいのだろうか。なるほど、千羽達成はひとつの成果として、世界に誇るべきものだし、祝うべきことでもある。だが、それだけではない。タンチョウの数が増えた（正確には増やした）ことによる課題が否応なく生じ、それがタンチョウの存続に大きな危険をはらませたことを見落としてはならない。

例えば、阿寒へ集まるタンチョウに伝染性の疫病が発生したら、群れはひとたまりもない。給餌による人馴れで、ツルが人の活動域に近づけば、農薬や交通事故など危険はますます増大する。

では、どうすればよいか。それには、これまでと異なる、新たなツルとの付き合い方を取り決めるべきである。愛護会の四十年は過去の業績への祝いの年でもあり、同時に未来への新たな視点を持つ会へ変身すべき、明確な転換点でもある。これが、愛護会の歴史とほぼ同じ期間、タンチョウを見守ってきた私の祝辞でもあり、心からの希望でもある。

「赤いベレーの恋人」と呼んで

はじめて世に出たヒナの写真

写 真 家

岩 松 健 夫



「男はつらいよ」の寅さん風に言うところ「ワタクシ岩松健夫、生まれも育ちも道東、道東は釧路で、釧路川の水で産ぶ湯を使いました」ということになる。私のふる里・・・釧路には自然がいっぱいある。釧路湿原がそれだ！ ここには気品高く、輝くほど美しいタンチョウが生息している。そのころまだ誰もツルの巣づくりやヒナをその目で確かめた人はいなかった。釧路丹頂鶴保護会や日本鳥学界でも営巣生態は確認されていなかった。『よし！ ひとつ私とそのナゾを解いてやろう。タンチョウのヒナを、カメラで記録してやろう』こうした気持ちで私をツルの里さがしに追いやってたのです。

昭和二十九年五月。私は釧路市新富士駅から原野を走る村営ローカル軌道車で鶴居村下雪裡で下車、地図を片手に、撮影装備一式と五日分の食料をつめこんだ重いリュックサックを背負。宮嶋崎へと向かった。午後十時半すぎ、それは宮嶋さんの家であった。先代が大正十二年に入植して以来、夏だけ住んでいる。私は事情を説明すると、異様な風体の「真夜中の訪問者」を最初はいぶかしく思っていた宮嶋さんも快く案内役をひきうけてくれた。宮嶋さんの案内で、チルワツナイ川をカヌーのような小舟でアッチだ、コッチだと進む。それから二日にわたって一面ボウバクたる湿原をツルを捜し求めて放浪した。疲れ切つてものを言うのもおっくうになり、目がボクとかすんできたころ、ヨシ原の先すれすれに二羽のツルが華麗な舞を見せながら、美しい弧を描いているのです。私たちはツルにさとられないようにして前進した。ところが、ヨシの葉づれで音をたててしまった。「カアーン カアーン」ツルはヒステリックな、かん高い奇声をあげて、私たちの上空で大きな旋回をはじめた。人間の接近を感じて警戒しはじめたのだ。突然、上空を旋回していた一羽が急降下してきた。すさまじい羽音と勢いだ。ツルはヨシの先スレスレに舞い上がり襲いかかってくる。二度、三度・・・しばらく声を立てられなかった。湿原に入って五時間もたっただろうか。耳をそばたてると「ビィッく ビィッく」と鶏のヒヨツ子の声をつぶしたような鳴き声がかすかに耳に入った。背伸びして川面をのぞくと、カモの子のような赤ちゃんヒナが無心に泳いでいる。私はついに見つけた！ 夢にまで見たツルのヒナ。夢中でシャッターを切った。全身茶褐色。足が太く、首と口ばしが長い。あの端正なタンチョウのヒナだとにわかには信じられなかった。私にとって人生の転機となった一枚の写真になった。以来、四季にわたるタンチョウを「赤いベレーの恋人」と呼んで撮り続けました。

ツル撮影にまつわる人との思い出は尽きない。当時阿寒中学校の大井健次校長（昭和四十四年八月死亡）もその一人。自分たちの住んでいる阿寒町が世界でただ一カ所のタンチョウの生息地でありながら、子供たちの間でもツルに慢性になってなんの感動も愛着も湧かない姿を見て憂い発憤し

タンチョウと私

写 真 家

林 田 恒 夫

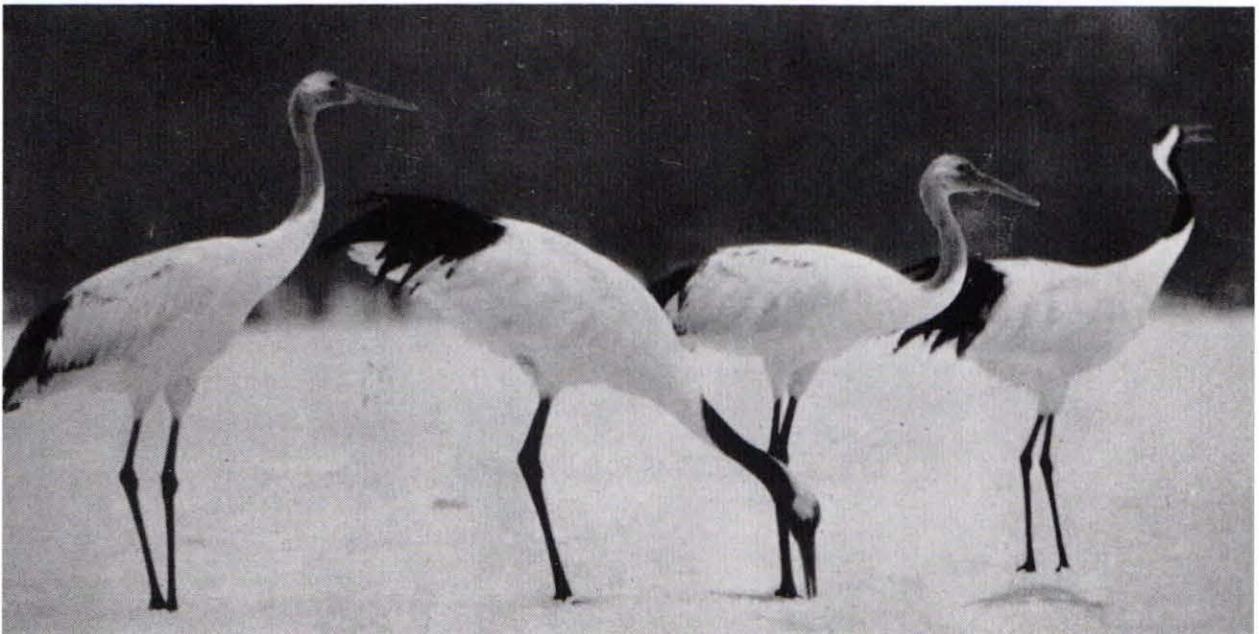


愛護会設立四十周年誠におめでとうございます。

愛護会主催で設立から数年間「タンチョウ祭り」というイベントを行いその席上でタンチョウの保護事業に尽くした人々を表彰していました。私も昭和四十八年の第三回「タンチョウ祭り」で保護事業につくしたということで感謝状を授与される荣誉に浴しました。この事は昭和四十四年に道のタンチョウ監視員になり、タンチョウの保護にあたった事が評価され私にとりましてこの上ない喜びでした。

タンチョウと私の出会いは当時、八ミリ小型映画に凝っていた私が仲間からお正月にお目出度い丹頂鶴を撮影に行かないかと誘われ阿寒町に出掛けたのが昭和三十七年一月三日でした。場所は現タンチョウ観察センターがある上阿寒二十三線、山崎定次郎（故人）さんの畑で雪に覆われ、あたかも雪原ようであった。畑の住宅に面した所にはツルを驚かさないようにヨシで作られた囲いがあつた。着いたのが十時頃であったが、生憎く、この日は吹雪模様でタンチョウは一羽も居なかった。それまでタンチョウを見たことが無かった私は一刻も早く出会いたいと寒さに耐えながらヨシの陰でツルが現れるのを待っていたが当時の防寒服装では一時間もすると寒さで足が疼き自然に足踏みをして寒さに耐えていた。すると家の裏口から定次郎さんが出てきて、吹雪いている間はツルは出てこないから吹雪が収まるまで家に上がって待ったほうが良いといわれ、寒さで凍えていた私達は救われる思いで好意に甘えて家で待つことにした。お昼になり持参の弁当を食べようかと思つているとき、定次郎さんが家で取れた大きなじゃがいもの茹でた物をもってきて、まきストーブ上に置き、焼けたらバターを付けて食べなさいと云ってくれた。このいもの美味しかったことを今になっても覚えている。二時になり、吹雪も収まり再び外で待つことにした。三時を過ぎてもツルは現れない。ツルは今日が出て来ないのではないかと焦りの気持ちが胸を塞ぐ。雲の切れ間から夕日が顔を覗かせ雪原の畑が赤く染まった時、下手から白い大きな鳥が二羽飛んでくるのが見えた。仲間が「ツルだ」と叫ぶのが聞こえた。二羽のツルが大きな羽を広げ着地したとたん、一羽のツルがまた大きな羽を広げ宙にジャンプして地に着くともう一羽のツルも同じような行動をした。二羽のツルが交互に数回のジャンプを繰り返したがその姿は踊りを舞うように見えた。その姿のあまりの美しさに我を忘れ八ミリのシャッターを押し忘れていた。この時の最初の出会いで見たツルの美しさに魅せられ、その後の感動をほかの人々と分かちあいたいとタンチョウの撮影をして作品を発表し、タンチョウを生き物として後世の人に残したいと保護活動に力を注いでいる。

これまでの愛護会の活動はタンチョウ保護の啓蒙に大きな役割を果たし、今後の活躍を御祈念申し上げます。



北海道新聞社提供 撮影 岩松 健夫

昭和四十年 度

25	10	3・8	30	30	1・28	12・4	11・30	9・8	7・5	24	16	16	12	5・10	
文化財保護委員会、釧路湿原を天然記念物にする旨答申	ウ」の名称変更について意見聴取	特別天然記念物「釧路のタンチョウ」	下雪裡小、愛鳥優良校で知事表彰	特別天然記念物「釧路のタンチョウ」	管内給餌七校交流会開催(阿寒町)	特別天然記念物釧路のタンチョウ	第一回タンチョウ祭開催	第二回タンチョウ給餌校交流会	鳥取県倉吉市から剥製譲渡申請(道外から初めて)	阿寒町タンチョウ鶴愛護会発足	タンチョウ生息状況一斉調査	鳥取県倉吉市から剥製譲渡申請(道外から初めて)	阿寒町タンチョウ鶴愛護会発足	園視察	はぐれヒナ鶴人工飼育に成功

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

顧問

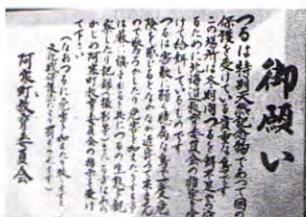
大野直栄(阿寒町長)、野沢定太郎(町教育委員長)
大沢彌志男(町議会議長)、松野政吉(市庁長、管内丹頂鶴保護会長)、中田富蔵(町社会文教常任委員長)
平邑光弘(釧路地方教育局長)、斉藤栄助(営林署長)
正富宏之(釧路博物館長)

役員名簿

会長	吉田勝美
副会長	横沢宇宙
事務局長	藤沢盛夫
書記	伊藤博通
理事	前田正雄
理	鎌田勉
理	太田佐市
理	大田晴一
理	木村弘
理	奥山良二
監事	加地浦
理	三山崎定次郎

愛護思想の普及

- ★ “日本のツル” 映画会
タンチョウの四季16ミリフィルム等を借用
上映PR
- ★ “日本のツル” 写真会
道新岩松健夫氏の作品等を借用
- ★ 給餌校生徒との交流会
管内給餌校児童生徒と町内子どもの交かん会



注意 札

保護事業

- ★ 給餌対策
給餌人の委嘱と飼料の配送及びドジョウの養殖
- ★ 一斉調査への協力
生息状況一斉調査に児童生徒と会員の協力
- ★ 飛来の分布と生息観察
阿中ツルクラブを中心とした鶴日記の継続記帖と生態資料の収集
- ★ 標識説明板の補修と新設
既設説明板の補修とPR用模型板の新設
- ★ タンチョウ保護パトロール
毎週1回給餌ヶ所の訪問と併せて保護のパトロール
- ★ 給餌功労者の表彰
委嘱給餌者と陰の給餌者として協力された方々を表彰する
- ★ タンチョウ愛護標語募集
タンチョウ鶴の愛護にふさわしい標語を募集、保護の関心を高める
- ★ 第1回タンチョウ祭



給餌場入口



41年

阿寒町教育委員会『タンチョウ祭』

昭和四十一年度

- 5・9 タンチョウ営巣地調査(九〇十五日)
(文部省吉川調査官来釧)
- 5・ 丹頂鶴自然公園でヒナの自然ふ化に初めて成功
- 19 釧路湿原に野火発生(十九〇二十一日) 北斗地区で巢一個焼失
- 9・2 タンチョウ早くも民家に飛来
- 9・ 国鉄茅沼駅を給餌場に依頼
- 10・14 タンチョウ生息地釧路湿原払下げ
- 11・24 愛知県片山与四郎氏からドジョウ二万匹贈られる。
- 12・3 タンチョウを守る子どもの集い開催
- 5 (文化財保護委員会藤井事務官) 及斎藤春雄氏来釧
- 5 タンチョウ生息状況一斉調査
一七〇羽確認、十市町
村四十三地区、協力学校六
十一小中高等学校
- 3・5 タンチョウ生息状況一斉調査十五周年を記念し、道教委から調査協力校及団体に感謝状及記念品が贈呈される
- 3・5 第二回阿寒町タンチョウ祭開催
- 3・5 タンチョウ音頭誕生

「タンチョウを守る子どもの集い」

- 一、趣旨 タンチョウを守る児童生徒が集い各校の実情を交換し、今後の一斉調査等タンチョウを守ることの充実を図るとともに文化財保護思想の普及を期する。
- 二、主催 北海道釧路地方教育局 釧路丹頂鶴保護会
- 三、場所 阿寒町、阿寒小学校
- 四、対象 管内タンチョウ一斉調査協力校
- 五、内容 感謝状、記念品贈呈
タンチョウのお話(斎藤春雄氏) 舞踊、歌唱指導、合唱
(橋本道博氏)

トウキビで補償

調査部 ツルの被害農家に
トウキビ(トウキビ)は、農作物に被害を及ぼす鳥類の一つである。調査部では、トウキビの被害を軽減するために、トウキビの生態や被害の状況について調査を行い、補償制度を設けている。トウキビの被害を受けた農家は、調査部へ申請し、補償を受けられる。トウキビの被害は、農作物の収穫量に影響を及ぼすため、農家はトウキビの被害を軽減するために、トウキビの生態や被害の状況について調査を行い、補償制度を設けている。トウキビの被害を受けた農家は、調査部へ申請し、補償を受けられる。



ドジョウ池へ放流

タンチョウツルの卵に被害



調査部 現地調査でわかる
タンチョウツルの卵に被害
調査部では、タンチョウツルの卵に被害を及ぼす鳥類について調査を行い、被害の状況を把握している。調査部では、タンチョウツルの卵に被害を及ぼす鳥類について調査を行い、被害の状況を把握している。調査部では、タンチョウツルの卵に被害を及ぼす鳥類について調査を行い、被害の状況を把握している。

釧路湿原を営巣地に

財務部と教育局話し合い
釧路湿原を営巣地に
財務部と教育局話し合い
釧路湿原を営巣地に
財務部と教育局話し合い
釧路湿原を営巣地に
財務部と教育局話し合い
釧路湿原を営巣地に

昭和四十二年 度

5・13 タンチョウ営巣地状況調査

(十三〜十五日)

6・22 タンチョウの名称及び指定地域変更

文化財保護委員会告示第五十号

特別天然記念物「タンチョウ」

地域を定めず(主な生息地北海道)

7・6 「天然記念物釧路湿原」五、〇一

一ヘクタール

8・26 日本動物学会第十八回大会で、正

富宏之、高橋良治氏「釧路のタン

チョウ自然公園において観察した

抱卵例」について報告する。

10・7 タンチョウ給餌人懇談会

十月七日 阿寒町

十月二十六日 鶴居村

11・2 タンチョウ剥製道外で展示

十一月二日 千葉市

十一月十四日 鳥取市

12・3 「タンチョウを守る子供の集い」

を開催

タンチョウ生息状況一斉調査

二〇〇羽確認

1・28 阿寒中学校、ツル観察十周年の集い

第三回阿寒町タンチョウ祭



昭和42年11月18

どじょうを空輸

愛知県の片山与四郎さん

タンチョウツルのエサにどじょうを三年間送り続けている愛知県一の宮の片山与四郎さん(五十)は、ことしもまた、二万匹のどじょうを送輸。関係者はこの遠く離れた片山さんの善意に感激している。このどじょうは、阿寒中学の特設のどじょう池に入れて、越冬するツルのエサになる訳だが、阿寒町でも、地元でも全国各地からお

運動きよ握り

町ぐるみの呼びかけ 阿寒

くられてくるエサに頼っては、町民の恥だが、町教委が呼びかけて、ツルのエサの握りきよ運動を展開する。阿寒町の農家の雑用には、このエサを握るツルが飛来して、エサ不足の不安が、エサ不足で、



ツルの好物どじょう

とつきを手に、ツルを守る阿寒中学の生徒

まれている獲物はマスコミで取りあげてから、全国各地から、善意のエサがわくわくして来るが、阿寒町教委では、そんな好意に頼る前に地元でエサ集めをしようと呼びかけているもので、それによると二戸で一本、一人で一握りのトウキビをよきよしようというもの。運動は今年から進められるが、各職団体や町内会、婦人会に働きかけて、小・中学生が各学校に持ち寄るもの。この働きかけには地元民も大いに賛同、早くも少しづつトウキビが持ちこまれており、関係者は嬉しさがよいと喜んでいる。この運動は地元阿寒ばかりでなく、釧路市や隣接村にも賛同者が



昭和四十四年度

4・16	教科書に「ツル日記」掲載される NHK札幌中央放送局、タンチョウ記録映画撮影（五月十九日） 塘路湖及び達古武近辺
9・28	釧路教育局、三年間の営巣調査結果を発表
10・6	タンチョウの電線事故対策、北電と協議
11・14	野生生物保護基金より愛護会に分配金 丹頂鶴音頭、ソノシート発注
11・26	タンチョウ生息状況一斉調査 二二二羽確認
12・5	釧路の陸上自衛隊一曾会（会長、川向源太郎氏、会員二十七名）、阿寒中学校ツルクラブに図書券贈呈
1	町給餌人懇談会
1	愛護会タンチョウ愛護ポスター
2・1	版画の作品募集小中学生に
2・16	タンチョウ撮影会 タンチョウ給餌人懇談会

中学校で使用する教育出版社版、国語教科書に阿寒中学校ツルクラブ「ツル日記」の一部掲載される。

——タンチョウ営巣状況調査結果——
一、定住地と断定できる営巣、生息地

釧路市

大楽毛の白糠境界線、北斗長沼、山花三か月沼

釧路村

釧路湿原の市

寄り、達古武沼

鶴居村

オンネナイ川

付近、久著呂川、雪裡川の合流点、雪裡川上流、宮島

周辺、キラコタン付近、ツルハシナイ川

下久著呂渡辺川、コッタロ川、ヌマオロ川上流

標茶町

塘路湖中島、二本松橋、塘路湖阿歴内寄

り、茅沼、下チャンベツ

阿寒町

厚岸町

浜中町

琵琶瀬湿原、藻散布沼

二、今後の調査方法

湿原内からの調査不可能のため山づたいに実施したが、正確なデータを得るため空中からの調査を計画する。

保護、育成の手伸びる



タンチョウツル

【公認】日本中のタンチョウ保護活動の中心となる。保護の重要性は、国内外の保護活動者から高く評価されている。保護活動は、タンチョウの生息地を保全し、繁殖地を確保し、繁殖活動を支援することによって行われる。保護活動には、繁殖地の調査、繁殖地の保全、繁殖地の開発防止、繁殖地の管理などがある。保護活動には、繁殖地の調査、繁殖地の保全、繁殖地の開発防止、繁殖地の管理などがある。

タンチョウの保護活動は、国内外の保護活動者から高く評価されている。保護活動は、タンチョウの生息地を保全し、繁殖地を確保し、繁殖活動を支援することによって行われる。保護活動には、繁殖地の調査、繁殖地の保全、繁殖地の開発防止、繁殖地の管理などがある。保護活動には、繁殖地の調査、繁殖地の保全、繁殖地の開発防止、繁殖地の管理などがある。

国際登録センター指定

悲願こめ、近く申請

多摩動物公園が名乗り

【公認】国際登録センター指定は、タンチョウの保護活動の中心となる。保護活動は、タンチョウの生息地を保全し、繁殖地を確保し、繁殖活動を支援することによって行われる。保護活動には、繁殖地の調査、繁殖地の保全、繁殖地の開発防止、繁殖地の管理などがある。保護活動には、繁殖地の調査、繁殖地の保全、繁殖地の開発防止、繁殖地の管理などがある。

昭和四十五年度

4・11	阿寒中学校、吉川英治賞受賞
5・1	タンチヨウ営業調査 ヘリコプターによる初調査 下雪裡小学校、NHK「日本の自然」で紹介される。
5・	タンチヨウ営業遅れる 遅い融雪、湿原水びたし
31	釧路タンチヨウ人工飼育センターで人工ふ化に成功、五月三十一日、六月二日、六月七日各一個ふ化
6・15	タンチヨウヒナ鶴居村道路上で保護、鶴公園で飼育
8・	釧路タンチヨウ人工飼育センターの保護柵拡張工事開始
8・	阿寒中ツルクラブ、HBC放送「ツルクと共に」に出演
9・8	人工ふ化タンチヨウ百日を迎える
12・3	阿寒でクロ鶴発見 (タンチヨウに渡り鳥説?)
5	タンチヨウ生息状況一斉調査 一七九羽確認、弟子屈町を除く九市町村協力小中学生二五二四人

あすから営業調査

環境など明らかに

初めてヘリ飛ばし



丹頂鶴の保護と繁殖のためにタンチヨウの調査

阿寒中学校、吉川英治賞受賞

吉川英治賞は、わが国の国民文学作家として親しまれた吉川英治氏の偉業を記念して設けられた賞で、日本文化の向上に尽くし、たえらるべき業績をあげながらも報いられたことの少ない人や団体に贈られる。

阿寒中学校ツルクラブは、代々の教師と生徒が一致協力してタンチヨウの保護活動を続け、教育面に良い結果をもたらしたことが認められ受賞された。



賞状

阿寒中学校殿

本会は選考委員会の推薦により貴校の先生生徒が一致協力し丹頂鶴の繁殖および保護活動に努めた成果をあげている業績を顕彰し、第10回吉川英治賞を贈ります。

昭和四十五年四月十一日

財団法人吉川英治賞振興会

理事長 大野 潤 有



学校長の謝辞

——吉川賞について語る——

横田 一斉調査で四十四年度は二二羽、昨年度は一七九羽を累計している。今回の一斉調査で自然公園のウェットが非常に大きくなった。

古谷 傷つたのも合わせて現在十九羽いる。

高橋 傷つたのは一月十七日に連れてこられたもので羽と胸を痛めている。

林田 十二月一回だけの調査では自衛隊の協力でも見落としているかもしれない。湿原が凍結餌の拾えない時期に調査すべきではないか。

横田 一斉調査が始まったのは昭和二十七年です。教育局の川村寿一君のアイディアで始まったがその年は数字として抜けているが、数値としては抜えない。翌二十八年から方法を統一し、三十三年から数える技術がうまくなっている。

司会 子備調査を置くようになったのは……

横田 二十九年ころで、午前九時で一斉調査に入るが、地上にいるのは区画割りができる。しかし空にいるのは網を引いていないのでダブって数える事態がでる。子備調査は事前と事後に十分間おいて移動関係をとりえるものである。

(昭和四十六年二月、釧路新聞社が開催した「日本のツルク、釧路のツルク」座談会から抜粋)

出席者
横田直成 釧路教育局社会教育係長
林田恒夫 北海道野鳥愛護会会員
古谷達也 釧路市教育委員会社会教育係長
高橋良治 丹頂鶴自然公園飼育人
司会 釧路新聞社堀川記者

昭和四十六年度

10・22

タンチョウ電線事故現地調査
道教委山田文明文化財専門員、
阿寒町鶴居村等現地視察

11・15

北海道電力道東支店、送電線にタ
ンチョウ用標識装着

20

阿寒ツル観察休憩所完成

12・4

タンチョウ生息状況一斉調査
一四七羽確認

協力学校数四十八小中学校
二七九五人

10

鶴居村にクロヅル飛来

3・4

山崎定次郎氏、釧路管内教育功績
者として表彰される。

カメラ公害から保護

阿寒 ツル観察休憩所完成

タンチョウの生息地である阿寒町鶴居村に、ツル観察休憩所が完成した。この休憩所は、カメラによる撮影によるカメラ公害を防止するため、ツル観察に最適な環境を整備した。また、観察者の安全を確保するため、柵を設置し、観察ルートを示している。この休憩所は、今年秋から利用される予定である。

147羽の生息を確認

タンチョウ 昨年より22羽減少

釧路教育局は七日、先月の道東一帯で、道東地区はまだ寒波の影響を受けておらず、エサが比較的豊富にある釧路地方に移って来なくてよかったのが原因らしい。同教育局は、今後急激な原因についてくわしい調査を予定している。

タンチョウ君標識見て



黒と黄色は危険 送電線54カ所に付ける

北海道電力道東支店が、タンチョウの生息地である阿寒町鶴居村に、送電線に黒と黄色の標識を装着する作業を行っている。この標識は、タンチョウが送電線を誤って接触することを防ぐために設置される。作業は今年秋から本格化する予定である。

昭和四十七年度

4・26

「特別天然記念物タンチョウ特別調査」
(四十九年度までの三ヶ年事業)
(翌年三月十五日)

営巣状況調査、生息状況調査

生息環境調査(昆虫、植物、鳥獣、魚類)

(翌年三月十五日)

7・12

タンチョウアメリカ貸出について
地元意見具申

アーチボルト氏タンチョウ保護について講演

送電線にポリエチレン標識管披覆

(北海道電力道東支店)

10・

タンチョウ生息状況一斉調査

二二二羽確認

余市町村で実施

四十七枚 三七〇〇人協力

下雪裡小学校、NHKテレビ「タンチョウを守る子供達」で全国に

生中継で紹介される。

タンチョウ骨格標本展示許可

(帯広畜産大学)

外務省海外広報映画「鶴と少年」

ロケ開始

野生動物規制国際会議小委員会、

タンチョウを規制の対象とする。

給餌場周辺での鉄砲乱射行為多発

釧路教育局長、関係機関に自粛に

ついて要請する。

3・16

最高の222羽を確認

生息地 徐々に広がる傾向

タンチョウヅル

【調査】調査隊が調査したタンチョウの生息地は、今年も徐々に広がっている。調査の結果、今年確認されたタンチョウの数は、前年より増加した。調査隊は、調査結果に基づいて、今後の調査計画を立てる。

調査結果によると、今年確認されたタンチョウの数は、前年より増加した。調査隊は、調査結果に基づいて、今後の調査計画を立てる。

ひん死のタンチョウ 愛の看護で命拾い

ことしの事故すでに13件

特別天然記念物タンチョウの事故死が相次いでおり、交通事故でけがをしたツルがドライバ、給当 渡辺さんもかけつけ手当てし

「ひといけがをされている」と高橋さんは、運布など応急手当てに懸命。連絡を受けた市の動物園担当者も駆けつけ、手当てしている。

先月、鶴公園へと次々にリリースされ、みんなの温かい手で生命の灯をともし続けている。

先月三十日午後八時ごろ、阿寒町の国道240号線で飛んでいた二羽のタンチョウのうち一羽が低空飛行のため、通行中のトラックに衝突した。「何だろう」と驚いた運転手が調べたところ、タンチョウで内出血がひどく、かなり重傷。「そのまま放置したら死んでしまう」と近くの給当人、山崎定次郎さんに運ばれた。エサを与えることになった山崎さん、渡辺さんの手当ては、丹頂鶴自然公園の高橋管理人へトリーした。

「ひといけがをされている」と高橋さんは、運布など応急手当てに懸命。連絡を受けた市の動物園担当者も駆けつけ、手当てしている。

た。渡辺さんは獣医学を専攻し、東京・多摩動物園ではタンチョウを治療したこともあるベテラン。急速な愛のリレーと高橋さんの応急処置でその後も手厚い治療を行ない、一番危険な「事故三日間」も無事、乗切った。

これまでけがをして元気を取戻したケースは二、三件しかなく高橋さんは「何をかして元気が回復してほしい」と手当てに励んでいる。年々、開発の「犠牲」になっているタンチョウの生命を守るため、すぐ保護して届けたドライバを、はじめ関係者の努力は心温まる話。今年になってタンチョウの事故死は二、阿寒川で発見された

昭和四十八年度

5・18 人工ふ化で五羽のタンチョウ誕生

タンチョウ営巣状況特別調査

ヘリコプター使用（六月四日）

6・2 環境庁、釧路でタンチョウ保護調査会議

6・ 「タンチョウと釧路湿原」リーフ

レット作製配布（釧路教育局・保護会）

11・2 下雪裡小学校、自然保護活動優秀

団体として道知事賞、道教育長賞を受ける

阿寒町加地良次氏、北海道文化財

保護功労者表彰をうける

タンチョウ農作物被害調査

12・5 28 タンチョウ生息状況一斉調査

二三三羽確認

1・24 タンチョウ生息状況調査

タンチョウ保護増殖センター着工

3・30 タンチョウ特別調査員会議

加地 良次 氏
北海道文化財保護
功労者表彰をうける



鶴は我ら阿寒町民初め生息地の人々の愛護精神により増殖しましたが、ヨシズ原野でなければ子育てできない。湿原ヨシズ地に集まる故我等の畑に姿を見ることがなくなり、給餌もできなくなることと思う時、この大自然の美が見られなくなるのを救う。昭和四十八年頃のように水田地に行くと必ず鶴が見える観光地でありました。中間に小川が流

私の長寿は鶴のおかげ



阿寒町 給餌人
加地 良次

れ、ヨシズの生えた沢と凹地。水田の中に鯉を育てるための池。田植の六月の初め、夫婦鶴は大空を飛ぶ。その姿は今もお心に残る私の長寿も鶴のおかげと鶴を敬し慕うものである。

タンチョウの人工ふ化
5 番目 元気よく

<<<釧路のツル公園>>>



人工ふ化で誕生したタンチョウの雛ちゃん

タンチョウと釧路湿原



親子ツル

北海道教育庁釧路教育局・釧路タンチョウ保護会

（新報）

昭和四十九年度

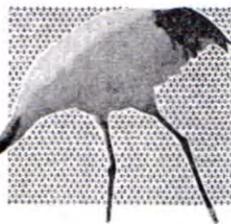
5・17	山火事で厚岸、標茶の営巣地二ヶ所消失
6・2	文化庁企画テレビ番組「美をもとめて」でタンチョウ放映される。財団法人日本自然保護協会から、給餌に対するアンケートくる。
7・13	タンチョウ踊り指導者講習会
8・15	タンチョウ特別調査（十七日）
10・30	鶴居村下雪裡小学校廃校となる。
11・9	下雪裡小学校閉校記念全校文集「鶴の子」発行
12・5	両陛下主催園遊会に阿寒町山崎定次郎氏招待される。
1・21	タンチョウ保護増殖事業、増殖センター完成後、環境庁へ移管について文化庁と合意
2・24	タンチョウ生息状況一斉調査 二五三羽確認
3・1	八市町村六十六小中学校 一九〇九人参加 岡山県からタンチョウの繁殖依頼くる。 タンチョウ特別調査で二六二羽生息確認
8	タンチョウの記念切手（二十円） 全国に四千万枚発売 林田恒夫氏、釧路管内教育実践奨励賞受ける。 全国子供の自然と小鳥と鶴会議、阿寒町で開催される。

S41～49年
タンチョウ一斉調査
阿寒町内の確認数

年度	全体	阿寒町
41	170羽	87羽
42	200羽	111羽
43	171羽	89羽
44	212羽	139羽
45	179羽	89羽
46	147羽	56羽
47	222羽	87羽
48	233羽	87羽
49	253羽	79羽



タンチョウのためすっかり食い荒らされたトウモロコシ畑



農作物食い放題

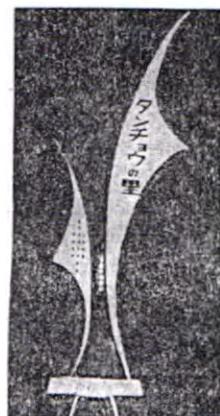
農家「馬のエサどうしよう」

おイタが過ぎる

阿寒
農家「馬のエサどうしよう」
阿寒町の農家は、タンチョウの増加に伴って、農作物の被害が深刻化している。特にトウモロコシ畑は、タンチョウの餌食となり、収穫量が激減している。農家は、タンチョウの被害を防ぐために、馬のエサとして利用していたトウモロコシを、タンチョウの餌食と見なしている。農家は、タンチョウの被害を防ぐために、馬のエサとして利用していたトウモロコシを、タンチョウの餌食と見なしている。



タンチョウの保護塔
阿寒 近く国道沿いに建てる



タンチョウ保護塔の完成
昭和49年11月16日

昭和五十年 度

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------------|-----------|----|---|---------------|---------------|--------------------------|-----|---------------------|---------------------------|-----------------|---------------------------|--------------|-----------------|----------------|
| 31 | 22 | 20 | 6 | 3・6 | 1・24 | 12・6 | 11・ | 9・9 | 8・14 | 6・ | 5・29 | 4・16 | 4・ | |
| 鉦路叢書「タンチョウの鉦路」刊行 | 農作物被害状況調査 | | | 無法カメラマン対策会議開催 | 石狩町にタンチョウ一羽飛来 | 第二回全国子供の自然と小鳥と鶴会議、阿寒町で開催 | | 阿寒町、無法カメラマンへの注意看板設置 | 「野性のエルザ」ジョイ・アダムソン女史、鶴公園訪問 | タンチョウによる農作物被害出る | 北海道電力、丹頂鶴の電線衝突事故防止対策をたてる。 | 航空機四機による空中調査 | 岡山タンチョウ総合打ち合わせ会 | 丹頂鶴自然公園で二羽人工ふ化 |

- ベビーブームの春——
今春第一号のタンチョウのヒナ二羽が人工ふ化で誕生。四十三年に人工ふ化に成功して以来、これで十二羽目の誕生となる。
- 岡山タンチョウと鉦路のタンチョウ番形成準備
- 豪雨による鉦路湿原異常冠水のため、営巣状況を調査、一四五羽生息、抱卵中十八個所
- 調印者―鉦路市長山口哲夫、岡山県知事長野士郎、立会人―北海道教育委員会教育長、気境公男
- 昭和四十六年度以来整備個数 三十個所
- 鉦路市農業協同組合長より被害届確認
- 給餌場を中心に飛来数調査を行い二三四羽確認
- 石狩川沿いに亜成鳥一羽飛来
- 道教委山本慎一文化課長補佐、土田文化財係長来釧し、被害者と協議

「エルザのおばさん」が鉦路へ
タンチョウと初対面

チョウは何やらくちまをくちまかきながら、ぼんやりと目をして、かみかみ頭髪を浮かべている。すうすうの熱心な、茶色アフリカのケニアで留守番をしている夫のジョー・シムスへの土産品にするのか、優美な、ツルの舞、きんぴら、カメラに納めていた。

アダムソンさんは昨日朝一泊、一日は岡田で十六日目に一泊、一日は鉦路市動物園で、四日目にテラパークをしたが、鉦路から車で約二時間離れた旭山の動物園を訪問。一日間滞在して旭さんと動物保護隊員を花を咲かせてたり、馬のふんやエンソカなど動物園のふん、と遊ぶ。



「本で見たことはあるが実物は初めて」と、タンチョウに見入るアダムソンさん

昭和五十一年度

6・20 愛護会、寝ぐら巡回等の保護対策をたてる

9・3 阿寒町タンチョウ観察センター建設計画できる

10・ 愛護会、町内のタンチョウ飛来地区十五ヶ所に注意板設置

11・25 文化庁横沢記念物課長に保護対策陳情する

11・26 タンチョウ保護活動用腕章十本・帽子四十個・小旗十本作成

12・6 生息一斉調査 二二〇羽確認

12・23 阿寒中学校ツル委員会に活動費助成

2・2 異常寒波でタンチョウの寝ぐらである阿寒川の川面が結氷。寝ぐら確保のため大型ブルドーザで氷割作業実施

カメラ公害に泣くタンチョウ



監視の目も届かず

阿寒町タンチョウ愛護会、住民と保護活動に

【阿寒町】阿寒町愛護会、タンチョウの保護活動を行っている阿寒町タンチョウ愛護会は、今年から阿寒町愛護会の活動が、阿寒町を離れていく。阿寒町タンチョウ愛護会は、阿寒町を離れていく。阿寒町タンチョウ愛護会は、阿寒町を離れていく。

阿寒町タンチョウ愛護会は、今年から阿寒町を離れていく。阿寒町タンチョウ愛護会は、阿寒町を離れていく。阿寒町タンチョウ愛護会は、阿寒町を離れていく。

いたすからタンチョウを守る 保護監視員増やして

【阿寒町】阿寒町愛護会は、今年から阿寒町を離れていく。阿寒町タンチョウ愛護会は、阿寒町を離れていく。阿寒町タンチョウ愛護会は、阿寒町を離れていく。

昭和五十二年年度

- 4・28 阿寒町タンチョウの里に有志が丹頂鶴慰霊塔を建設
金子信治 山崎定作 鏡谷 充 山崎定義 杉橋弘義
- 6・7 タンチョウ浴衣地購入幹旋
- 10・2 阿寒町開基九十周年・町制施行二十周年事業協賛タンチョウ踊りパレードを産業まつり実行委員会と共催で実施
- 11・1 タンチョウ観察センター新築オープン
- 11・10 愛護会タンチョウ保護思想啓発パンフレットの作成
- 12・5 生息一斉調査 二五七羽確認
- 28 HBC「凍てつく里に鶴が舞う」放映
- 12・13 ナベヅル保護状況視察（山口県熊毛町）。吉田会長他一名（〜17日）
- 1 1 NHK年始特集「新春に舞うタンチョウ」放映
- 2・21 タンチョウ、養殖場の幼魚捕獲被害出る
- 3・4 タンチョウ写真展（〜12日）



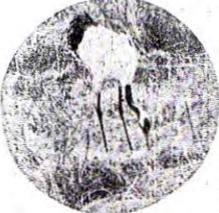
タンチョウの里に新名所

「丹頂鶴の里」は、昭和五十二年八月十日、新しく「観察センター」が開業した。このセンターは、丹頂鶴の観察と観光客の安全を確保するために建設された。建物は、自然環境と調和したデザインで、観察用の展望台や、展示室、休憩室などが備わっている。また、丹頂鶴の生態や保護の取り組みについて、パネル展示や映像で詳しく紹介している。このセンターの開業により、丹頂鶴の里は、ますます観光客にとっての新しい名所となることを見込んでいる。

観察センター開く
もう安心、観光客を「隔離」。

丹頂鶴の里は、観光客の安全と丹頂鶴の保護を両立させるために、新しく「観察センター」を開業した。このセンターは、丹頂鶴の観察と観光客の安全を確保するために建設された。建物は、自然環境と調和したデザインで、観察用の展望台や、展示室、休憩室などが備わっている。また、丹頂鶴の生態や保護の取り組みについて、パネル展示や映像で詳しく紹介している。このセンターの開業により、丹頂鶴の里は、ますます観光客にとっての新しい名所となることを見込んでいる。

昭和52年8月10日 釧路新聞



大もてのタンチョウワッフル
釧路

世界各国から欲しい
福田首相の願いも断る

「一カ所でも希望 放出は見送り」

丹頂鶴の里は、観光客の安全と丹頂鶴の保護を両立させるために、新しく「観察センター」を開業した。このセンターは、丹頂鶴の観察と観光客の安全を確保するために建設された。建物は、自然環境と調和したデザインで、観察用の展望台や、展示室、休憩室などが備わっている。また、丹頂鶴の生態や保護の取り組みについて、パネル展示や映像で詳しく紹介している。このセンターの開業により、丹頂鶴の里は、ますます観光客にとっての新しい名所となることを見込んでいる。

昭和五十三年度

8・27 市立釧路丹頂鶴自然公園創立二十周年

10・10 タンチョウ愛護標語募集

最優秀「タンチョウを守り育てるみんなの手」
(仁々志別小学校六年坂本富美代)

11・20 タンチョウ愛護広告塔の設置

12・5 生息一斉調査 二一四羽確認

1・30 タンチョウの絵はがき第一シリーズ販売

3・22 愛護会主催タンチョウ写真コンテスト入賞作品展 (4・10)

3・ 布伏内小学校で卒業記念に「丹頂鶴物語」編集

卒業記念集 「丹頂鶴物語」



布伏内の小学校には毎年、春になると数羽のタンチョウが舞い降りてくる。と川島教頭

生態などを克明に
観察をもとにまとめ上げる

◎画・布伏内小五・六年生、作・川森年雄教頭◎
丹頂鶴は、丹頂の鶴である。その名の通り、頭の上には赤い冠がある。その冠は、冬になると白く、夏になると赤く変わる。その冠は、丹頂鶴の最大の特徴である。丹頂鶴は、日本に生息する唯一の鶴である。その生息地は、北海道の釧路市にある。丹頂鶴は、毎年春になると釧路市に舞い降りてくる。その数は、毎年約200羽から300羽程度である。丹頂鶴は、美しい羽と優雅な姿で知られている。その生態や生活習慣について、丹頂鶴の観察者たちは、多くの貴重な情報を得ている。この本は、その貴重な情報をまとめたものである。丹頂鶴の生態や生活習慣について、詳しく紹介している。丹頂鶴の観察者たちは、丹頂鶴の生態や生活習慣について、多くの貴重な情報を得ている。この本は、その貴重な情報をまとめたものである。丹頂鶴の生態や生活習慣について、詳しく紹介している。

学校



昭和五十五年

8・17

産業まつり協賛丹頂鶴音頭踊りコンテストをタンチョウ鶴愛護会の主管で実施

12・4

国際ツル財団ジョージ・アーチボルト博士と撮影スタッフ阿寒の里に来町、PBS(米国公放送サービス)の撮影がおこなわれた。

12・5

一斉調査 二六七羽確認

12・1

阿寒町教育委員が専従のタンチョウ保護監視員一名を配置

タンチョウ保護、海外紹介

絶滅からの羽ばたき撮影

阿寒で米国のツル博士ら

昭和55年12月5日

【阿寒・鶴居】一時は絶滅に「だ」カナツル、アメリカシロツタツス、それに米国の野生動物園ひんしたタンチョウが、地元民の心な保護で生息数を増やしてき、ソテツクツルな七種絶滅が心配されるツルを取り上げ、生存の状況を探るフィルムに収録する計画だ。国際的なツル学者として知られる国際ツル財団(本部:米田ワシントン州バブラー)のジョージ・アーチボルト博士ら、米田博士と撮影スタッフ阿寒の里に入り、四日から放牧のフィルム撮影を開始した。

「絶滅からの飛翔(しよウ)」(TV From Extinction)というのが、国際ツル財団が、米田博士とロビン・マイヤー・ディレクター(米田博士のPBSスタッフが制作するこの番組のタイトル)が制作するこの番組のタイトル

まず阿寒町のタンチョウ観察センターに到着した一行は、アーチボルト博士とロビン・マイヤー・ディレクター(米田博士のPBSスタッフが制作するこの番組のタイトル)が制作するこの番組のタイトル

阿寒町教育委員が専従のタンチョウ保護監視員一名を配置

タンチョウ二六七羽を確認

道教委は去る十二月五日、昭和五十五年特別天然記念物タンチョウ生息状況一斉調査を実施しました。

調査結果は下表のとおりです。釧路管内では二百二十一羽(昭和五十四年度二百十八羽)、根室管内二十九羽(同二百八羽)、十勝管内十七羽(同二十五羽)と道東三支庁管内において合計二百六十七羽(同二百七十一羽)のタンチョウの生息が確認されました。

昭和二十七年の第一回調査が三十三羽以来今回で第二十九回目の調査となりましたが、実に八倍強の増加になってい

一度絶滅の危機に会ったタンチョウの将来に明るい希望が持てるようになって来つつありますが、未だ未だ安心は禁物です。この度の一斉調査で御協力をいただいた関係各位に、とりあえず紙上をもつて心から感謝申し上げます。

「くしろの教育」より



55.11.14 至新

シカ君 ひょこり

タンチョウ観察センター

タンチョウの給餌場を機切の森のエソシカ

【阿寒】阿寒町の観察センターに於いて、タンチョウの観察センターに於いて、シカ君(ひょこり)の給餌場を機切の森のエソシカ

観察センターに於いて、タンチョウの観察センターに於いて、シカ君(ひょこり)の給餌場を機切の森のエソシカ



ト博士は「番組のコピーは、タンチョウ観察センターに贈り、みなさんに見ていただく計画です」とにややかに話していた。

り、その様子も撮影することになった。初めて実物を見たが、美しい。他のツルよりすばらしい」とト博士のスタッフ、アーチボルト

昭和五十六年度

7・7	新千円札にタンチョウ登場 原画に林田恒夫氏の写真が使用される
10・1	阿寒町のタンチョウ飛来地域、鳥獣保護区に指定される
10・8	町内幼・小・中学校にタンチョウカラー写真寄贈
12・5	一斉調査 二九五羽確認
12・21	愛護会賛助会員制度発足、会員募集
1・1	タンチョウ鶴愛護会設立十五周年に賀茂鶴酒造(株)・日本清酒(株)に感謝状贈呈
1・	阿寒町教育委員会がタンチョウ鶴愛護会と協力して三ヶ年計画でタンチョウ生態調査を実施
3・10	愛護会「鶴のしおり」万葉シリーズ作成販売



阿寒町タンチョウ鶴愛護会長 吉田 勝美(かみ さとし)

タンチョウ愛護に賛助会

「そこが聞きたい」
全国から支援の手
 活動に参加が最大の特典

「阿寒町のタンチョウ鶴愛護会」は、昭和五十六年度、創立十五周年を迎えました。この間、全国から多くの賛助会員が加入し、活動の中心となってきました。その結果、鳥獣保護区に指定され、飛来地域も拡大されました。また、カラー写真が寄贈され、町内各所に展示されています。このように、全国からの支援が、阿寒町のタンチョウ鶴愛護会の活動を支えています。

「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は、昭和五十六年度、創立十五周年を迎えました。この間、全国から多くの賛助会員が加入し、活動の中心となってきました。その結果、鳥獣保護区に指定され、飛来地域も拡大されました。また、カラー写真が寄贈され、町内各所に展示されています。このように、全国からの支援が、阿寒町のタンチョウ鶴愛護会の活動を支えています。

「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は、昭和五十六年度、創立十五周年を迎えました。この間、全国から多くの賛助会員が加入し、活動の中心となってきました。その結果、鳥獣保護区に指定され、飛来地域も拡大されました。また、カラー写真が寄贈され、町内各所に展示されています。このように、全国からの支援が、阿寒町のタンチョウ鶴愛護会の活動を支えています。

「プロフィール」
 阿寒町タンチョウ鶴愛護会、昭和五十六年度、創立十五周年を迎えました。この間、全国から多くの賛助会員が加入し、活動の中心となってきました。その結果、鳥獣保護区に指定され、飛来地域も拡大されました。また、カラー写真が寄贈され、町内各所に展示されています。このように、全国からの支援が、阿寒町のタンチョウ鶴愛護会の活動を支えています。

昭和五十九年度

5・18 丹頂鶴音頭踊り用半てん作成

6・1 タンチョウをデザインした七宝焼のタイピンとカフスポタンを作成販売

販売

12・5 生息一斉調査 三二七羽確認

12・24 タンチョウ鶴愛護会で写真集「タンチョウー美と幼想の世界」(B四版・百二〇ページ)を刊行

昭和六十年年度

5・12 下徹別小学校が北海道社会貢献賞(野生鳥獣保護功労)受賞

5・15 新丹頂鶴音頭の指導者講習会実施

12・5 生息一斉調査 三八四羽確認

昭和58年11月27日

文化庁のタンチョウ保護事業 環境庁が担当へ

来年度鳥獣行政を一元化

鳥獣保護法に基づき、鳥獣保護の中心となるタンチョウの保護事業は、環境庁が担当することになった。文化庁は、鳥獣保護の中心となるタンチョウの保護事業を、環境庁に一元化する。環境庁は、鳥獣保護の中心となるタンチョウの保護事業を、環境庁に一元化する。文化庁は、鳥獣保護の中心となるタンチョウの保護事業を、環境庁に一元化する。

昭和60年3月27日



釧路湿原を飛ぶタンチョウ(20日午前10時、天知町内)

タンチョウ天塩に

日本海沿岸初の確認

釧路湿原から迷い込む?



鶴木のしげみになたずむタンチョウ(天知町内)

【天知】天知町の野田、原野の一角に、タンチョウの姿が確認された。これは、日本海沿岸初の確認と見られる。タンチョウは、釧路湿原から迷い込んで来たと考えられている。この発見は、タンチョウの生息域が広がっていることを示している。

昭和60年4月23日

町民ぐるみの踊りに

阿寒の新タンチョウ音頭振り付け

ふるさとまつりに披露



【阿寒】町民ぐるみの踊り、阿寒町では、阿寒町内でも、阿寒町タンチョウ音頭を披露して、四十二年の歴史を誇る。阿寒町タンチョウ音頭は、阿寒町内でも、阿寒町タンチョウ音頭を披露して、四十二年の歴史を誇る。阿寒町タンチョウ音頭は、阿寒町内でも、阿寒町タンチョウ音頭を披露して、四十二年の歴史を誇る。

昭和六十一年度

6・8	丹頂鶴音頭の普及(ふるさとまつり)
8	タンチョウ絵ハガキ第五集発行 (三千部)
9・14	丹頂鶴音頭の普及 (阿寒神社秋季例大祭)
10・5	丹頂鶴音頭の普及(開基百年記念)
12・5	一斉調査協力
12・15	小魚池水槽増設・上家改築
12・20	タンチョウ保護情報紙第七号の発行(三百部)
12・25	テレホンカード作成販売 (二種類三百組)
12	給餌活動(小魚三百kg)
	餌募金活動(観察センター)
	飛来地の監視活動(3月)
	生息環境調査
2・1	会員・賛助会員タンチョウ写真展 (展示三十点) (3/30)

阿寒のタンチョウ1羽



大げし保護 怒関係者



重体のタンチョウを抱く観察センターの山崎さん

アマカメラマンの光で、目つぶし、電線に衝突

【阿寒二十日交、新・タンチョウ観察センターから】ヨウ羽電線衝突、大規模なタンチョウ保護活動に、アマカメラマンの光で、目つぶし、電線に衝突。このタンチョウ保護活動は、阿寒町タンチョウ保護会が主催するもので、観察センターの山崎さんが中心となって行われている。この活動は、タンチョウの生息環境を調査し、保護を目的としている。観察センターでは、タンチョウの保護活動の一環として、アマカメラマンの協力を得ている。この活動は、タンチョウの生息環境を調査し、保護を目的としている。観察センターでは、タンチョウの保護活動の一環として、アマカメラマンの協力を得ている。

百羽以上優雅な姿

阿寒町タンチョウ観察センター

テレホンカードを新発売

「阿寒」の美しい自然を、阿寒町タンチョウ観察センターに飛来するタンチョウの姿を、百羽以上の優雅な姿を捉えています。これらは、阿寒町の自然環境を、阿寒町タンチョウ観察センターが撮影したものです。また、このカードは、阿寒町の自然環境を、阿寒町タンチョウ観察センターが撮影したものです。

阿寒町の自然環境を、阿寒町タンチョウ観察センターが撮影したものです。また、このカードは、阿寒町の自然環境を、阿寒町タンチョウ観察センターが撮影したものです。

タンチョウの生息地 釧路湾原国立公園指定記念

テレホンカード

限定2,000セット 近日発売!!

テレホンカード50

テレホンカード50

●2枚セット
(タンチョウ観察センター)
(台紙つき)
1,600円

昭和六十二年年度

6・8	丹頂鶴音頭の普及
8・15	前田一步園賞受賞を記念してタンチョウ里帰りクイズ実施 応募総数 一二三二通 里帰り日、9月14日(43通)
10・5	ピタリ賞 一名 ラッキー賞 三名 ふるさとまつり、秋まつり行事の折りにパレード実施
12	給餌活動 小魚二百kg、寄贈トウモロコシ五百kg トウモロコシ 一五二俵(道教委) 小魚千kg、給餌畑二十アール (町教委) (3月)
12	飛来地の監視活動 飛来地の羽数調査 ねぐらの監視活動 一斉調査の協力 町内 一七羽 全体発見数四二四羽 (成三八一、幼四三羽)
12・5	テレホンカード作成販売 二種二千枚発行、一九六〇枚有料販売 保護情報の発行 タンチョウ保護情報第八号五〇〇部 替助会員三〇〇名に送付
12・25	絵ハガキ作成販売 作成二千部 販売一九〇〇部 じよ・かてい鶴水墨画展 保護思想普及の一環として実施三五点 会場(公民館・観察センター) サイン会開催(29日)
3・1	タンチョウ写真展(観察センター) 賛助会員を中心に募集展示点数二十点 (30日)

タンチョウ記念館誘致へ

期成会が発足

【阿寒】道立タンチョウに向け積極的な運動を進める記念館誘致期成会の設立総会がこのほど、役場で開かれ、記念館の早期実現に向け、道立タンチョウ記念館期成会(会長 吉田勝美)と協力してまわった。タンチョウを絶滅の危機から救った給餌(給)活動発祥の地である阿寒に、北方圏に生息する九種のツルを集め、保護増殖を図ろうというもの。

道立としたのは、タンチョウは三十九年に道島に指定されており、道が進める北方圏諸国との交流にも意義があること判断したためで、町長に佐藤八夫町長として道や関係機関への陳情を行うほか、資料収集に当たっていくことを確認した。



受賞に決意も新たに

前田一步園 喜びの阿寒・愛護会 賞の授賞式

第五回前田一步園賞の授賞式が十一日午前十一時から釧路支庁で行われた。前田一步園賞は自然保護などに功績のあった団体と個人に贈られるもので、この日、前田一步園財団から表彰されたのは阿寒町タンチョウ愛護会(吉田勝美会長)と阿寒町字中央と苫前郡羽幌町大字天売字窟

磯四五の漁業、青塚松寿さん(左)の一人。授賞式では、前田一步園財団の前田三郎理事長から表彰状と副賞の二十万円が贈られた。前田一步園理事長が「前田一步園賞は財団が発足した五十八年に設け、自然保護に貢献した団体や個人に贈っている。今後自然保護のために、松寿さんが「立派な賞をもらい感激している。今後オロ

尽力してもらいたい」とあいさつした。引き続き環境庁阿寒国立公園管理事務所八重樫英樹所長、釧路支庁の新覚雄三支庁長が「今後も自然保護普及のために協力して下さい」と来賓あいさつ。受賞者の青塚松寿さんが「立派な賞をもらい感激している。今後オロ

ロン鳥などの保護に努力したい。また阿寒町タンチョウ愛護会の吉田勝美会長は「前田一步園財団の趣旨に沿い、タンチョウツルの保護のため、会だけでなく町をあげて取り組みたい」と決意を新たに示した。

釧路支庁で行われた前田一步園賞の授賞式

昭和六十三年年度

9・19	姉妹都市交流事業 (阿蘇町においてタンチョウ写真ハネル展二十点)
10・6	タンチョウ環境調査 (15・16日) (10・20日)
10・21	映画鑑賞会「つる」公民館六六三名
11・1	阿寒国際ツルセンター誘致署名活動 (観察センター) 一〇七五人 (10・31日)
11・5	ツルセンター誘致事業 アメリカICF調査と協力要請 (11・19日)
12・5	一斉調査の協力
12・5	給餌活動
2・3	飛来地の監査活動
2・15	餌募金活動 (観察センター) (2・3月) (2・5日)
3・24	タンチョウ環境調査 (観察センター) (3月) (3月31日) ICF理事長アーチボルト博士招聘 (25日)

世界的に頼れる人

ツル研究博士号 国際センター誘致に弾み



阿寒町生まれの阿寒町国際センター誘致に弾み

24日来釧、25日阿寒で講演

【阿寒】「招きつれて来よう」と、阿寒町民に呼びかけた。阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。講師は、米国ワシントン州にある、阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。

来釧の日が心待ちされる。阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。

網走原産のラムサール条約指定地になった阿寒町。阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。

記念館誘致に弾み 「つる(鶴)」の上映に800人



阿寒町の阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。

阿寒町の阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。



63年3月8日

タンチョウ解説書 道が初めて作製へ

小中学校の郷土学習に

阿寒町の阿寒町国際センター誘致に弾みとなる講演会が、24日(金)阿寒町の阿寒公民館(無形)で行われ、阿寒町長、副町長、町民ら約百人が参加した。

平成元年度

12

募金活動 観察センター赤いペレ

総額 一五七、一九四円

12

販売事業 絵ハガキ

No.五シリーズ五五〇部

No.六シリーズ一二五四部

タイピン七宝九〇個、液晶二九個

鶴レターセット一〇〇セット

図書 十七部

12

給餌活動 小魚 二〇〇kg

寄贈トウモロコシ四五〇kg

トウモロコシ一五二俵(道教委)

小魚千kg

給餌畑二〇アール 町教委

(3月)

12

飛来地の監視活動

飛来地の羽数調査

ねぐらの監視活動

12・5

一斉調査の協力

阿寒町四六羽(成四一羽幼五羽)

全体三五六羽(成三三〇羽幼二六羽)

補足調査

阿寒町二二三羽(成一一〇羽幼一三羽)

全体四四一羽(成四〇一羽幼四〇羽)

タンチョウ写真展

アマチュア写真家を対象に募集

(観察センター 二十点)

(3・31)

2・26

道立阿寒国際ツルセンター誘致に

かかるタンチョウ総合調査

道立阿寒国際ツルセンター 誘致めざし米国視察

増殖など学び帰国

阿寒の佐藤課長ら 陳情案の作成に活用



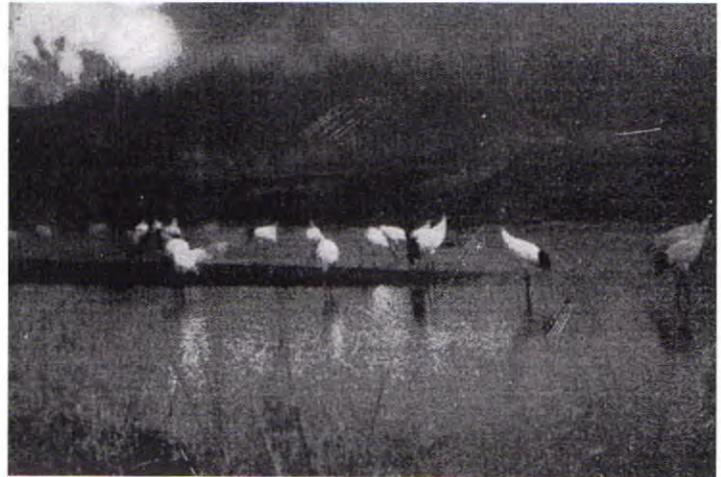
【阿寒】(仮称・道立阿寒国際ツルセンター)の誘致を目指している阿寒町の佐藤照雄・税務課長(右)が、米国の国際ツル財団本部などを視察、このほど帰国した。米国では、進んだツルの増殖研究など知識を深め、「町が誘致を目指す施設の構想に重要なデータがそろった」としている。

タンチョウの研究者、正富宏之・専修大短大教授と釧路市内の札木ゆりあさん、そして阿寒町タンチョウ鶴愛護会事務局長でもある佐藤さんの三人が六日に出発、十九日に帰国した。国際ツル財団(ICE)は世界に生息する十四種のツルの増殖研究などを進めており、本部は米国ウィスコンシン州アラブーに六十四軒の敷地と飼育施設などを持つ保護・研究機関。一行はここで、自然のバランに成育条件が左右されるツルの保護状況、また一般市民とツルのふれあいなどをじっくりと見学した。また、ワシントン郊外の国立ツル増殖センター、テキサス州の白ツル越冬地も回り、施設概要などについて知識を深めてきた。

米国視察から帰国した佐藤・阿寒町税務課長

平成二年度

販売事業	11
絵ハガキ	一四〇〇部
タイピン	七宝 二〇個
液晶	十一個
鶴レターセット	六七セット
図書	五五部
写真集	一四五部
	(3月)
給餌活動(小魚、トウモロコシ)	11
飛来地監視活動	12・5
調査・ねぐらの監視活動	1・16
一斉調査の協力	1・25
全体	2・15
阿寒町	1・16
道陳情	1・16
自然保護課(吉田勝美会長)	1・16
補足調査	1・25
全体	2・15
町内	1・16
タンチョウ写真展	1・25
(アマチュア写真展)	1・25
	(3・31)
学術研究の資料の収集	年間
自然保護に関する学術研究資料	年間
ツルセンター誘致にかかる調査事業	年間
中国ザイロン自然保護	年間
北京動物園 佐藤昭雄事務局長視察	年間
ふるさと創生基金にかかる	年間
タンチョウプロジェクトへの協力	年間
その他	年間



北海道新聞社 提供 撮影 岩松 健夫

結構いてよかったネ

タンチョウ一斉調査
子供らも満足げ

【旭川、阿寒】タンチョウの一斉調査が行われた五日、阿寒町のタンチョウ観察センター、旭川市の野見山、釧路地方の生田沼や飛来地でも、小、中学生らが「羽すつ強いのをもっと調査したかった」と満足げな顔をみせた。今年には、これまで以上に多くの子どもが参加し、調査の成果が報告された。



「今年はどうかな」一、釧路地方でも小、中学生が熱心に数えた。午前9時、阿寒町タンチョウ観察センター

日本鶴の会の「鶴居・咲いて良かった」という伊藤サンチュアアには、羽も一斉調査の十羽ほどは午前八時十分の観察調査、及びはなつたもの三十三に合わせ、旭川、野見山、羽の数は、旭川市の児童生使は二十人が集まり、また阿寒町・ペンシルベニア、旭川の合同で合わせてア州のレレド、旭川「日本の海を中せ教える」が、社会や地、アーマ、旭川の十羽といふ調査数を、材にあり、タンチョウについて子供らも「観察保護のためには、子供たちが参加する必要がある」と話している。

外壁の装いも新たに

阿寒町タンチョウ観察センター 飛来は今月中旬頃

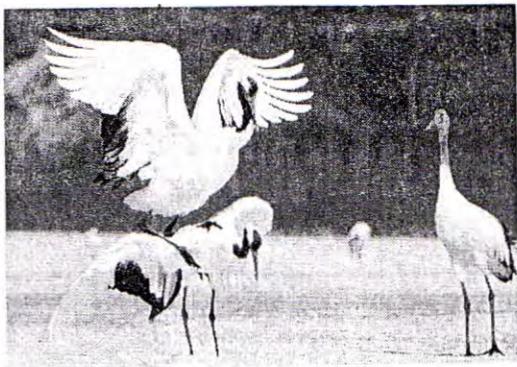


阿寒町のタンチョウ観察センターが一日オープンした。一は、旭川の自然を愛する人々の願いが実現した。阿寒町のタンチョウ観察センターが一日オープンした。一は、旭川の自然を愛する人々の願いが実現した。阿寒町のタンチョウ観察センターが一日オープンした。一は、旭川の自然を愛する人々の願いが実現した。

タンチョウも人も嬉しい。阿寒町のタンチョウ観察センターが一日オープンした。一は、旭川の自然を愛する人々の願いが実現した。阿寒町のタンチョウ観察センターが一日オープンした。一は、旭川の自然を愛する人々の願いが実現した。

平成三年 度

4	丹頂鶴音頭普及事業 音頭保存専門部会々員募集一〇九名 普及活動	12・5	一斉調査の協力 阿寒町六二羽(成四九・幼十三) 全体四二一羽(成三五七・幼六四) 補足調査 阿寒町一四一羽 (成一一八・幼二三)
5・8	ビデオテープ録音テープ配布 各幼稚園、小中学校 十二枚 講習会布伏内小学校 三十五名 ふるさとまつり中止 調査 正富教授 ICF釧路 タンチョウ保護監視調査事業 悪質カメラマン等に対する監視活動、飛来地やねぐらの環境保全 監視員 佐久間三男 調査員 百瀬邦和(山科鳥研) (3・31)	1・24	全体 五五七羽 (成四八〇・幼七七) ツルセンター建設にかかる調査事業 陳情 釧路支庁 タンチョウ写真展(観察センター) アマチュア写真一五点 販売事業 絵ハガキ No.六 一三三〇部 鶴レターセット 五十セット 写真集 一〇五部 (3・31)
5・13	調査 正富教授	1・30	
6・2	ふるさとまつり中止	2・1	
9・30	調査 正富教授	2・7	道庁(吉田勝美会長) (3・31)
10・5	ICF釧路		
11・1	タンチョウ保護監視調査事業		
年間	学術研究資料の収集 「タンチョウの生活誌」 レーザーディスク鶴の日記 他二六点 給餌活動 小魚二〇〇kg 寄贈トウモロコシ六〇〇kg美唄市 老人クラブ連合会 他にトウモロコシ五ヶ所二九四袋 @三〇kg道教委 小魚千kg 給餌畑二十アール 町教委 (3月)		



美しい愛のしぐさ
—阿寒町タンチョウ観察センター—
社員 大窪 泉
(恵庭市・34歳)

町民温かく出迎え
阿寒
タンチョウ観察へ
大窪 泉

平成四年度

記念碑設計調査

丹頂鶴音頭普及事業

阿寒町ふるさとまつり

タンチョウポスター募集

小・中・高の児童生徒を対象に広く募集し愛護思想の普及高揚に役立つ

絵ハガキ印刷

給餌活動

タンチョウ保護監視調査事業

タンチョウ写真展(観察センター)

タンチョウポスターを公民館観察センターに展示する

一斉調査の協力

ツルセンター建設にかかる調査事業

資料販売事業

文献、写真等学術研究資料の収集

5	記念碑設計調査
5・22	丹頂鶴音頭普及事業
6・7	阿寒町ふるさとまつり
9	タンチョウポスター募集
10	小・中・高の児童生徒を対象に広く募集し愛護思想の普及高揚に役立つ
11	絵ハガキ印刷
11	給餌活動
11	タンチョウ保護監視調査事業
11・1	タンチョウ写真展(観察センター)
12	タンチョウポスターを公民館観察センターに展示する
12・5	一斉調査の協力
年間	ツルセンター建設にかかる調査事業
年間	資料販売事業
年間	文献、写真等学術研究資料の収集

平成4年2月13日

国際ツルセンター実現へ

期成会が道に陳情

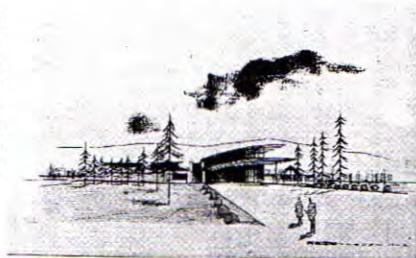
施設の基本計画書を提示

阿寒

【阿寒】タンチョウをはじめ、世界中のツル五種を飼育展示するが、ツルを中心に幅広い自然保護に関する知識としての性格を持つ。阿寒町タンチョウセンターの建設に向け、同センターの計画を策定した期成会(会長・月俣俊昭)は、このほど道庁を訪れ、陳情を行った。

同センターは、道庁中の教育展示場が整備されツルを飼育・展示することを、センターと入で、タンチョウの独自性を「エカホ」は、内部に保護の知り生環境維持を考える。展示場の建設費は約億円に達するが、自然保護・学術研究の性格を容れ、レジャー・ムツ持つ教育活動に力点を置いた。陳情書は、道庁内、管理部門の各部署に送られ、人工花

! 展示の丹頂鶴センター。建設中の様子を見学するなどの部署が設けられ(約六千万円)を、野外教育展示場、世同教団内にツルセンター。界各地のツル五種を飼育し、人工花壇、生野原外すふ角ケーシ一機、人工



国際ツルセンターの完成予想図

平成4年10月29日

冬のタンチョウの生態調査に本腰

阿寒町 温度計測器を設置



温度計測器を埋め込む町教委の職員

【阿寒】阿寒町の冬、タンチョウの生態調査に本腰を入れた。阿寒町教委は、タンチョウの越冬地である阿寒川下流に、温度計測器を設置し、越冬地の環境変化を調査する。調査は、阿寒川下流に設置された温度計測器のデータを、阿寒町教委の調査員が定期的に採取し、阿寒川下流の環境変化を調査する。調査は、阿寒川下流に設置された温度計測器のデータを、阿寒町教委の調査員が定期的に採取し、阿寒川下流の環境変化を調査する。

【阿寒】阿寒町の冬、タンチョウの生態調査に本腰を入れた。阿寒町教委は、タンチョウの越冬地である阿寒川下流に、温度計測器を設置し、越冬地の環境変化を調査する。調査は、阿寒川下流に設置された温度計測器のデータを、阿寒町教委の調査員が定期的に採取し、阿寒川下流の環境変化を調査する。調査は、阿寒川下流に設置された温度計測器のデータを、阿寒町教委の調査員が定期的に採取し、阿寒川下流の環境変化を調査する。



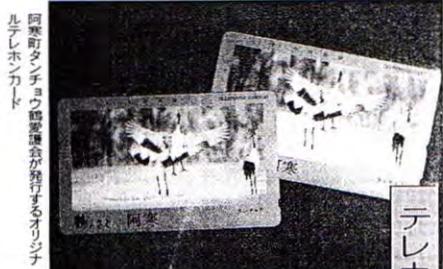
期成会(左)と阿寒町教委(右)の協議の様子



平成五年度

6・6	丹頂鶴音頭普及事業 ふるさとまつり三十名参加(トレー ニングセンター)
11・1	ツルセンター建設にかかわる記念 碑建立事業 タンチョウ保護監視調査事業 飛来地やねぐらの環境保全のため 基本調査事及び保護環境の巡視事業 監視員 山崎定義 調査員 百瀬邦和 山階鳥研 (3・31)
11	給餌活動 小魚二〇〇kg トウモロコシ二九四袋 道教委 小魚千kg 給餌畑二〇アール 町 教委 (3月)
12・4	一斉調査の協力 阿寒 一五二羽(成一三七・幼一四) 全体 四七九羽
1・8	丹頂鶴写真展 中国吉林省対外文化交流協会主催 による丹頂鶴写真展(観察センター 半切版五十点)
1・16	写真家 文俊生氏が来町(14日) 後援事業 第十一回丹頂フェスティ バル
1・25	第二回調査 町内 一八九羽(成一六九・幼二〇) 全体 六二八羽(成五六六・幼六二)
年間	販売事業 絵ハガキ及びテレホンカード作成販売 愛護実践校助成

北海道新聞(夕刊)



テレカで協力タンチョウの里づくり

【阿寒】町では、阿寒国際ツルセンターを、同町二十三編(通称、タンチョウの里)に建設する。この建設は、特別で、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

同町は、ふるさと創生事業として五つのプロジェクトを決定したが、同センターの建設は、特別で、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

同町は、ふるさと創生事業として五つのプロジェクトを決定したが、同センターの建設は、特別で、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

平成6年(1994年)2月26日(土曜日)



本格的な鶴の研究を
オープン 総事業費は8億8千万円

【阿寒】町では、阿寒国際ツルセンターを、同町二十三編(通称、タンチョウの里)に建設する。この建設は、特別で、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

同町は、ふるさと創生事業として五つのプロジェクトを決定したが、同センターの建設は、特別で、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

同町は、ふるさと創生事業として五つのプロジェクトを決定したが、同センターの建設は、特別で、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

国際ツルセンター建設へ

自然の状態を残すツルセンターの建設は、阿寒町の発展に大きく貢献する。その計画が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなど、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円。オープン後は平成八年度の予定。

平成八年度

3・8	3・10	12・1	12	11	10	7	4	4	4
				5					26
<p>阿寒国際ツルセンター開館 愛護会事務局を阿寒国際ツルセン ター内に置く 阿寒町タンチョウ鶴愛護会賛助会 員の募集を開始する ツルセンター内に売店設置、ツル グッズ等の販売を開始 阿寒国際ツルセンターの事業活動 に伴うボランティアの受け入れと 養成を行う 愛護会会報（鶴群）を発行開始 （第一号〜四号） 阿寒町ふるさと祭りに於て、町内 会婦人部を中心に丹頂鶴音頭が踊 られ親しまれる タンチョウ保護増殖事業（給餌事 業）を町の委託を受け実施 （〜3月） ツルセンター内に愛護会管理にお ける「清涼飲料自動販売機」を設 置する タンチョウ保護監視事業を町の委 託を受け実施 （〜2月） タンチョウ生息状況一斉調査への 協力 タンチョウ「阿寒の里のなかまた ち」発行（道新野生物基金より 助成を受ける） 第一回タンチョウ観察会の実施・ 十五名参加（展示施設見学・タン チョウ観察のしかた）</p>									



〈阿寒国際ツルセンター〉

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
会員を広く募集

☆ 阿寒町タンチョウ鶴愛護会の歴史
「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は、昭和40年に発足して以来長年にわたり保
護活動の歩みを経てきました。これまでに、タンチョウの給餌活動をはじめ飛
来地やねぐらの監視活動、丹頂鶴音頭の普及、愛護発祥の碑の建立、ツルに関す
る資料の発行などタンチョウの保護や保護思想の普及活動を幅広く行ってきまし
た。おかげで今日、タンチョウの愛護地である湿地の環境が年々悪化する中で、
この阿寒町には毎年、およそ300羽の群れが越冬する一大鶴の楽園となり、全
国から訪れる多くの人々に保護の情を見せてきています。
このように、タンチョウが飛び交う平和な郷土をこのまま次の世代に引継ぎ、
人と鶴が共存できる環境を保全していく努力が今、私たちに求められています。

☆ 阿寒町タンチョウ鶴愛護会は
従来から行ってきたタンチョウの保護活動を発展させながら、更にツルの調査
研究と教育活動を主な目的に設置された阿寒国際ツルセンターが行う事業活動に
協力して、ツルと共存する地域の発展に寄与することとしています。
① タンチョウ保護のために給餌や監視活動を行います。
② ツルに関する学習会、観察会、展示会などを開催します。
③ 会報や解説書等の出版物を刊行し頒布します。
④ 国際ツルセンターの事業活動に協力します。
⑤ 国際ツルセンターの活動を支援するボランティアを養成し窓口になります。
⑥ ツルの保護思想を普及するために、グッズを開発し販売します。
⑦ その他、丹頂鶴音頭やタンチョウ愛護発祥の記念碑を保存する活動を行いま
す。

会員になると
★タンチョウ鶴愛護会が発行する会報やツルに関する資料のほか、国際
ツルセンターの事業案内など新しい情報を逐次お送りします。
★国際ツルセンターの売店で5%引き（レタカなど一部商品を除く）の
サービスが受けられます。

あなたもタンチョウ鶴愛護会の活動に参加しませんか。

◎ 一般会員 年・一口 2,000円
◎ 法人会員 年・一口 20,000円
* 会費は年度毎の会費です。入金をもって
会員となります。
* 会員になりますと会員証を発行します

口 鶴群の発行
愛護会では、
会員を対象に年
六回奇数月に発
行する。ツルに
関わる情報の提
供を内容に、又、
会員からの随想
もとり入れ会員
相互の交流も
図っていく。

口 愛護会事務局をツルセン
ター内に平成八年四月二十
六日、阿寒国際ツルセンタ
ーの開館に伴い、阿寒町タン
チョウ鶴愛護会の事務局を
センター内に置き、阿寒国
際ツルセンターが行う事業
活動に協力すると共に、タ
ンチョウを通して地域の発
展への寄与を目指す。



ツル愛護ボランティアも募集

阿寒町タンチョウ鶴愛護会は阿寒国際ツルセンターとともに、ツル保護活動の
発展をめざし、ボランティアを養成してサービス活動を行います。

□ 解説部門
来訪者の希望によりツルセンターの展示施設、研究施設、生体野外展示
施設やツルの最新情報について解説しながら案内いたします。

□ 施設部門
ツルセンター内外の環境整備、タンチョウの飛来地やねぐらの環境整備な
どに従事します。（ボランティアの詳細についてはご相談いたします。）

タンチョウ鶴愛護会組織の見直し

・阿寒国際ツルセンターの開館に伴い、地元タンチョウ保護関係者の代表をもって組織されていたタンチョウ鶴愛護会の組織を広く町内外に開かれたものにした。
 ・具体的にはツルセンターの設置目的と連携しながら広く機能を充実・発展させるため町内外からより多くの参加と支援を求める必要から関心を持つ協力者の自主的な会員制度による組織とした。

会則の見直し

これら組織化の見直しに伴い会則を改正する

阿寒町タンチョウ鶴愛護会 会則
 (名称及び事務所)

第1条 この会は、阿寒町タンチョウ鶴愛護会と称し事務所を阿寒国際ツルセンター内に置く。

(目的)

第2条 この会は、タンチョウをはじめとするツル類の保護活動を行うとともに、阿寒国際ツルセンター(以下「ツルセンター」という。)が行う事業活動に協力し、ツルの保護とツルと共存する地域の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 この会は、前条の目的を達成するため、ツルセンターとの緊密な連携の

もとに、次の各号に掲げる事業を行う。
 (1) タンチョウの給餌、監視など保護活動に関する事。

(2) ツルに関する学習会、展覧会その他の催しを開催するほか、他の行うこれらの催しに協力すること。

(3) ツルに関する資料を収集するとともに、会報及び解説書等の出版物を刊行、頒布すること。

(4) ツルセンターの事業に協力すること。
 (5) ボランティアの養成と活用に関すること。

(6) 丹頂鶴音頭の普及およびタンチョウ愛護発祥記念碑の保存に関する事。
 (7) ツルの保護思想を普及するために、オリジナルグッズの開発及び販売活動を行うこと。

(8) その他、この会の目的達成に必要な事業。

(会員)

第4条 この会の会員は、一般会員、及び法人会員とし、この会の目的に賛同し、その事業活動に賛同し、その事業活動に参加、支援するもので構成する。

(役員)

第5条 この会に、次の役員を置く。

- (1) 会長 一名
- (2) 副会長 二名
- (3) 理事 若干名
- (4) 常務理事 一名

- (5) 監査 二名
- (6) 会計 一名

(役員の選出)

第6条 会長、副会長、理事及び監査は総会に於て選出し、事務局長及び会計は会長が委嘱する。

(役員の任期)

第7条 役員は任期は二年とする。ただし再任は妨げない。

2 補欠又は増員により選出された役員は任期は前任者又は現任者の残任期間とする。

(役員の仕事)

第8条 会長は、この会を代表し会務を総理する。

- 2 副会長は、会長を補佐する。
- 3 常務理事は、会長の職務を代行する。
- 4 監査は、会計及び業務の執行状況について監査する。
- 5 理事は、この会の運営及び事業等を推進する。
- 6 事務局長は、この会の事務を掌る。
- 7 会計は、この会の経理事務を掌る。

(事務局及び職員)

第9条 この会の事務を処理するため事務局を設け、職員を置くことができる。

2 職員は会長が委嘱し、庶務、会計及び販売活動に従事する。

(顧問)

第10条 この会に顧問を置くことができる。

- 2 顧問の委嘱については、役員会にかかり会長が決定する。
(会議)
- 第11条 この会の会議は、定期総会、臨時総会、役員会とする。
- 2 定期総会は、年一回会長が招集し、事業計画、事業報告、予算、決算、役員選任、会費の額の決定、会則の変更、その他重要事項について審議決定する。
- 3 臨時総会は、会長が必要と認めるとき、又は会員の三分の一以上の要求があったときに会長が招集する。
- 4 総会は、一般会員、及び法人会員をもって構成する。
- 5 役員会は、会長が必要と認めるときは臨時開催することができる。
- 6 会議は、出席会員により成立する。また議事は出席会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。
(会費)
- 第12条 この会の年度会費は次のとおりとする。
- (1) 一般会員 一口 二〇〇〇円
- (2) 法人会員 一口 二〇〇〇〇円
- (役員及び職員の報酬)
- 第13条 この会の職員には報酬は支給しない。ただし費用を弁償することができる。
- 2 常勤の職員は、有給とすることができる。

郷土読本「タンチョウ」

阿寒町ツル愛護会が作製

美しいちぎり絵が彩り

この会は、昭和40年11月30日から施行する。

- 3 職員の賃金及び旅費等の支給は別に定める。
(経費及び会計年度)
- 第14条 この会の経費は、会費収入、寄付金、補助金事業収入その他の収入をもって充てる。
- 2 この会の会計年度は、毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日、終わる。
(委任)
- 第15条 この会に定めるもののほか、本会の運営に必要な事項は、役員会の決議を経て会長が別に定める。

冬の間、なぜ里にやってくるようになったのでしょうか。
阿寒民話——ツルふぶき

タンチョウが里にやってくるようになったのは、昭和25年のある出来事から始まるのです。それは、阿寒の民話ツルふぶきの中で語られています。

《ツルふぶき》
昭和25年の冬のこと、農業をしていた山崎定次郎は雪のなかにくちばしを突っ込んだままじっとしているツルを見つけた。(はておかしいな)と思い雪をこいでツルにちかづいた。ツルをだきかかえると、ふるえが伝わってくる。体はおどろくほどやせていた。



冊子・タンチョウ「阿寒の里のなかまたち」より
(A5版・30ページ)

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
平成9年3月発行

- (2) この会則は、平成3年4月24日から一部改正して施行する。
- (3) この会則は、平成8年4月5日から一部改正して施行する。
- (4) この会則は、平成10年4月22日から一部改正して施行する。
- (5) この会則は、平成11年4月26日から一部改正して施行する。
- (6) この会則は、平成14年4月24日から一部改正して施行する。

平成九年度

4 5
会員の募集に努める

5 5
会報（鶴群）の発行（第五〇十号）

10 5
第一回ツルクイズ応募開始（毎年度実施予定）

10
・タンチョウの保護思想の普及と阿寒のPR

12
タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（3月）

12
タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施（2月）

12 1
タンチョウ生息状況一斉調査への協力

2 14
阿寒丹頂の里写真フェア'98を町教育委員会と共催（15日）

3 7
第二回タンチョウ観察会の開催（阿寒町教育委員会と共催）

・タンチョウの観察と冬の一日のくらしについて学ぶ

ロタンチョウの「数あてクイズ」はじまる

「阿寒丹頂の里・鶴クイズ」

阿寒町タンチョウ鶴愛護会では、来年一月一日に阿寒丹頂の里（町上阿寒）に飛来するタンチョウの数を当てる「第一回鶴クイズ」を実施、回答を待っている。

タンチョウの町を全国にアピールするのを狙いとしている。一月一日の午後一時に阿寒国際ツルセンター分館の給餌場にいるタンチョウの数を当てる。正解者には（多数の場合には抽選）「丹頂の里・赤いベレー」の宿泊券（二人分）や、同町の特産品三万円などの賞品が贈られる。

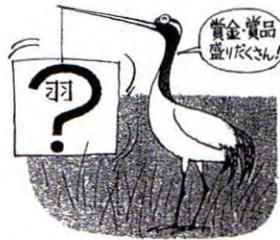
（第一回目の賞）

丹賞 一名

頂賞 五名

ラッキー賞 三〇名

応募リーフレットを作成し来館者にPR、また報道機関を通してPRにつとめています。



ロ会員を広く募集

阿寒町タンチョウ鶴愛護会の事業運営の経費は会員の方々からの会費（個人・法人）、寄付金、補助金事業収入によって賄われています。

会員は、会の目的に賛同し、会の事業活動に参加又は支援できる方なら誰でも入会できます。

会費は年度会費です。入金によって会員となります。

会員になりますと、会の活動に参加でき

る他、会が発行する会報やツルに関する資料のほか国際ツルセンターの事業案内などの情報をお届けいたします。又、グッズ購入の時5%を割引販売いたします。

ロ阿寒丹頂の里写真フェア'98

二月十四・五日にわたって開催された写真フェアは写真関係各社の協賛と多くの報道機関及びタンチョウ撮影関係の方々の協力のもと実施された。

目的、毎年冬期には丹頂撮影のため当地を訪れるカメラマンが他に例を見ない程多数にのぼる。町としてこれを積極的に支援すること、今後の広報活動に利用、観光客の誘致につなげる。

両日の内容、カメラ無料診断の実施、機器説明会、講演会の実施、写真展を行った。



（タンチョウ保護監視事業 ねぐらへの立入禁止看板設置）

平成十年 度

5) 会報(鶴群)の発行(第十一～十六号)

7・7 阿寒町ふるさと祭りに協力

8・13 町内盆踊り大会に協力

8・29 よさこいほろろん祭り・協賛

9・25 タンチョウ保護思想及び阿寒丹頂

の里のPRをねらいとして、第二

回ツルクイズを開始

9・28 第二回ツルクイズ応募開始

10 愛護会吉田勝美会長、賀茂鶴酒造

10 株式会社を表敬訪問される

10 タンチョウ保護増殖事業(給餌事

業)を町の委託を受け実施

12 (3月)

12 タンチョウ監視事業を町からの委

12 託を受け実施

12 (2月)

12 タンチョウ生息状況一斉調査への

12 協力

12 タンチョウ観察ガイドを作成発行

2・13 ・どんな行動が見られるかな?

2・13 (愛護会・ツルセンター編集)

2・13 第二回阿寒丹頂の里写真フェア'99

3・8 実施 (14日)

3・8 第三回タンチョウ観察会を開催

3・8 (標識鳥のお話・タンチョウの観察)

3・8 丹頂鶴音頭の普及につとめる

ロ丹頂写真フェア'99 II カメラ診断や講演も

「阿寒丹頂の里写真フェア'99」は二月十

三(十四日)の両日阿寒国際ツルセンターを

主会場に開催。今年をはじめてフォトコン

テストを実施したほか、無料のカメラ診断、

タンチョウの生態などについての講演など

が行われた。同フェアはタンチョウの保護

に関心をもってもらおうとともに、カメラマ

ンなどの来訪者を増加させるため、町タン

チョウ鶴愛護会と町教委が実施した。

阿寒が丹頂の里として全国的に有名になっ

たことはアマチュアカメラマンが発表した

写真の功績は大きく、この功績を評価する

ためにも、カメラマンの作品発表の場とし

て新たにフォトコンテストを実施した。

コンテストでは著名な動物写真家・田中

光常さんが審査委員長を務め、作品は分館

に展示された。又会場では昨年に引き続き

協賛メーカー協力を得て無料カメラ診断や

タンチョウの生態や撮影技術を学ぶ「丹頂

セミナーが開

かれたほか、

プロ写真家の

和田正宏さん

が「湿原の四

季」撮影のポ

イント」をテー

マに技術指導

も行われた。

フォトコン



(審査委員長 田中光常さんからの講評)

秀賞には滝沢芳宣さんが、優秀賞には竹林

修さんが受賞された。

ロ第三回タンチョウ観察会(参加者十名)

三月八日好天

に恵まれ絶好の

観察日和になる。

今回は標識をつ

けたタンチョウ

をテーマにし、

センターの松本

研究員からスラ

イドを使ってお

話を聞く。

そのあと、分

館で標識鳥の観

察をし、保護に

ついての理解を

深めた。



(愛護会・吉田勝美会長から受賞を受ける入賞者)



給餌場(野生のタンチョウを観察する参加者)

平成十一年度

4 阿寒国際ツルセンター館長に正富

宏之氏就任

5 会報(鶴群)発行

(第十七〜二十二号)

7・7 よさこいほろろん祭り・阿寒町ふ

るさと祭りに於て丹頂鶴音頭を披

露 (〜8日)

10・1 第三回ツルクイズの応募開始

・タンチョウの保護思想と阿寒町

のPR

10 タンチョウ保護増殖事業(給餌事

業)を町の委託を受け実施

(〜3月)

10・25 タンチョウリーフレット作製配布・

五〇〇〇部

・すばらしきタンチョウⅡ生きる

ツルステッカー作製配布・販売

・私たちのタンチョウと自然を守

りましょう

12・1 タンチョウ生息状況一斉調査協力

タンチョウ保護監視事業を町の委

託を受け実施 (〜2月)

2・12 阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇〇

実施 (〜13日)

3・11 第四回タンチョウ観察会の開催

□タンチョウリーフレット発行

タンチョウをよりわかり易く好評

阿寒町タンチョウ鶴愛護会(吉田勝美会

長)は、タンチョウの保護や生態などをコ

ンパクトにまとめたリーフレットを製作し

た。A4版の4つ折りで「すばらしきタン

チョウⅡ生きる」を製作し来館者に配布し

タンチョウへの認識を新たにしてもらうこ

とを強調した。

又「タンチョウと湿原を守る」ステッカー

も製作し販売をしてタンチョウ保護のため

に役立てる。



北海道に生息するタ
ンチョウをわかり易
くまとめたリーフレッ
トとステッカー

□阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇〇

阿寒町教育委員会、阿寒町タンチョウ鶴

愛護会、古きよき仲間たちの会(丹頂撮影

グループ)の三者において、写真フェア実

行委員会を構成し、阿寒町をはじめ多くの

後援とカメラメーカーなどの協賛をいただ

き二日間にわたり盛大に実施できた。

①丹頂フォトコンテスト

・応募者三九名 応募数一一五五名

・審査委員長 田中光常氏 他委員五名

・最優秀賞 滝沢芳宣さん
・優秀賞 佐藤富喜雄さん
他入選五名、佳作八名を観察センター
に展示



名誉館長に就任し
た正富教授

・講師 林田恒夫氏Ⅱ四季のタンチョウを撮る

③丹頂撮影体験

・写真協賛メーカーによる機材・フィル

ムの提供

④入館者へのサービス

・二日間にわたり甘酒とお汁粉の無料提供

□正富教授が名誉館長に就任

国の特別天然記念物タンチョウの生態を

調査研究し保護に役立てるため、三年前に

オープンした阿寒国際ツルセンターの名誉

館長に、今年四月から専修大学北海道短期

大学の正富宏之教授が就任。

このツルセンターを、タンチョウ、自然、

人間の関わりを考える拠点にしていきたい

と抱負を語る。(北海道新聞記事より)



撮影体験コーナー



入賞者表彰
会長(右)より滝沢氏(左)へ

平成十二年 度

会報(鶴群)発行

(第二十三〜二十八号)

7

ツルセンターとの連携事業として
ボランテニア募集、受け入れる

・ヒナの誕生に伴いコスチューム
飼育に携わる。多くの学生が参
加する

センターの協力を得てTシャツ作
製販売

よさこいほろろん祭りに協賛

PRの一環として丹頂鶴音頭を披露

・コスチューム姿でヒナの誕生を祝う

第四回ツルクイズの応募開始

タンチョウ保護増殖事業(給餌事
業)を町の委託を受け実施

(〜3月)

タンチョウ生息状況一斉調査への
協力

タンチョウ保護監視事業を町の委
託を受け実施 (〜2月)

タンチョウリーフレット、観察ガ
イドを増刷

タンチョウフェスティバル実行委
員会による丹頂結婚式が行われる
分館にて

阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇一
実施 (応募数六十一名)

第五回タンチョウ観察会の実施

・ゲーム、クイズ、観察を内容とした

〇初の人工ふ化に成功

阿寒国際ツルセンターに於て人工ふ化に
よつて二羽のタンチョウが誕生する。

一羽目 十二年五月二十一日・

十六時四十分誕生(♂) カンタ

二羽目 十二年六月二十三日・

十六時三十五分誕生(♂) クルル

命名は広く募集した中から付けられた。



〈コスチューム飼育〉

コスチュームの親から、自然界の危
険をいろいろと教わる カンタ(左)
とクルル(右)

12.11. 1

〇コスチュームで披露!!よさこいほろろん祭り

「丹頂鶴音頭」をアレンジした踊りやよ
さこいを通して鶴の

愛護や自然保護、地
域の和を大切にしよう

という阿寒ほろろ
ん祭りが九月一〜二

日の両日多目的運動
公園で開かれた。五

回目となる今年は一
年の誕生に合わせ、



祭りの原点となっている丹頂鶴音頭にタン
チョウのコスチュームを着た職員が披露した。



“14回目・ツルを見習いずっと仲良く
道内外の3組愛誓う”

〈タンチョウフェスティバル実行委員会主催〉

2001. 1. 21 観察センターにて

—北海道新聞より—

〇阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇一

丹頂フォトコンテストの表彰式が二月十
八日観察センターで行われた。

応募者 28名

応募数 61点

最優秀賞 菊田吉紘さん

優秀賞 伊藤秀雄さん

入選 三名

佳作 五名

(写真コンテスト
審査のようす)



平成十三年度

5) 会報(鶴群)発行

(第二十九、三十四号)

7

阿寒ふるさと祭りに於て丹頂鶴音頭で楽しむ

阿寒ほろろん祭りに於て丹頂鶴音頭披露・協賛

・今年度から「阿寒ほろろん祭り」と改める

8・26

第六回タンチョウ観察会を開催 (二十三名参加)

・ピオトープに於て湿原でくらすタンチョウの生活を模擬体験する

9)

第五回ツルクイズ実施 (応募数一一〇通)

タンチョウ保護増殖事業(給餌事業)を町の委託を受け実施

10

第七回タンチョウ観察会を開催 (二十名参加)

・給餌場で見られるツルの行動他タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施

12

タンチョウ生息状況一斉調査協力

12・1

第一回タンチョウイラスト展開催 (3月)

2・24

第八回タンチョウ観察会を開催 (十八名参加)

・来て見て発見、タンチョウのヒミツ

学校におけるタンチョウについての学習活動にツルセンターと連携のもと支援

□第六回親子自然観察会実施(8月26日)

タンチョウの生態を学ぶ、親子自然観察

会には町内や釧路市から集まった二十四人がピオトープにおいて夏のタンチョウの生活をゲーム形式で学んだ。

「タンチョウの成鳥は二年に一度羽が生えかわり約二カ月間は飛べなくなる」と紙芝居で説明。ゲームでは胴長をはいたタンチョウ役と靴のキツネ・カラス役に分かれ鬼ごっこ。池に入れば飛べなくても外敵から身を守ることを実感した。又自然界での食べものについても説明をうけた。

「タンゴ食べるの?」
おやこ自然観察会に24人

ゲームで学んだタンチョウの生態



遊びながら、タンチョウの生態を学ぶ参加者

□阿寒のコスチューム飼育国内一号・カンタ死亡

タ死亡

昨年五月二十一日生まれた雄のカンタ。七月七日ケージの中でキツネに襲われ死亡しているのを確認された。

カンタはキツネの警戒法を習っていないかったためとか：残念なこと。大きな課題を残してくれました。

□初のタンチョウイラスト展開く(12月3月)

―阿寒国際ツルセンターで

タンチョウ鶴愛護会と教育委員会の共催で「阿寒タンチョウの里イラスト展」を開催。

阿寒のシンボルの存在のタンチョウを身近に感じながら観察し、愛護の気持ちを持つてもらおうと企画し、町内や同愛護会の会員、センターを訪れた人々から応募した。

□阿寒ふるさと祭りで「丹頂鶴音頭」披露

恒例の阿寒町のイベントである「ふるさと祭り」の会場に於て、来場した多くの人々が愛護会の半てんを着て楽しく踊りイベントを盛り上げた。

「丹頂鶴音頭」を現代風にアレンジ、踊る阿寒ほろろん祭り二〇〇一(8月24、25日)



にぎわいをみせたふるさと祭り
丹頂鶴音頭を踊る参加者

□「丹頂鶴音頭」を現代風にアレンジ、踊る

阿寒ほろろん祭り二〇〇一(8月24、25日)

昨年までの「阿寒よさこいほろろん祭り」から「阿寒ほろろん祭り」とし、四一チム二千人が集まり阿寒最大のイベントとして開催され、特別企画のプログラムの中に

「丹頂鶴音頭」が位置づけされ披露された。

平成十四年度

4・2	タンチョウウリーフレットの作製、配布 （すばらしきタンチョウⅡ育てる） 会報（鶴群）発行 （第三十五〜四十号）
7・5	ボランテニアの募集とその受け入れ ・コスチューム飼育をツルセンターと連携し実施（八名受け入れ）
8・31	第九回タンチョウ観察会開催 ・湿原でのタンチョウの子育てとそのくらし紙芝居 第六回ツルクイズ実施（応募数一六一通）
9・5	タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施 （3月）
10	タンチョウ生息数一斉調査の協力 タンチョウ保護監視事業を町の委託をうけ実施 （2月）
12・1	第二回タンチョウイラスト展開催 （3月）
12・15	第十回タンチョウ観察会の開催 （十八名参加）
3・23	・幼鳥の給餌場での生活とその観察・紙芝居 第十一回タンチョウ観察会 （二十六名参加） ・子別れのお話と自立した幼鳥の観察及び紙芝居

ロランテニアとしてコスチューム飼育
愛護会ではひなの誕生によりロランテニア（ツルセンターとの連携事業）を八名受け入れコスチューム飼育に携わってもらおう。
ロ体験文 愛護会々員 福田晋治さん（大阪府）
私は今夏コスチューム飼育のボランテニアに参加させていただき貴重なそして楽しい経験をさせて頂きました。タンチョウとの出会いは学生時代に旅行で訪れた十数年前のこと。釧路湿原をブラブラ歩いていたら一羽の丹頂が頭の上を飛んでくれました。青空を背景に悠々と飛んでいたタンチョウの姿が印象的で、以来毎冬ごとに釧路を訪れ、写真の対象はタンチョウそのものになり深く興味を持ちはじめました。そんな中愛護会の会報、TV番組でコスチューム飼育にボランテニアとして参加できることを知り是非参加したいと思いました。大阪でサラリーマン生活をする私にとって参加できるのは十日程度。不安がありました。が夏期休暇を利用して参加することになりました。参加して最初に驚いたのはヒナに携わる仕事をする都度行う手や靴の消毒、エサや糞の計量、その他にもヒナを人に慣らさない為の気配りなど、こまごました作業が多いことでした。初日からコスチュームを着てヒナと一緒に過ごさせていた。いた事も驚きでした。短期間のボランテニアにきて直接ヒナと関わる仕事は嬉しい反面、緊張の連続でした。しかし、歩く自分の後ろをトコトコとついて来たり、パペットの先をつついてエサをねだるヒナの姿を見るとすべてを忘れてしまうようでした。やがてヒナの様子を観察できる余裕をもてるようになりまし。そうすると、二羽のヒナの個性も見えるようになり、より愛着がわ

くと同時にヒナの行動に対する疑問や、自分の動作についての不安も感じます。本当に奥の深い、難しい仕事だと思いました。十日間、スタッフの方々や他のボランテニアの方たちに感謝いたします。二羽のヒナが元気に成長し野生生活に順応できる日を楽しみにしています。
（八月十八日）
ロ見て、聞いて、体験して
タンチョウの子育てを知るⅡ観察会
「ゲームなどを通して、タンチョウの子育てを知り、タンチョウとそのくらしに心を持たせる」を目的に八月三十一日、子どもから大人まで十八名の参加者は、観察会に携わるボランテニアやセンターの職員の指導のもと元気に活動する。
（内容）①紙芝居を見る ②コスチュームを着て親のしぐさを似る ③ヒナの成長（身長の伸び、エサの一日の量等） ④ゲーム（キツネに気をつける） ⑤タンチョウの子育ての様子をビデオで見る（八月三十一日）
ロタンチョウウリーフレット発行
すばらしきタンチョウ・生きるに引き続き今年度は「育てる」を発行した。コスチューム飼育の様子がおりこまれています。



キツネからヒナを守るゲーム
楽しく元気に活動する



平成十五年 度

会報（鶴群）の発行

5
（第四十一〜四十六号）

8
・ 22

阿寒ほろろん祭り に於て、丹頂鶴
音頭を披露・協賛

・ 今年も町内会婦人部各位の協力
を得て、盛大に踊られた

9
（23日）

第七回ツルクイズ実施

10
（応募数一二八六通）

タンチョウ保護増殖事業（給餌事
業）を町の委託をうけ実施

12
・ 1

タンチョウ生息状況一斉調査への
協力

12
（3月）

※阿寒町で今冬最大三百羽の越冬
数を確認

12
（3月）

タンチョウ写真交流展開催

・ それぞれが撮影したタンチョウ
の写真を通して、交流し合うと
共に来館者へタンチョウの姿を
鑑賞してもらう

12
（2月）

タンチョウ保護監視事業を町の委
託をうけ実施

12
（3月）

第三回タンチョウイラスト展開催

12
・ 15

（応募数九十四点）
第十二回タンチョウ観察会開催

3
・ 23

・ 給餌場へ集まるまでの旅の様子
（疑似体験を通して学ぶ）
第十三回タンチョウ観察会開催
・ 春、湿原へ戻る頃のタンチョウ
の様子を紙芝居、ゲーム、観察
を通して学ぶ

□ 給餌事業 タンチョウの元気の源は魚
阿寒丹頂の里で越冬するタンチョウの数は
年々増加中で、現在最大三百羽を数える
までに至っている。

越冬中の十月から三月までトウモロコシ

（デントコーン）

と十二月から二月

まで活魚（ウグイ）

を与えている。

給餌人は現在も

「タンチョウが可

愛くて」という山

崎定作さんが毎日

続けている。

タンチョウが飛

来する前の早朝に

デントコーンを、

午後二時にはウグ



活魚（ウグイ）を与える山崎定作さん

イを与えている。

魚を給餌しているのは阿寒の給餌場のみ
で広く知られている。ウグイを横取りする
オジロワシ、時にはオオワシやキツネもやっ
てくるため、この時刻給餌場の光景を求め
て多くのカメラマンで賑わっている。

□ タンチョウ親子観察会（16年3月7日）

「ツルのダンスを見て大喜び」参加者19名

今年度第2回目の観察会を開催。今回の

テーマは、「もてもてのツルはどんなツル？」

春、繁殖期にはいるタンチョウの様子を自

作の紙芝居、ゲーム、給餌場での実際の観

察を通して理解を深めることができた。

この時期、多くのタンチョウがダンスを

盛んに披露し観察した参加者を喜ばせる。

タンチョウの理解とこれからの保護にむけ

て更めて考えることができた有意義な観察

会であった。

□ 阿寒町などの給餌場に飛来する国の特

野生タンチョウに寄生虫

阿寒町など
飛来の3割 ヒナが死ぬ可能性

別天然記念物のタンチョウの約三割が、寄
生虫のкокシジウムに感染していることが
環境省の調べでわかった。タンチョウは、
кокシジウムの卵が付着した餌を食べるこ
とで感染し、弱った成鳥やヒナの場合には気
管支炎などで死ぬことがある。東京の上野
動物園など飼育下にあるタンチョウの感染
例はあるが、野生での感染が確認されたの
は全国で初めて。人間には感染しない。昨
年五月阿寒国際ツルセンターで生まれた三
羽のヒナが気管支炎を発症。同センターの
獣医師らが調べた結果кокシジウムに感染
していることが判明。ヒナは抗生物質など
の投与で回復している。給餌場は過密化し
ており一羽が感染することで一気に拡大す
るおそれがあり、事態を重く見た環境省は
専門家で協議する。

（北海道新聞・15年3月報道より）

過密解消へ分散地必要

生息域拡大で電線接触、列車衝突が多発
釧路市動物園にけがや死がいで保護、収
容されたタンチョウは10月22日までに23羽、
昨年同期の2倍近くに。電線接触、列車や
自動車に衝突するケースが多い。

タンチョウ生息数は、人工給餌などで年々

増加、一月の調査では過去最多の九〇八羽、

●この半世紀で約27倍に急増。このことに

より生息地が過密になり、国道など人間の

生活環境付近に生息域が拡大。事故に遭う

確率が高まったとみられる。動物園ではタ

ンチョウの数が増え人里に生息域が拡大し

ているのが大きな原因と分析している。

（北海道新聞・15年10月報道より）

平成十六年度

会報（鶴群）の発行

（第四十七～五十二号）

9

第八回阿寒丹頂の里ツルクイズ実施

・応募総数一〇三七通 阿寒丹頂

の里で越冬するタンチョウのPR

と保護思想をねらいとして行う

タンチョウ保護増殖事業（給餌事

業）を町の委託をうけ実施

10

タンチョウ保護監視事業を町の委

託をうけ実施

タンチョウ生息状況一斉調査への

協力

第四回タンチョウイラスト展開催

・応募数一八六通（3月）

タンチョウの塙への「立入禁止」

看板の設置

（新規・補修を行う）

タンチョウ写真交流展

（作品点数二十五）

観察センターに於て、タンチョウ

を愛する人々の写真を持ち寄り展

示し交流を行う（3月）

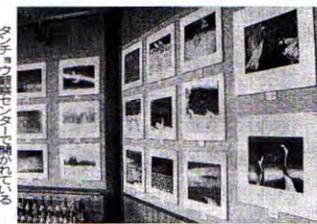
第十四回タンチョウ観察会の実施

・タンチョウカルタ及びゲームを

通してタンチョウの体や生態を

学ぶ

個性あふれるタンチョウ作品



来年3月まで

写真交流展を開催

阿寒町の「気軽に応募を」

阿寒町タンチョウ保護監視事業を町に委託し、阿寒丹頂の里で越冬するタンチョウのPRと保護思想をねらいとして、タンチョウの生息状況一斉調査への協力、第四回タンチョウイラスト展開催、応募総数一八六通のタンチョウイラスト展を開催しました。また、観察センターに於て、タンチョウを愛する人々の写真を持ち寄り展示し交流を行いました。観察会では、タンチョウカルタやゲームを通してタンチョウの体や生態を学ぶ機会を提供しました。



（巡視・巡回期間 12月1日～2月末日）

タンチョウ保護監視事業（委託業務）保護監視業務・ねぐら、給餌場周辺の環境保全のための巡視・巡回活動を継続して実施している。

タンチョウがよりよい環境の中で事故なく安全に越冬できるように努めている。

・ねぐらへの立入り禁止看板の設置

・早期の巡視・タンチョウの事故の有無、ねぐらとしている河川等の場所と羽数の確認、ねぐらへ立入るカメラマンへの注意指導等

タンチョウ
また殺虫剤中毒死

2羽汚染の拡大裏付け

農薬（フェンチオン）

タンチョウ2羽が、有機リン系農薬の殺虫剤フェンチオン（MPP）を取り込んで急性中毒死していたことが環境省などの調査から分かった。タンチョウは道東で千羽まで生息数を回復したが、網走管内女満別町で02年10月に死んだ2羽の中毒死が確認されたのに続き、01年に鶴居村で回収された成鳥と03年に標茶町で回収された成鳥からも検出された。

「フェンチオン」小豆やジャガイモの栽培や牧場の堆肥にウジがわくのを防ぐため、粉末や液状で散布する。一九六〇年に登録され、特に鳥に対する毒性が強く、泡を吹いて呼吸困難などで死ぬ。米国では04年、鳥などへの影響が大きいため使用禁止された。

阿寒丹頂の里「鶴クイズ」第1～8回

第1回～8回の経過

Q 1月1日午後1時に阿寒丹頂の里で確認されるタンチョウの数は何羽でしょうか。

回・年	正解（羽）	応募総数	正解者数
1 (1998)	146	670	1
2 (1999)	97	1384	3
3 (2000)	78	1518	10
4 (2001)	183	1187	2
5 (2002)	161	1110	5
6 (2003)	247	1161	0
7 (2004)	133	1286	0
8 (2005)	117	1037	2

（毎日新聞）

平成十七年度

会報の発行

丹頂鶴音頭の普及・ほろろん祭り

阿寒町タンチョウ鶴愛護会設立四

十周年記念事業実施

一、四十年の歩み「記念誌の発行」

二、四十周年記念式典・祝賀会

(於・阿寒町公民館)

タンチョウ保護事業(給餌)

(3月)

第九回ツルクイズの実施

タンチョウ観察会及びイラスト

(3月)

第三回タンチョウ写真交流展

(3月)

タンチョウ一斉調査への協力

(2月)

タンチョウ監視事業

ボランティアの募集と養成

リーフレット作成配布

学校教育活動への支援

他団体の催しへの協力

タンチョウ調査保護連盟によるタ

ンチョウ生息調査の結果を発表

(一〇〇三羽確認)

17年1月調査から

MPP使用回避を

タンチョウ 環境省に意見書



急性中毒死 環境省に意見書

タンチョウのフンチによる、飼育の特別天然記念物である丹頂鶴の急性中毒死(2羽)が、阿寒町タンチョウ鶴愛護会(以下、阿寒会)から環境省(以下、環境省)に意見書が提出された。

阿寒会は、丹頂鶴の急性中毒死の原因を調査するために、環境省に意見書を提出した。意見書には、丹頂鶴の急性中毒死の原因を調査するために、環境省に意見書を提出した。意見書には、丹頂鶴の急性中毒死の原因を調査するために、環境省に意見書を提出した。

タンチョウ営巣今年も

野原ベツサロ

環境省は二十三日、利尻礼文サロベツ国立公園内のサロベツ原野(宗谷管内豊富町、留萌管内幌延町)で、つがいのタンチョウが営巣し抱卵しているのを昨年に続き確認した、と発表した。早ければ今月末にはふ化すると予想している。

念願の1000羽鶴

17-5-10 (並刊)

「阿寒」の特別天然記念物である丹頂鶴の生息調査は、公約通りとして過去数年、回行して1000羽を達成した。阿寒町タンチョウ鶴愛護会(以下、阿寒会)は、丹頂鶴の生息調査の結果、今年も1000羽を達成したと発表した。

調査で確認「絶滅回避の最低数」

阿寒町タンチョウ鶴愛護会(以下、阿寒会)は、丹頂鶴の生息調査の結果、今年も1000羽を達成したと発表した。調査で確認「絶滅回避の最低数」

繁殖地分散化 今後の課題に

道内のタンチョウ生息数

繁殖地分散化 今後の課題に

阿寒町タンチョウ鶴愛護会(以下、阿寒会)は、丹頂鶴の生息調査の結果、今年も1000羽を達成したと発表した。繁殖地分散化 今後の課題に

「タンチョウ調査保護連盟・平成17年1月調査結果」

ロタンチョウ千羽突破は、あわせて大きな課題を投げかけています。今後、私達に考えられる保護のあり方を改めて考えていかなければなりません。

(北海道新聞掲載)

鶴への想いを語る

阿寒町タンチョウ鶴愛護会会長

吉田勝美

記念誌編集委員長

奥山勝男

司会

小林靖之 愛護会事務局長

●出席者

金子信治 愛護会副会長

山崎定作 給餌人

伊藤博通

元阿寒中学校職員

大山昇

元阿寒中学校職員

吉田守人

阿寒中学校同窓会長

小関拓美

元阿寒中学校鶴クラブ員

鶴田眞智子

丹頂鶴音頭普及委員

曾我部不二子

丹頂鶴音頭普及委員



・小林 愛護会四十周年の節目を迎えるということ、今日皆さんにお集まりを頂きました。まず最初に委員長の奥山さんからお願ひ致します。

・奥山（委員長）お忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。今日は座談会ということでみなさんの気持ちに残っている鶴に対する愛情の話をお願いをしたいと思います。

・小林 吉田会長から一言お願いします。

・吉田（勝） 司会の小林さんから話がありましたように、今年には愛護会設立四十周年という節目の年を迎えて、皆さんと共にこの年を心から喜びたいと、こういうふうにいるわけがあります。この四十周年記念の実行委員会を作るにあたりまして、皆様には式典委員会あるいはまた記念誌委員会と、それぞれのお立場で大変熱心にご協力をいただきまして、今日は四十一年の歩みを語るといいますか、思い出を語るといって席を設けさせていただいたわけでありまして。式典委員会あるいはまた記念誌の委員会、それぞれ皆様方ご苦労をいただいたわけでありまして、特に記念誌については伊藤博通先生がこの四十一年の歴史を綴るといって、大変なお仕事ではないかと思われ、ありますけれども、また先生が鶴に寄せる愛情といましようか、熱意といましようか、それによって本当に立派な記念誌ができるのではないかな、とこういふふうにしておられるわけがあります。表紙を見ただけでも、あつと驚くような本場に阿寒がタンチョウの里で大いに羽ばたいているんだという姿をまず表紙で現しており、賀茂鶴酒造の会長さんの祝辞などは胸にじんと迫るものがあります。そしてその鶴とのかかわり、それから酒造会社の社長さん、また愛護会とのかかわり、そういったことを思いを寄せて綴っていただいているという

は本当に嬉しいわけでありませう。私も実は、釧路支庁管内のタンチョウ鶴の愛護会の三十周年記念誌の実行委員長を仰せつかった事があります。その時に、釧路の教育局長から実行委員長をやってくれというようなことで、管内のいろいろな方々にお集まりをいただいて記念誌をつくったわけでありませう。その時のいろいろな苦勞を思うときに伊藤先生も大変ご苦勞だと思つて、本当に申し訳なく思つております。その伊藤先生の熱意によって、立派な記念誌が皆さん方に配られ、そしてまた皆さんの目を通して、改めてまたタンチョウ鶴に対する思いを強めていただけるのではないかなと、こんなふうに考えているところでございます。どうかひとつ、今日は忌憚のない、本當の思い出、飾りのないお話をいただいて、いろいろと苦勞もありませんでした。また感激の場面もあつたわけでありませう。そういったことを思いながら、ひとつ有意義な懇談会であることを心から願つてやまない次第であります。そしてまた、かつては中学校の生徒さんであつた小関君、あるいは吉田守人君に来ていただいたので、少年期を思い出してもらい、よろしくお願ひしたいと思ひます。率直に申し上げて、今阿寒中学校では、少し鶴とは縁遠くなつてきているというのであります。ひとつ先輩として、この阿寒中学校が伝統的に鶴の愛護校として、みんなが活動の場を広げていただけるようによくお願ひ申し上げたいと思ひます。日頃のご協力で感謝を申し上げて、ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございます。

・小林 それでは、簡単に自己紹介をお願いします。

・伊藤 元阿寒中学校鶴クラブの担当をしております、伊藤博通でございます。

・大山 その伊藤先生の次の担当、鶴クラブの大山でございます。

・小関 当時伊藤先生の活躍なさつていたころ、昭和三十七年度

の鶴クラブの会長をやつておりました、小関です。よろしくおねがいします。

・吉田(守) 同じく同級生なんですけれども、僕は鶴クラブ員ではなくて、生徒会の副会長をやつていました、吉田でございます。

・山崎 山崎です。タンチョウの給餌をやつております。

・金子 上阿寒、俗に言うタンチョウの里の金子です。



・鶴田 鶴のかかわりに私はそんなにかかわつていないような気もするんですけども、亡くなった妹たちのほうがよくかかわつていたと思うんですけど、いまのところ丹頂鶴音頭の普及にちよつとお手伝いさせていただいております、鶴田でございます。よろしく。

・曾我部 私も丹頂鶴音頭で始めからというか、初回から携わつております、曾我部です。よろしくお願ひ致します。

・奥山 今年タンチョウ愛護会の四十年の節目ということで、記念式典、それから記念誌を作製しようという盛り上がりの中で、会長さんから記念誌の委員長を仰せつかりました、奥山でございます。どうぞ宜しくお願ひいたします。

・小林 これから約一時間の予定で、おのおの方々から、それぞれタンチョウに携わつてきたことや、タンチョウに係わつての地域づくり、そんな思い出がたくさんあると思ひますけれども、そんなことをお話ししていただきたいと思ひます。それでは、まず会長さんから、愛護会の設立の頃とか、それから一番の思い出などたくさんあると思ひますけれども、その中からお願ひします。

・吉田(勝) なぜ私がツル愛護会の会長になつたか、どういふ関係で、どんな縁で鶴の係わりをもつたかということでありませう。

すけれども、当時私は阿寒町の社会教育委員長をしておりました。タンチョウとか、マリモなどについては教育委員会の所管だったわけでありませう。そんなことで、タンチョウもだんだん増えそうだけれども増えない、これから管内あげて管内というより全道あげて、保護活動に務めなくてはならない、ということだったので、ただそれは声ばかりで、実際に活動する実態というものがなかったわけですね。それで私は、当時釧路の支庁長のところへ行つて、「どうだい支庁長さん、あなたタンチョウ鶴の保護会長をやっているんだけど、ご存知ですか。」「私ですか。」「私がですか、ってあなたですよ。」「それは知りません。」それを聞いてがっかりして、そんなことではいけないということ、今度私が町内の社会教育委員の皆さん、あるいはまた教育委員会の皆さん方、町行政とはかりまして、ぜひひとつ地元のみんなでタンチョウを保護して行こうと。しかし会をつくるにあたって、保護という字は建造物ならいざ知らず、生きているものですから、動物には保護ではなくて、愛がなければならぬ。そういうことで会の名称も保護会ではなくて（釧路支庁のはタンチョウ保護会でしたけれども）阿寒町としてはタンチョウ鶴愛護会というものをつくって今日に至ったわけですね。本当に地域の人々、あるいはまた町民上げていろいろと苦労いただいて、四十年というこの節目を迎えることができましたということは、会長として非常にうれしく思っているわけでございます。ちょうど私が今から考えてみると、四十五歳の時であります。今八十五歳ですから、よくこんなにながいがいこと皆さんにお支えをいただきながら務めさせていただいた。改めて四十年の節目を迎えるにあたって、感無量なものがあつた。

・小林 次に愛護会の設立前に活動されていました中学時代、当時の回想を小関さんからお願ひいたします。

・小関 そうですね。やはり先輩達の姿を見まして、私の生家は昔は畑作でございまして、餌が足りないということで、よく翌年の種のためにとっておいた親のとうもろこしをかすめては鶴に与えたり、また中学校の頃の記念誌にも出ておりますけれども、昭和三十七年の年には、自転車で自分でドウ（びんどう・魚を捕獲する用具）で獲ったウグイを自転車のバケツに入れて当時の鶴公園の名園長でございました高橋さんに届けた記憶とか、四十年の歳月というのはいかに早いかな、と思ひますけれども、それらはまた鮮明に覚えております。一時期街が急に開けてまして、今現在の阿寒町役場の裏にも常時タンチョウ鶴は冬になりますといふものでも、だんだん鶴の住む場所自体がなくなつてきていふものではないかなと。しかしながら、現在後輩達も新聞にも出ていふようになりましたけれども、とうきびの栽培とか、また冬になりましたらグラウンドにニオをたてて、鶴を呼び寄せるようなかたちで観察行為等を頑張っているなあと。それらを見ていふと、自分の若かりし頃を思い出し、気持ちもまた若返つて、末永く愛護の精神を忘れないでいたいと思つております。

・小林 吉田守人さんのほうから、中学時代を含めて地域おこしのためにいろいろな活動をされたと思うのですが、その中から宜しく願ひします。



・吉田（守） 中学校時代が一番覚えていふのは、今話された小関君が勉強しないで鶴の絵を毎日のように書いていた。彼はあの当時鶴博士と呼ばれて、我々はそう呼んでいた。それくらい夢中になつていた。そんなことが僕の頭の中になつてあるのです。商工青年部で始まつたタンチョウフェスティバルのタンチョウ結婚式それから若い人たちの盛り上がりやうまく

利用してやった人文字コンテスト。これなんかもそうですけれども、鶴のまちですから鶴を題材にしなければならぬ、ということ常を頭に置きながらやっていたというのが印象的だったと思います。あと中学校の五十周年のときに、先ほど会長がお話しされましたけれども、先生方が変わってしまっ、中学校に資料がまったくないわけです。すばらしいことをやってきた歴史がちゃんと伝わっていい。それで五十周年のときに子供たちにもう一度伝えなうおそうということが始まったことで、次の年でしたか、グラウンドに二才を造って中学校のグラウンドに鶴が来るようになった。そういうことを繰り返していかなければだめなんだろうな、と思います。

・小林 それでは次に大山さんから中学校勤務時代のことを。



・大山 私が中学校に勤めたときに、すでに伊藤先生が鶴クラブを担当してました。私の印象ではとにかく鶴に対する情熱はたいしたもんだな、そういう印象でした。だけど当時の

中学生は勉強そのものより部活のほうにエネルギーを燃やしていたような時代だった。五十分間の授業が終わったら外に飛び出して、昼休みなんかグラウンドで場所を取りながらソフトボールをやっていた。グラウンドを走り回っていた。そういう時代です。授業が三時頃終わったら卓球だとか野球だとかいろいろな部活にエネルギーを分散させていた時代なんです。そこにたまたま鶴クラブという会がありました。そこはまた他にはない貴重な鶴に対する愛護ですね、その気持ちを伊藤先生を中心に一生懸命活動していた。鶴といったら阿寒中学校に行ったらなんでもわかるということ、他の写真家や、林田恒夫さんも鶴のいろんなことを教えてもらいに来たものでした。そのくらの当時の阿寒中学校は有名でした。私は特に写真関係が好

きだということに興味でやっていましたので、伊藤先生はどっちかというソフト面、私はハードのほうの写真で二人でコンビでやっていたものです。それからもうひとつ大井校長先生、鶴クラブ発祥の。大井校長先生が当時休職しまして病院にいて、私が来ると大井校長先生は病床にいても鶴のことを心がけていたということが大変印象深いです。このクラブの成長を阿寒中学校に残して行かなければならないな、伊藤先生共々そういう感じで頑張っていました。

・小林 それではその中心になった伊藤先生、鶴のオーソリティーとして中学校の事などをお願いします。

・伊藤 五十年前に阿寒町の阿寒小学校に赴任したときに、今日お見えの鶴田さんの弟さん、佑一君を担当いたしました。阿寒は本当に仏法僧まで鳴くさまさまな鳥が住んでいるところですからいいところに赴任させていただいたな、と思って阿寒小学校の時から子供たちを教える傍ら一緒に近くの林へ行って鳥を見たり、鳥の声を聞いたりして小学校で五年を過ごし、阿寒中学校へ行きました。阿寒中学校では美術を担当する他に理科とか技術とかさまざま持ちましたけれども、担任する美術に郷土のほこりのタンチョウを描かせて、子供たちにすばらしい故郷だということを学ばせたかったんです。やはりそれは親達に鶴に対して非常に愛深く、それぞれどこぞさんの鶴というふうになっていて、山崎定次郎さんのお宅に一番鶴が集まってくるようになったというのは、じいちゃんが毎日来る鶴に餌をあたえ本当に子供のようにして育んでおられたり、結局それが今日の丹頂の里を形成していったわけですけども、そういうふうにご親子二代にわたってやっていただいで、その他たくさんの方々が給餌を個人でもやってこられたので、鶴たちは阿寒が自分達の住みやすい場所として毎年来てくれたと思います。鶴



クラブは大井先生が発足しましたが、大井先生のあとの一戸先生が後の仕事を実践なされたことを取りまとめ鶴の日記というかたちで業績を残されている。だからそれがまずテキストでした。昭和三十八年にですね、阿寒が冷夏で作物がならずなくて餌が足りないということでそのとき鶴クラブの子供たちは鶴の身になって、餌を持って給餌に行っていたわけです。そんなことがNHKの耳に届いて、鶴の現状とそれに対する鶴クラブの子供たちの活躍ぶりを昭和三十九年の一月八日に「こちらワンパクテレビ局」という子供向けの番組で放送してくれたわけです。これが大変な反響を呼んで私が阿寒中学校を退任したあとも大山先生はその方々の対応にあたってくださったわけですから、餌も物置いっぱいになるくらいだし、それから大変なお金を学校で預かることになったので、これは当時のPTA会長でもありました吉田さんにどうするかということでご相談したらいろいろ現状をお聞きいただいて、さっそく教育委員会の当時の社会教育課長の藤沢さんが本当に社会教育に熱心な方で、委員長の吉田さんからのお話を聞いて、「わかりました。委員会としてもこれに重点的に取り組む体制をとりますよ。」ということと地元の方々とお話をして出来たのが、この愛護会でございます。本当に会長さんの言葉ではないけれど感無量なこの四十年の歲月だったと思っております。

・小林 ありがとうございます。次に鶴が可愛い、可愛いでしょうか。もうもないという鶴を愛する山崎定作さんからおじいさんの頃からの思い出と今の携わっている仕事関係からお話しします。

・山崎 私の所は父が初めて給餌して鶴が集まった場所なものですから、私は若いうちは山仕事に行っていたものですから、私は若いうちは山仕事帰ってくるものだから鶴はあまり見られない

状態でしたのですけど、昭和四十七年から給餌してまず父が体を悪くしましてその時に変わってそれから愛護会のほう役員も引き受けてやっています。昭和五十二年に阿寒町の観察センターができて、それからずっといるのですけど、昔は本州から来るカメラマン達が鶴のねぐらあらしに入り困った時代があったのです。朝回って行って、午後から同じことをやっているような状態その面では苦労しました。一時川も凍ってしまつて、山下さんのブルを持ってきて氷割をしました。だけどやっぱり自然には勝てない、このごろそういうこともないし、来る人も大変マナーが良くなってきましたので、監視のほうも楽になりました。観察センターにいいことになって皇族の方々もお会いできましたし、光栄だと思っております。毎年本州からカメラを持って、「また来たよ」と来てくれる人もいますので嬉しいです。餌は切らすわけにはいかなから、雪が降ろうがなんだろうが毎日それだけはかかさずにやらなければならぬので、それだけはやっています。

・小林 元気にやっていますものね。金子さん、丹頂の里あたりで川が全面結氷したということで、どんな苦労がありましたでしょうか。

・金子 まず最初に私が上阿寒の住民になって家庭をもったのが昭和三十三年なんです。その頃の阿寒の農業はどうだったのか、というと俗に言う雑穀地帯、大豆、小豆、そば、麦、燕麦、ことうといったものを栽培していました。確か昭和三十五、六年ころだったと記憶しているのですけど、私はタンチョウとは知らずすぐ大きい鳥が飛んできたのですね、そして私の好きな色なんです。白と黒。そして空を飛んできた。あつ、これが鶴なんだ、あの大きな鳥が自由自在に大空を飛び回るなんてなんとすばらしいことなのか、これで鶴のとりこになってしまったの

ですよ。四十年前です。そのころ上阿寒の人たちはどうだったのか、というと当時鶴も飛来するようになって十羽から二十羽くらいでしたか、上阿寒の農家のひとたちは十月にもなると収穫時期、鶴がいるんですよ、それでそばやいなキビ、麦を鶴が食べているのです。せっかく手塩にかけて育てたものを鶴に食べられるので鶴を追いたいだけけど、追えないのですよ、なぜ追えないかと言うと理由は他にあるんですよ。鶴かわいさよりも作物が可愛かったのです。大豆、小豆は十月になりますと実がぼちり入って天気の良い日に鶴が豆の畑を歩き、さやに触れると豆がひとりではじけて実がこぼれるのです。ですから鶴を追ったものなら鶴が飛び立つために走りますよね。ですから大豆が割れて畑が黄色くなる、小豆のさやがはじけて赤くなる、だから鶴を追えない、じつとがまんして鶴を見守っていた、ですから鶴は人を見る目があつてものを言わないけれど、どこの人が優しいか、どこの人が危険かはそれで心得ていたんですね。ですから畑に来ては鶴を追えない。育てた作物を鶴に食べられても追えないで我慢していた。そのうち一年、二年たつと子鶴を連れてくる。「あつ、あれはおれのところの鶴よ。」「いやあれは私のうちの鶴だよ。」そういうふうになって自然と鶴に對して愛情がわいてきたんです。そしてとうもろこしは一番遅い時期に収穫するのです。そば類とか燕麦とか豆類が終わってから、皆さんも経験があると思うのですが、とうきびも一番先になったのが裏にぼちり実が入っているんですね、二番になると実入りが悪いし、とうきび自体も三センチか五センチ小さいのですよ。そういうとうきびは殻についたまま畑に二オにして置いておくわけです。それを鶴は厳寒期にとうきびの殻をつついて収穫し残したのを食べる。そのころたまたま山崎さんの先代も鶴に給餌をしていた。今の観察センター、国際ツルセン

ターを中心には二十一線から上、上のほうは二十五線から下、だいたいこの辺が鶴の日常いるところなんです。鶴から見るとおそらく安全地帯だと思うのです。その地域の人たちは先ほど私が言ったような感覚で鶴に愛情を持ち鶴を見守っている、それを鶴が充分承知しているものですから安心していいのです。もうすでにその人たちはなくなっていますが、名前を申し上げますと、まず一番先に鶴のとりこになったのが松橋弘義さん、川田二良さん、そして国際鶴センター辺りの椎名源作さん、今の道の駅付近にいたのが石橋門盛さん、今の国際ツルセンターの前あたりが私の畑だった。ですからとうきび殻を置いておくんですよね。そこに鶴が群がるんですよ。あと下のほうへ行きますと坂本与作さん、木村七郎さん、原博さんは健在ですね、そういう人方が手塩にかけた雑穀を我慢して鶴を追わないで見守った。それがあの地に定着するようになったんですよ。ですからもしあのころ、あのとき今名前をあげた地域の人が鶴を追い払っていたら、今どうなっていたのかな。こう考えると、私も時折役員会その他で話すのですが、やはり地域の人たちが自分の子供のように鶴を見守ってきた。それが現在の阿寒の鶴ではないのかな。もちろん愛護会の吉田会長さん、そして鶴に給餌をした先代の山崎さん、こういった方々のご努力も非常に大きいけれども、それに負けず劣らず地域の方々の善意、それが今日の鶴なのかな、とこんなふうに思っています。

・小林 それでは鶴に実際に携わってきた方々からちょっと離れて、鶴田さんお願いします。

・鶴田 私は今の家よりもうちよつと向こう側に建っていた古い家よときの昭和二十七年くらい、高校二年生でしたよ。あのころは夕方になると我が家の庭の雑木林の所に鶴が二羽必ず降りてきて遊んで、何かを食べているのかな、なにかわからない



けど、それが窓からいつも見えて楽しんでいました。それで羽音というのでしょうか、屋根を越えて、飛び立っていくあれがなんともいえない、いい心地で私は聞いていたのです。高校二年生くらいのおきに、こういうのって自然とのふれあいが、こども心にもいいな、という感じで見たら、羽の音を聞いたりして過ごしていました。それから少ししたら、そういうのがいっさいなくなつて、全然まちの中には鶴が来なくなっていましたね、私東京へ嫁いで帰ってきて、うちの娘がちょうど中学二年生のときに、鶴公園の裏のところに道路がありますでしょ。あそこをのび道を通りましたら、二羽の鶴が舞い降りてきてタンチョウの舞を踊り出したんです。私は動けなくなつてしまひまして車を止めて、そしたらうちの娘がそれを見ていて、ものすごく感激して北海道もここで見られねえと、それは感激した記憶があるんです。本当にタンチョウが自然の形で目の前で飛ぶのでもなければ、歩くのでもないような二羽で舞っている姿というのは本当に優雅で、今でもうちの娘はあのおきのことを思い出しては、あれは贅沢なひとときだったわね、と言って阿寒でタンチョウ鶴を見た事に都会育ちの娘でしたから、なお印象が強かったのではないかと思います。

・小林 それでは曾我部さん、郷土芸能として定着している丹頂鶴音頭の想いなどあるかと思いますが、それらを含めながら。

・曾我部 私達は愛護のほうではなく、鶴音頭。いつだったか記憶にないのですが、いつ丹頂鶴音頭をつくったんでしたっけ。昭和四十五年で六年でしたか。

・吉田(勝) 音頭の話を少しさせてください。タンチョウ鶴の保護思想というものを地域住民に定着させたいと、何か形のあつたものにならなければならない、郷土の芸能として定着するよう

に、またみんなが歌ったり、踊ったりしてそして鶴に思いをよせるといふことをしたいということで丹頂鶴音頭の作詞を藤田印刷の社長、藤田久さんに依頼したのです。そして作曲は「ここに幸あれ」の飯田三郎さん、キングレコードのあの飯田三郎さんの家に東京まで行ってお願いをしたわけですね。そして今度は振り付けは、八浪のおかみの花柳徳保さんをお願いをしたというところで、このときは率直な話、私は自費で全部行ってきました。飯田三郎さんをお願いして快く引き受けてくれて。そして音頭の作曲が出来たと飯田三郎先生から話があったので、当時の社会教育課長の藤沢君と、それから教育長の佐藤八夫さんを連れて八浪に行つたのです。どうすると音頭を聞きながら振り付けをどうするか、その時に飯田三郎先生が「私は長いこと作曲生活をしているけれどこういうことは後にも先にもないです、製作依頼者、作詞者、作曲者、振り付けと四者がひとつになつてこれをつくるという、これはすばらしいものができるですよ。」と言われた。そしてそのとき欣喜雀躍、心躍らせながらその曲を聴いてそれじゃあどうすればいいだろう、というところでタンチョウ鶴の踊りを考えました。鶴はひゅい、ひゅいと歩きますね、べたつ、べたつとは歩くものではないのです。音頭でも足を進めるときにひゅい、ひゅいと。それからこうやって踊る、これはくちばしなんです。ということでは生意気そうなお話を言うけれど、私がお家元みたいに(笑)みなさんにお免状をあげたのです。それで鶴田さんのお母さんにご協力いただいていたあなたを丹頂鶴音頭普及委員と認定いたします、ということでお免状を出したりして、今日に至っています。その続きはひとつ不二子さん、宜しくお願いします。(笑)

・曾我部 鶴田さんのお母さんがその頃女性の会、今の婦人会の前身の会長だったんです。それでお祭に昭和四十五年、六年頃だ

と思うのね、浄財会の方と役場婦人部と、それから婦人会の人ということでも結構な人数でしたがまだ中学生はいなくて、行進するときは私達だけだったんです。タンチョウ浴衣をたのんで、男性も入っていたので、男性用と女性用で赤い帯は頭を表すということでも踊って来たんですよ、編み笠をかぶって、その時に言われたことばが「なんだ年寄り芸者ばかりだ」(笑) 鶴田さん

のお母さんが一番前で編み笠を持って、私とか大平トシエさんが先頭でやったときに言われて、それをずっとやっていて、それでもっときちんとした踊りをということ、行進しながらまたこつちを向くということで行進の音頭をぬきにしようということでも踊りが変わったんですよ、今のね、その時にまた講習を受けて私は立派なお免状をいただいて、「あなたは丹頂鶴音頭指導員と称する」吉田勝美会長の家元から。その時の二十人くらいがお免状を持っていると思います。なにに音頭、東京音頭とかなかありませんけれど、丹頂鶴音頭の特徴はタンチョウ鶴を表す踊りですから、間違わないで下さい。普通の音頭はただこうやりますでしょ。私も足はこういうふうな足でやってください、行進はこうですけどそれとこの羽のここからやって等とやりますけど、これが今の中学生は全部乱れていますものね。見るのも雄阿寒、雌阿寒の山ですよ、という全部踊りにそれを入れてますから乱れないで下さい、丹頂鶴音頭の特徴は絶対に生かしてください、というのは言われているけど、今普通の踊りのようにべた足でしているのだからこれはやめていたいただきたい。今度からきちんとしようよ。私も原点に帰ってね。

・曾我部 そうですね、本当に眞智子さん、鶴田さんのお母さんたちがすごく苦労して私達みんなお祭り、それからなにかといったら丹頂鶴音頭でやっていただいて。

・鶴田 私も帰ってきてから、徳保さんの家にいったもの、そし

たら徳保さんに「阿寒町の丹頂鶴音頭を普及させると言うよりも皆に教えて下さい」と言われたので、もう一度阿寒でやっていいのかしら、って言ったたら、「どしどしやってください」あの方がつくった方だから筋を通さなければいけない、と思っ行ってたんですよ、その時にいろんなことを言っようやく親子二代で継ぐ事ができたんですよ。

・曾我部 お母さんの意思を継いでね。

・鶴田 なにか急に話が来たんですよ、私のところに。前の公民館長さんの佐藤照雄さんが私に是非丹頂鶴音頭を普及させたいから私に指導、教えてやってください、それで徳保さんのところへ、あのときはまだお元気でしたから、私も昔から顔なじみだったから、こういう話をしているのよ、ということでも許可ではないけれど、お墨付きを徳保さんからいただいで、それじゃあということ始めたのがきっかけでした。

・曾我部 お母さん厳しかったんですよ、きちんと踊りなさいということ。

・吉田(勝) 今も鶴田さん、このまちの中心になって芸能を広めてくれていて、大変ありがたいと思います。あるとき釧路駅で列車が発車するときに丹頂鶴音頭がずっと放送になったのです。それは釧路の駅でもやってくれた。私お願いに行っただけど、必ず列車が発車する前に、丹頂鶴は日の本祝いの瑞鳥：いやあ感激したね。

・鶴田 そうですね、昔は駅でいろんなのを流していましたね、最近ないですね、そういうの。

・小林 それでは次、記念誌委員長の奥山さんお願い致します。

・奥山 私は今皆さんの愛護に対する実像のお話をたくさんいただいて感激しているところでありますが私が小さい頃には伊藤先生たちがおいでになるずっと前ということであまりタンチョ

ウの保護活動というか、愛護には携わっていない立場なんです
が、四十年を迎える中で思い出として一番残っているのは今教
育の職務の中で、携わらせていただいていることと、私は平成
四年に町の企画を担当の振興課長を仰せつかりましてそちらに
配置になったときに以前、昭和六十二年ですが、たまたま道の
議会から阿寒町にタンチョウ記念館を造るといふ構想がもちあ
がりまして、今日おいでの吉田会長さんも期成会の一員として
一生懸命努力をいただいたわけですけど、そういう経過の中に
あって道の施設を造ることは無理ではないかという事態になっ
ているところに私が振興課に行きまして、経過については私は
その前は議会の事務局長をしておりましたので、経過はわかっ
ていたのですが、自分達の会議の後で、当時は会議の後には皆さ
んでちよつとコミュニケーションの場があったんですが、その
時に期成会が立ち上がっているいろいろ皆さん努力していただい
ているんだけど、どうも道ではいい返事が無い、それでなん
とか町で考えて行きたいのだけれど、どうだろうと話をしまし
たら、その話を受けてくれた人が道の自然保護課から転勤になっ
て来てまもなくの人だったわけです。阿寒町で本当に取り組む
のかと聞かれました、今こういうことで道の話も進みようもな
いようなので、町として考えていかなければ、せつかく今、期
成会を立ち上げた中で頓挫してしまうようなことにはしたくな
い、というようなことを話しましたら、それじゃあ自然保護課
と話を通じるようにしてみようということ、つないでも
らったんです。まだ町の基本的な考え方がきまっていなかった
ものですから当時のうちの財政とか、町長に構想的なものを話
をさせてもらってそれでこういうかたちの中で期成会の努力に
報いるような形のもので実現できるような方向で努力して行き
たいと言いましたら、うちの財政もそれは町でやったら無理で

はないのか、というようなことで、そこをなんとか理解をして
もらって、当時はふるさと創生基金でタンチョウのプロジェクト
が立ち上がったものですから、実現をするにしてもやはりこ
ういうようなかたちのものでいかなければ実現できないとい
うことでなんとか説得して道へ話を持っていきました。そうした
ら道としてもあまりいい返事はない、それで釧路支庁へ足しげ
く通わせてもらう中で、ようやく道も動いてくれた。その陰に
は愛護会のこととか、期成会、それから道の議長さん、今の
厚岸の町長さんをやっておられる方がその時に道議会の議長さ
んというお立場でもありましたので、いろいろとお骨折りをい
ただいた、その中でなんとか町として当時の予算としては二億
円、道からも二億円出してほしい、ただし町で出す二億円につ
いては一般財源の中で出すことはできない、なんとか町の負担
の少ない形の中で考えさせてくれ、とのことでお話をして最終
的には七億円ちよつとだったと思いますが、その中の一億円は
宝くじのお金です。そういう実現を見れたというようなことで、
今この四十年の節目で記念誌をつくらせていただくという中で
会長からおまえやれよ、というようなことをお話いただいたの
ですが、一番先に思い出すのはそのことですね。あときはき
つかったけれど、よくここまでできたな（笑）という、それから
今観察センターとも連動して阿寒国際ツルセンターも立派に起
動していますし、その中で愛護会も事務局長を中心に動いてお
りますのでその意味ではよかったなという想いでおります。



・吉田（勝） 奥山さん本当にね、本当にあの

当時の事が私もよみがえるのですが、一生懸
命先生なんか道のほうでしてほしいと、そ
れで笑い話だけど、あるとき八幡議長も一緒
に行っただんですね、そしてちよつと滝川の辺で眠っていた、町

のバスでね、「おっ、この川なんだ」「なに議長言っているの、これ滝川だよ」といったら「うわー」って言って笑ったんだけど、「まいった、まいった」ってね、そんな道中肩がこらないような話をしながら行ったことを思い出しています。

・小林 それでは次に鶴にかかわって回想するなかで、エピソードとか今後これからのタンチョウ保護に向けてどんなことが必要なんだろうか、こんなことも普段考えている、というようなことも合わせて自由にお話ししたいと思います。



・金子 先ほど、昭和三十年の後半から昭和四十年にかけて、ちよつとそのころの話をしたのですが、昭和四十年から後半にちよつと触れてみたいのですが、先ほど山崎さんが氷割

の話をしたんですけど具体的に話すとの地域に住む五、六人の人たちで鶴友会、「鶴を友にする会」そういう小さいグループをつくったのですよ。そしてタンチョウも増えてきて、事故死などもめだつようになってきたのでタンチョウ鶴慰霊塔をつくってみたり、そういう最中、たまたま厳寒期で阿寒川が凍ってしまつて当時山崎定作さん、松橋弘義さんや鎧谷さん方と相談して山下建材にブルを出動してくださいと要請をしてちよつと十九線辺りの阿寒川の氷を割って鶴の寝ぐらの確保をはかったと。これは愛護会でもなければ行政側でもないのですよ。地域の人

がそんなことをやってみたり、それから山崎さんたちと、鶴を見に来るだけならいいのだけれどマナーの悪いカメラマンが寝ぐらの鶴の写真を撮るんですね、この監視役を買って出たのです。夜出かけました。雪の深いときでね、山崎さん、よつんばいになってはって歩いてそういうことを地域のグループでやりました。当時私も議会議員だったものだから、議会で鶴の保護に付いて何回か取り上げております。佐藤八夫さんが教育長時

代に特にいろんなことが取り上げられておりました。それで私

はこれからは私達の息子じゃなくて孫やひ孫の時代ですよ、これから四十年、五十年先地域の形態が大きく変わっていくんですね。先ほど話したように雑穀地帯から野菜地帯に変わっています。ですから鶴は人間を頼らなければ越冬できないような環境になってしまつたんですよ。それともうひとつ大事なことは今三十代、四十代の農家の上阿寒地域の人方、この人方は自分の親の後姿を見て育っているんですよ。鶴に対する愛情、見守ろうという気持ち。五年くらい前、本町第二連合町内会の中で町長を囲む会に曾我部さんも出席されて当時の佐々木町長に、上阿寒町内会長としてあえて町長を囲む懇談会の中で話をすることがあるんですよ、現在野菜地帯の人方が結構鶴の被害をこらえているんですよ、それはどういふことかというところ、キャベツや白菜、鶴が何の気なくちよつとつくんですね、そうするとそれは売り物にならないんですよ。ですから三十代、四十代の人方と接触して鶴の話をすると、本当に困っているんだよ、ということばが二言目に返ってくるんですよ。だからといって行政に苦情を申し出ると言うことではなくて、やっぱり親の後姿を見ているから、おれうちの鶴だよ、おれたちのだよ、というそういう気持ちを今三十代、四十代の人方は強くもっているんですよ。この人たちがいる限り私は大丈夫だと思つてますよ。それから先なんです。ですから四十年を契機にして少なくとも先ほど名前を挙げた人たち、そういう人たちの先人の苦勞というものを記念誌の中に活字を太くして、目立つような活字で入れていただくと同時に故人になられたけれども、そういう人たちの写真も添えて称える。そして孫になりますかひ孫になりますか五十年も六十年も先のことですから、そういう人たちが大人になって自分達の先代はこうやって鶴を守ってきたんだ

よ、ということ。これは軽視できない。先代の写真ものついでるんでないの。そういう気持ちを是非もってほしいなとそういう気持ちを是非持たせてあげたいな、そうするとやっぱり「安住の地」鶴から見ればその地域の人たちが鶴を見守る、そういう気持ちを行政も愛護会も真剣になって取り上げていかなければならない、そんな気がします。

・吉田（勝） 今後の展望だけど、今、金子さんもふれられていたけど、子々孫々に至るまで鶴を愛する心をみんなが持つて欲しい、これはだれしも同じ。私が一番心配されることは今度は三市町合併によって広域行政になる。そうすると釧路市になるわけですから、そのときに今の阿寒町のタンチョウ鶴愛護会という立場がどういうふうになるか、こちら辺はまだ合併推進会議の中であまり審議されていないと思う。これが釧路市タンチョウ鶴愛護会になったら我々阿寒町のタンチョウの里を始め、みんなが鶴を愛するという気持ちがあっても市の大きな広域行政の中でどのへんに想いをおいてもらえるか、これが大きな問題です。一番の早急の問題と言うのは、いろんな団体があるけれどもこの鶴の愛護会というのは鶴居とうちにしかないのです。

風光明媚な阿寒湖、釧路湿原の国立公園とは違う、これは阿寒を大事にしなければならぬと同時に、その現状を見てこれからの市の行政に反映してもらわなければならない。これは合併にあたって大きな問題です。広域になったならその精神というのが希薄になるんだと、小さい行政の中だと金子さんの話のようにうちの鶴が来た、うちの鶴が来たというような気持ちだけれど、そこが我々のこれからの活動のあり方、そして市の市政の目の向け方、こういったことに力を入れていかなければならないなと思います。

・小林 はいありがとうございます。吉田さん、小関さんあたり



何かこの課題も含めましてお願いします。

・小関 時代の流れといましようか、私達の中学時代は、ものを愛するという気持ちに年齢の差はなかったのですけど、今現在というのは年齢別にものごとを見るような傾向が非常に強いわけですが、それも結果的に先人の意思を引き継ぐということの障害になつていっているのではないかなという気がいたします。先ほど金子さんが言われたように、うちのじいちゃんとか、うちの父さんとか、そういう気持ちの引継ぎというのが一番ものを伝承するためには大事な事ではないかな、と私はつくづく思っています。また一番気がかりなことは金子さんの言葉の中にもありましたけれども、僕らの中学時代に山崎さんの向かいにはちょうど川をはさんでやや湿地状態でもありましたけれども、山崎さんのところで餌をついばんだ後、日中は一時川向の中村健太郎さんの畑ですとか我々のつくった池で休息をして、また夕方寝るために山崎さんのところに集まって、そういうパターンでの繰り返しだったんですけど、現状では集まって餌を食べるためには場所的にはいいでしょうけれども、俗にいう自然で鶴が生きていくための寝ぐらですとかそういう場所というのとはかなり荒廃してしまつたな、地元の方で興味のある方はわかっているかもしれないけれど、この町の中心街で一番近いところには二羽から三羽ほどここ三、四年富士見橋の上手にあります人道橋、あのすぐ上手に親子もしくは夫婦が毎年越冬しているようですね。昔のように、下舌辛部落のどこの家の裏には何十羽とか上舌辛に何十羽とか、そして山崎さんの近所にはとあの時代が懐かしいですけど、親の姿を子が見てる、じいちゃんの姿をまた親が見ているというようなかたちでその精神が一番大事なことでないかな、と思います。

常にも強いわけですが、それも結果的に先人の意思を引き継ぐということの障害になつていっているのではないかなという気がいたします。先ほど金子さんが言われたように、うちのじいちゃんとか、うちの父さんとか、そういう気持ちの引継ぎというのが一番ものを伝承するためには大事な事ではないかな、と私はつくづく思っています。また一番気がかりなことは金子さんの言葉の中にもありましたけれども、僕らの中学時代に山崎さんの向かいにはちょうど川をはさんでやや湿地状態でもありましたけれども、山崎さんのところで餌をついばんだ後、日中は一時川向の中村健太郎さんの畑ですとか我々のつくった池で休息をして、また夕方寝るために山崎さんのところに集まって、そういうパターンでの繰り返しだったんですけど、現状では集まって餌を食べるためには場所的にはいいでしょうけれども、俗にいう自然で鶴が生きていくための寝ぐらですとかそういう場所というのとはかなり荒廃してしまつたな、地元の方で興味のある方はわかっているかもしれないけれど、この町の中心街で一番近いところには二羽から三羽ほどここ三、四年富士見橋の上手にあります人道橋、あのすぐ上手に親子もしくは夫婦が毎年越冬しているようですね。昔のように、下舌辛部落のどこの家の裏には何十羽とか上舌辛に何十羽とか、そして山崎さんの近所にはとあの時代が懐かしいですけど、親の姿を子が見てる、じいちゃんの姿をまた親が見ているというようなかたちでその精神が一番大事なことでないかな、と思います。

・吉田(守) 鶴の保護の歴史を語る上で必ず通らなければならぬのが、阿寒中学校の鶴クラブの発足の話に戻らなければいけないと思うのですが、タンチョウが天然記念物に指定されたのが昭和十年の八月二十七日、特別天然記念物に指定されたのが昭和二十七年です。阿寒で鶴の姿を見たのが昭和二十四年、山崎さんのあたりだと言われています。二代目の阿寒中学校の校長として来た大井校長先生は昭和三十三年の四月に来ているのですが、その年の十月二十三日、スキー場のとなりにある阿寒中学校の学校林、作業を終えて子供たちと学校に戻る途中で鶴を見たのがきっかけなんです。その時の校長の話が残っているのですが、「教育は空想や理想ではなくて、直に身に触れるものと取り組んでこそ」これが鶴クラブを発足させるきっかけだったんです。その年の十月に鶴クラブが発足して、昭和三十三年、次の年ですが十月に神戸で開催された全国中学校の校長大会に校長先生が行って、鶴の日記を発表したんです。十一月に鶴の日記が野鳥観察記録として入賞されて、戻ってきて入院したんです。その時に神戸まで行ったのですが、山口県の八代、今の熊谷中学校ですね、八代中学校、それからもっと足を伸ばして鹿児島県の野田中学校に行っているんですね、昭和三十五年の年に鹿児島県の野田中学校と鶴の研究姉妹校になり、山口県の八代中学校とは昭和三十七年に姉妹校となっている。そういう歴史があるんですけど先ほど伊藤先生が言ったNHKの「こちらワンパクテレビ局」にのったのが昭和三十九年、その次の年くらいでしょうか、愛護会が出来たのが。阿寒中学校は実は鶴の日記だとか観察日記から始まって、四冊の本を出しているんです。本というか冊子といいますが、英語版も出していますから実は五冊出している、こんな中学校はないと思うんですね、全国でみても、阿寒中学校で学んでいる子供たちにその歴史を

きちんと伝えなければならぬんですけれども、先ほど言ったようにほとんど伝わっていません。五十年が平成九年にあったのですが、中学校のPTA会長という立場で、あんたがやらなきゃだめだと言われまして、歴史をしっかりと紐解いた結果すごいことがいっぱいわかって、パネルディスカッションをやったんですけど、一番呼びたかったのは山崎さんの一番下の弟さん、定夫さんですね、電話をしたんですけどちょっと仕事の関係で来れないということで残念だったのですが、あと大井校長先生の次女公子さん、彼女には来ていただいています。

それと沢出先生、それから伊藤先生、そしてもちろん小関君にも参加していただきましたけれども、あともうひとり、吉川英治賞をもらったのが昭和四十五年ですので、その時の生徒会長岡崎圭子さん、パネルディスカッションをやっていたのですけれども、そういうことをやることで子供たちに伝わっていく、それをまた繰り返し返していかなければならない。実は三年前に総合学習の中で呼ばれまして、三時間くらい子供たちにお話をしました。子供たちは泣いていました。やはりそういうことをきちんと伝えることで肌で感じてくれるんだということがわかりました。そういうことをわれわれ自身がやっていかなければだめなんだな、という気がします。

・小林 ありがとうございます。それでは他にございませんか。日頃思っていることで結構ですけど。

・曾我部 前に会長と出水市にも行ったことがあるんですけど、そのとき出水市の商店街がみんな同じ鶴のついた包装紙だとか袋だったのです。とにかく出水市は鶴ということ。ところが阿寒町って、タンチョウ鶴がいる、マリモがあると言うけれど看板ひとつ出ないような、町民の意識がちょっと足りないのではないのかな、と言ってみんなで帰ってきたのです。鶴の包

装紙を松屋さんで使っていますけれども、鶴居なら軒並み鶴の舞う里とありますけれども阿寒町の入口さえわからないという感覚でもうちよつと町民の意識も愛護する気持ちを確認するために何か町民に訴えるもの、タンチョウ鶴の看板、看板って何十年も言っているけど、お金がない、つて。「阿寒町、マリモとタンチョウの里へようこそ」くらい書いてもいいなと思うのですけれども、一生懸命やっていらした方々の努力が底辺まで行っていない。先生にもよりますね、二、三年で転勤してしまいますから、だから丹頂鶴音頭なんていっても、なんだかタコ踊りみたいなものしかできなくなってしまっているものね、町民の自覚も欲しいかなという気がします。せっかく皆さん苦勞してここに住み着くようになっていくんですから。



・伊藤 やはり教育に待つところは大きいと思うのです。先ほど金子さんが言われたようにそれぞれの家庭で言い伝えていくことと、阿寒中学校は昭和四十年、鎌田校長時代に「鶴翔青雲」という校訓を立てて現在「鶴翔青雲」で学校経営が

たちづくられているという経緯は変わらないのですよ。ただ校長先生によつてはそれは一応建前としてあるけれども、まあ時代の流れだし自分の任期は二年か三年だという感じで、心には思いながらもなかなか具体的に出来てこなかったんですけれども今の阿寒中学校の所在地が舌辛川の寝ぐら近くの所だから堀内校長先生の時代に二才つくりをしたらすぐ来たんですよ、鶴が。そういうふう実際に子供たちが常に観察し、触れさせるという教育を続けていたきたいということとそれから吉田守人君が言った様に過去の記録をきちんと次の時代に伝えていくということ。四十周年の愛護会の記念誌はまさにその次の時代へ伝えていくものとして、いいものをつくりたいという、編集

委員みんながそういう気持ちで一生懸命編集に取り組んでいこうと思つています。ですから学校で出した今までの鶴日記、日本の鶴、そして吉川英治賞をもらった学校の栄光のある時代をかみしめて、今自分達に出来ることはなんなのだろう、つまり自分にできることでこの郷土の誇りであるタンチョウを子供たちが愛情を持った目で自分達に何が出来るかと考えてもらう、そういう時期だと思つています。

・小林 ありがとうございます。皆さんまだお話ししたい事もあるでしょうが、会長さんからひとことお願いします。

・吉田(勝) 今日は四十年を振り返つてそれぞれ皆さん方が思ひ出と同時にまた今後に向けてどうあるべきか、ということをお話にお話しただいたわけでありませうけれども、行政におんぶにだっこでなんでもかんでも助成金をもらおうという姿勢は大嫌いです。タンチョウ鶴愛護会も自重努力をしていかなければならない、これが基本になるわけです。我々が望むことは官民一体となつて鶴だけでなく阿寒のいいところはみんな広めて行かなければならない、と思うわけです。なにも鶴だけにこだわつてはいけません。学校教育の場で「ふるさと教育」というのは一番大事なんです、自分の生まれ故郷、故郷教育のなかで鶴というものを大いに取り上げてもらいたい、これはやはり教育行政のなかで取り組んでもらいたいと思つています。最近その思想というか考え方が希薄になっていきます、非常に残念です。



・奥山 先日の阿寒中学校便りで鶴の餌の作り付けをしたという記事が町内にまわつておりましたが、今、会長さんが言われるのは若干そういう傾向には、時代的なものもあると思

うのでそういう事もあるかな、と思うのですが、ただわたしこの教育のほうの仕事になつてからひとつ感激したことは、ある

先生が阿寒の中学校に来られたときに餌の作付け作業をなんでこういうことをしなければいけないんだとおもったわけです、で一年たつて意味が充分わかりましたと言っていました。そういう思いを持った先生もおられるということも若干ご理解いただきたいと思えます。

・吉田（勝） 何はともあれ四十年はひとつ大きな節目、そして転換のときであります、釧路市の合併ということで、大きな課題も抱えているということですが、今までの力を今後に向けての四十周年はさらに飛躍する次代にむかって努力をお願いしたいと思えます。

・小林 みなさんの鶴への想いをいろいろお話しいただきましたが、これもちまして座談会を終了させていただきます。



給餌校交流会の会場に向かう先生と生徒



一斉調査が始まってまもないころの調査風景

町内給餌に尽くした人々

山崎 定次郎

やまざき さだじろう

1889～1974



釧路湿原に舞い降りる丹頂鶴は、今では一、〇〇〇羽を超える数が確認されていますが、昭和初期、丹頂は絶滅の危機にさらされていました。それを救ったのが、阿寒の一農民であった、山崎定次郎です。昭和二十五年、彼は、腹をすかせた丹頂の給餌に成功し、それをきっかけに丹頂を保護する動きは高まっていったのです。

「サルレン・カムイ」古くからアイヌ民族はこの鳥のことを「湿原の神様」と呼び、尊んできました。明治以前、北海道の大地には手付かずの自然があり、各地に広大な湿原が広がっていました。丹頂鶴はそこで悠々自適に暮らし繁殖を繰り返し、北の大地の空を羽ばたいていたのです。しかし、明治以後、多くの和人が入植し、湿原はことごとくその姿を畑や水田に変えていきました。住みかを追われた丹頂は次第に、北の大地からその優雅な姿を消していきました。ただ一箇所、あまりの低温で入植者達が水田にできなかった釧路湿原だけが丹頂鶴が生きていく最後の場所となったのです。しかしその数は激しく減り、人の目にふれることはなくなっていきました。

「絶滅したかもしれない」

関係者の中にはそうつぶやく人もでてきました。大正十三年、地元猟師が釧路湿原の奥地で偶然にも丹頂の姿をみかけます。北海道が調査に乗り出し、十数羽の生息数を確認しました。

「丹頂が生きていた！」このニュースは道内を駆け巡りました。そしてその保護のため昭和十年、丹頂は天然記念物に指定されました。地元有志達はエサがとれない厳寒期にドジョウを放流するなど地道な努力を続けますが、人間への警戒心が強い丹頂はそのエサに近寄ってもくれません。結局、生息数は一向にふえませんでした。釧路湿原の丹頂は、昭和二十年代まで、厳寒期の食料不足と心無いハンターの手によって絶滅の危機にさらされていたのです。それを救うきっかけとなったのが阿寒町に住む山崎定次郎でした。

昭和二十五年一月、ある雪の朝、定次郎が裏の畑に出てみると、トウモロコシに数羽の鶴が近寄ってきて、枯れた茎をついばんでいます。あまりの美しさにしばらく呆然と見とれていましたが、近寄ろうとすると鶴はすぐ飛び去ってしまいます。

「間違いない、丹頂だ！そうか、腹が減ってるんだな」

なんとか丹頂にエサを与えてあげたい。そこで朝、丹頂が飛んでくる時間を見計らって、トウモロコシを抱えながら畑で待っていました。間もなく釧路湿原の方角から数羽の丹頂が飛んできましたが、定次郎に警戒したのか、畑に撒いたトウモロコシには見向きもしません。

「臆病な鳥だ、わしが怖いのか」

仕方なく家に戻り、窓から畑の様子を見ることにしました。すると、丹頂は恐る恐る雪原に舞い降り、定次郎のまいたトウモロコシをついばみ始めたのです。

「やった！丹頂がわしのエサを食べた！」

これが丹頂の給餌に初めて成功した瞬間でした。この年釧路地方は寒波と猛吹雪で丹頂の餓死が相次いでおり、猛吹雪をやっと逃れて阿寒に降り立った七々八羽の丹頂が、定次郎の給餌によって命を救われたのです。山崎定次郎、六十歳の冬でした。

山崎定次郎は明治二十二年、富山県で農家を営む小作人の末っ子として生まれました。地主から与えられた畑を必死に耕す家族。どんなに一生懸命働いても決して自分のものにならない畑。そして末っ子の自分。息が詰まりそうな毎日を過ごしながら、定次郎はいつも広々とした大地での生活に憧れを感じていました。

十九歳になった時、旭川に住む親戚を頼りに、定次郎は北海道に渡る決意をします。

「いつか絶対自分の田んぼを持って米作りをしよう」

憧れだった北海道の広大な土地で、定次郎は米作りを手伝い始めました。

寒い北国での米作りを体で覚えた頃、阿寒町に住む姉から「自分で田んぼを持ちたいなら阿寒に来なさい」と誘われます。大正二年、飛びつくように阿寒にやって来た定次郎は二十五歳でした。姉からわざわざばかりの畑をわけてもらい、夢が実現した彼は無我夢中で米作りに取り組みました。

「こんなところで米作りなんかできるはずがない」周囲の批判も跳ね除け、定次郎は米作りに挑戦。そして成功します。

「やればできるんだあ、我々もやってみるべか」。この頃から、阿寒の農家達は定次郎の米作りに触発され、水田経営を始めます。そして地域の青年団を組織し、団結するようになっていきました。しかしこの地域の夏の低温は水田の稲穂にとって越えようもない壁であり、その少なすぎる収穫量ではみんな食べていくことができませんでした。

「この土地ではやはり米より畑作の方が収入になる。」青年会でこう結論がでると、定次郎をはじめ住民は、馬鈴薯やトウモロコシを中心に畑作でいくことに決めました。こうしてやっと収入も安定した頃、定次郎は生涯の伴侶を得、子供も生まれ、この地にどっしりと腰を落ち着けたのです。

「富山から出てきて本当に良かった。生涯この阿寒の地を自分のふるさととして精一杯がんばろう。」

昭和に入り戦争に突入すると、食糧難で家庭が火の車にもかかわらず、定次郎は戦争で亡くなった家族の面倒を見たり、畑の手伝いをしたり、子供達の教育問題にも相談に乗るなどして、辛い時期を住民皆で乗り越えました。定次郎はいつも物腰柔らかく、笑顔をやさしことのない温厚な人柄と、住民への思いやりを持ち合わせていました。そんな定次郎に住民達は絶大な信頼を寄せていくようになっていったのです。

昭和二十五年一月、丹頂の給餌に成功した定次郎は、翌朝、また翌朝もトウモロコシをまき続けました。まだ食糧事情も悪く、人間が

食糧に不自由する時代でしたが、自分の畑にエサを求めてやってくる丹頂を見捨ててはおけなかったのです。しかし他の住人たちは「丹頂なんて畑のものを食い荒らすだけではないか」と言い、妻も「鶴に食わせるのはいいけれど売る分までなくなってしまおう。」とこぼしました。厳しい農業の暮らしの中でエサ代だけでも大変でしたが、定次郎は聞きませんでした。

「鶴よお、おまえたちはほんとにきれいだなあ、死んだらだめだぞお、ほうら一杯食べろよ」

丹頂もそんな定次郎の愛情に添えて飛んで来るようになり、こうして彼の五ヘクタールの畑は、丹頂たちの安息の地となりました。近所の人々もそれを真似てエサまきを始めましたが、根気のいるこの作業は続くものではありません。いつのまにか一軒、また一軒と数は減り、結局は定次郎一人が毎日欠かさずトウモロコシを撒き続けたのです。

この暖かい招きに、丹頂たちは一日一日、定次郎との距離を縮め、三年目、ついに五メートルの距離まで近寄ってくるようになったのです。「鶴は賢いんじや。三日坊主の給餌をしてたんでは、もうそこには降りてこなくなる。わしは毎日毎日欠かさずエサを与えたから、わしの声や姿、そして撒き方やしぐさまで覚えてたんじや。そうなったら、もう離れないもんじや」

ふるさと富山に夢を見つけられず、四十年前そこを捨てて出てきてしまった定次郎にとって、阿寒に降り立つ丹頂鶴にエサをやり続ける作業は、自分の心への償いの行為だったのかもしれない。

丹頂は昭和二十七年、特別天然記念物に指定されました。定次郎はその時まで自費で給餌を行っていました。雪の多い時は、撒いたエサが埋もれて拾えないため、トウモロコシを茎ごと雪の上に差したり、木箱に入れてやったりと、丹頂が発見しやすいように、いろいろ工夫を凝らしました。その苦労は並大抵のものではありませんでした。この頃から町の人々は定次郎のことを「山崎の鶴じい」と呼ぶようになり、この名は道内外で広く知られるようになっていくのです。

そのうち、すっかり慣れてきた丹頂は、定次郎の姿を見つけると近寄ってきてエサをねだったり、朝になると「クワツ、クワツ」と声をあげて定次郎に催促するようになりました。

「こうなったらかわいくてたまらない。まるで子供や孫のようだ」

昭和二十七年、定次郎は丹頂にエサを与える給餌人として役所から正式に委嘱されました。

昭和三十三年、三十三年と、北海道は全道的な冷害に見舞われ、エサにありつけない丹頂はバタバタと餓死していきました。この冷害を機に「鶴を救おう」と、阿寒町内をはじめ全国各地で呼びかけが始まり、たくさんの方々が各地から送られてくるようになりました。

こうして丹頂保護の気運が高まるにつれて北海道庁は丹頂を「北海道の鳥」に指定、保護体制を一段と強化しました。しかし開発によって生息地が狭められてきたことから「これでは今に丹頂が全滅してしまう。なんとかしなくては」と町が一丸となって丹頂を保護することを訴え、定次郎も組織づくりに奔走しました。彼は給餌事業や生息観察などの意識を高めるための「丹頂祭り」や、郷土芸能としての「丹頂鶴音頭」の制定に尽力し、さらに丹頂の好物、ドジョウの養殖地も設置し、冬のエサ不足を補いました。

彼の努力の甲斐あって、昭和二十七年にわずか三十羽足らずだった丹頂の生息数も昭和三十年には一九〇羽、四十四年には二〇〇羽を

超えるようになりました。エサを与え始めて二十数年、丹頂は定次郎にとって、いつしか家族のような存在になっていました。「鶴が百羽近くも来てくれるわしの庭は世界一素晴らしい」

定次郎がこう豪語するように、彼の庭には丹頂見たさに連日のように見物客が訪れました。多い日には一〇〇人を超え、中には外国から来る者もあり、冬の阿寒の観光の目玉となっていたのです。

昭和三十四年、定次郎は北海道文化財保護委員会から正式に「丹頂鶴監視員」に任命されました。昭和三十九年には、長年にわたる丹頂の保護に尽した功労者として、北海道でただ一人「農林大臣表彰」を受け、さらに昭和四十七年には勲五等瑞宝章を授与、重なる名誉が、定次郎の穏やかな顔に刻み込まれていきました。

「鶴はなんといっても自然のままの姿に限る。真っ白な雪原の上を、自由に飛び、自由に遊ぶ。それが一番美しい。丹頂が舞い降りるこの風景は阿寒の里の宝だ、決してなくしてはいけません。」

昭和四十八年、鶴じい八十三歳の時、鶴の世話係りを長男の定作氏に譲りました。それから二年後、頑丈だった体も寄る年波には勝てず、その年の冬、とうとう入院しました。病床で鶴じいは毎日「鶴は大丈夫か」と口癖のように言っていました。具合が悪くおかしな夜、今まで星が見えていた北の空から雪混じりの風が急に吹いてきました。その音に混じってかすかに「クルツ、クルツ」と

鶴の鳴き声が聞こえてきたと言います。その時、鶴じいはグツと頭を持ち上げ、「鶴だ、鶴が鳴いている」とはっきりとした声で言いました。付き添っていた家族は皆窓の外を見ました。眼に映ったものは冷たい雪の原っぱだけでした。皆がベットを振り返った時、鶴じいはしずかに息を引取っていました。

山崎定次郎、享年八十五歳。現在息子の山崎定作氏は七十二歳。「丹頂とマリモを守り続けるのが、阿寒に生きる私達の責任」と語ります。一時は絶滅の危機にさらされた丹頂。しかし、明治時代から開墾を厳しく拒んできた釧路湿原と、山崎定次郎をはじめとする地元の人々の献身的な給餌活動が、世界にもまれな例として丹頂の生息数を復活させたのです。

昭和五十二年、山崎定次郎の裏庭は丹頂観察センターとして新たに設立、そして平成八年にはその横に阿寒国際鶴センターと、丹頂愛護発祥の碑が建てられました。

昭和五十二年、山崎定次郎の裏庭は丹頂観察センターとして新たに設立、そして平成八年にはその横に阿寒国際鶴センターと、丹頂愛護発祥の碑が建てられました。

昭和53年7月20日

みんなの北海道

みんなで築く北海道の会機関紙 第44号



山崎定作さん

カゼ引く暇なく 鳥獣運送 父を継ぎタンチョウを守る

鳥獣運送 父を継ぎタンチョウを守る

私の住む所はタンチョウとマリモのふる里阿寒町で、釧路市と阿寒湖畔のほぼ中間に位置し、酪農と野菜の栽培地帯の中にあります。 毎年秋になると湿原で夏をすごしたタンチョウがこの里に姿を見せ、湿原の凍結する十二月頃になると集団で飛来して越冬します。一月頃の一番多い時には一〇〇羽位集まります。冬期間はタンチョウの生活は給餌場を中心に、近くの阿寒川や小川に行ったり来たり生活です。タンチョウは昭和二十七年三月特別天然記念物に指定され(昭和四十年道鳥指定、四十年十一月には阿寒町丹頂鶴愛護会も発足して保護体制も強化されました。シシズンになると全国各地から見物客やカメラマンが大勢訪れ、保護管理も大変でしたが昨年十一月に阿寒町が観察センターを作ったからは、タンチョウを脅かすこともなくなりまし

た。私は、昭和四十八年からタンチョウ鶴愛護会の監事となり、五十年一月には父死亡のためタンチョウ給餌人、タンチョウ保護監視員となり、五十二年十一月からはタンチョウ観察センター管理人として保護につとめております。また今年五月には第三十三回愛鳥週全国野鳥保護のつどいが群馬県前橋市で行われ、席上、父子二代にわたるタンチョウの給餌と保護管理という事で、日本鳥類保護連盟総裁常陸宮殿下へ賞を受賞しました。私が本格的に取り組んできたのは三年です。総裁賞を頂けるなんて夢にも思っていませんでした。ただ父のあとをついで一生懸命やっているだけですから。冬になると毎日毎日雪の日も風の日も休むことなく給餌しなければならず、またツルのねぐらのパトロール、観察センターの管理などシシズンになると本当にカゼを引く暇もありません。タンチョウ保護のため今後ともみなさんと共にがんばってゆきたいと思っております。(タンチョウ観察センター管理 八・阿寒町)



タンチョウは自分の子供のようなものと山崎さん



山崎 定作さん(阿寒)

阿寒国際ツルセンターの分館「タンチョウ観察センター」前には、百五十羽以上のタンチョウが飛来する。山崎さんはここで、昭和四十八年から給餌を行っている。

給餌活動は親子二代にわたるもので、父の定次郎さんは、同二十五年にエサを与え始めた。同センターの敷地内には、給餌発祥の記念碑も設けられている。

「タンチョウの給餌は、父が始めたもの。畑に下

ウモロコシをまくようになった。ツルが集まり始めた。給餌の成果で数が増えるようになったのは、昭和三十年ぐらいのことだった」と当時を振り返る。

父の定次郎さんについては「タンチョウの給餌は父にとって、子育てのよつなものであったのではないか」と語る。親子二代にわたる活動が評価され、同五十七年には愛鳥週間になんだ「鳥類保護総裁賞」を受賞した。

敷地に給餌発祥の碑

親子2代、愛情注ぎ50年

また、同センターには、タンチョウ撮影を行う方

と毎年、会合をこぼぼとでもうれしい。中には二十年以上通い続けている人もいて、顔を合わせる「元気だったか」などと言葉を交わす」と笑顔を見せる。

給餌を行っているこの間には、天皇陛下が同センターを訪れたこともあった。山崎さんにとって、一番の思い出は「昭和五十八年当時、現在の天皇陛下は皇太子だった。タンチョウについて説明したが、とても緊張したことを覚えている」。

二代にわたって行ってきた給餌は、もう五十年近い。元気な限りこれからも続けていきたいという。「タンチョウの持つ美しさは、何物にもかえがたい。エサを与えながら毎日ツルの顔を見ているが、飽きることはない。その姿は自分の子供のようにも感じる」と話している。

メラマンが数多く訪れる。「顔なじみになった人

上阿寒の人々と鶴

—この地に生きる子々孫々へ—



愛護会副会長

金子 信 治

はじめに

上阿寒が丹頂の里といわれ、タンチョウ鶴の飛来地として、毎年、初秋にこの地に訪れるようになったことは、厳しい冬季に餌が与えられ、安心して、原野で育った子鶴と共に生きられる土地であることを知り、子別れの時期まで過ごすようになった。

しかし、その間、上阿寒の畑作農家は生産物であるトウモロコシ等の鶴による食害の被害は、それぞれ大変であった。でも特別天然記念物でもある、タンチョウは美しく、飛来してくる鶴との愛情のある交流があったればこそと思う。

次の方々は、山崎定次郎氏と共に飛来初期からタンチョウを守った方である。すでに故人となられたがその善行を讃えたい。

(六名)



川田二良様



松橋弘義様



石橋門盛様



坂本与作様



中屋繁松様



木村七郎様

今でも、タンチョウを守り続けられている方々



宮坂定雄様



原 博様



高橋 稔様



山崎定義様

この上阿寒に最初に入植された方々は、明治三十二年に菅野定吉氏とそのご家族で、私の祖父金子亀蔵は大正七年に入植した。現在、私達は二代目、三代目の時代である。

昭和三十五年までは水田を開き米作もして、雑穀、野菜で生計を立てていた。時代の流れと共に昭和三十七年、上阿寒部落農事組合ができて、野菜の早出し作付にビニール利用等をして、市場に安定供給ができるよう野菜組合の設立によって、部落一丸となって野菜生産に力を注いでいた。

トウモロコシは収穫も多いし、市場価格もよかった。ところが、収穫時期になる頃

に鶴が飛来して、よく実のなったものを餌としてついばみ、商品として売り物にならないことで、生産農家は共通の悩みを抱えていた。

特に農地の少ない家では、生活に影響することが大きかった。

原 博氏は鶴と共存を考えて、阿寒川の川岸近くにトウキビ畑をつくり、収穫した後、まだ実が多少ついているものを残して、鶴の餌として与えていた。

石橋門盛氏はかなりの被害があったようで、よく奥さんと交代で畑に飛来してきた鶴から生産物を守るために追いたてもしたが、やがて、鶴もひもじかろうと鶴への愛情に目ざめて、収穫を早目にして、トウモロコシを与えるようになった。

川田二良氏も鶴との共存を考えて、被害を最小限度にとどめるよう作付けを工夫していた。不幸なことに三女の京子さんが阿寒高校に入学して一ヶ月後に、帰宅中にまわりも国道で交通事故に逢い、短い生涯を閉じた。私はその葬儀委員長として葬儀を執行了した。京子さんが阿寒中学校在学中に書いた詩をここに伝えたい。

タンチョウ

阿寒中学校ツルクラブ 川田 京子

雪の中に―

凍りつく吹雪の中に

声をたがいに確かめあつて

タンチョウは生きている

雪の中に―

キラキラ光る雪野原に

その姿 ほこらしげに

タンチョウは踊っている

雪の中に―

夕やけにそまる地平線に 明日の希望に

声をあげて タンチョウは歌っている

春はちかい けがれない雪原をタンチョウは

歌う 踊る はねる 鳴く 走る

今日という日を生きて……

明日という日を喜んで……

生命ある躍動を

歌う 踊る はねる 鳴く 走る

雪の中に―

この詩は、阿寒高校入学の希望に燃えていた四月六日、NHKテレビの全国放送の「明日は君達のもの」の第一回目の放送であった。

阿寒中学校と山口県八代中学校、鹿児島県野田中学校のツルクラブ員の交流を描い

た放送で朗読されて、番組を観ていた多くの人々に感動を与えた。本人は短い生涯であったが、この詩によって川田京子さんは忘れられない。又、上阿寒に飛来する鶴達への未来へ向けてのメッセージともなった。

この様に親も生活に懸命に生きながら、飛来する鶴達に愛情をもつて接してきた。親の姿を観て育った子ども達が、小中学校で鶴の愛護を教育を通して学び、実践してきたことを、私は上阿寒部落の誇りに思っており、子々孫々まで伝え、いつまでも鶴を守ってほしいと願っている。

山崎定次郎氏や定作氏親子二代にわたつて鶴の愛護で有名になった方もあれば、四十年代、野菜出荷の会合で鶴の被害について話し合い、当時、私は町議会議員でもあったので生産者の立場から鶴の愛護と上阿寒の農家の生活の安定について議案に提案したこともあった。鶴が飛来することが地域の繁栄になり、部落の人々の生活の安定になればと念願し、努力していた。

心ないカメラマンが許可も受けないで畑に入り、鶴を追いかけ撮影する様子を松橋弘義氏は「俺のところの鶴を追いかけるな」と注意する方も多かった。

鶴友会という小さな会をつくり、その頃できたレストラン「鶴」のオーナー池田久治氏や従業員の鏡谷氏などが、たびたび鶴

のために使つて下さいと寄付をいただいたこともあった。

中屋繁松氏は野鳥の会で表彰を受けた方であるが、本当に農民としても真面目な人柄で心から鶴を愛された方であった。もっと個々について書いておきたいのだが資料に、阿寒町野菜組合設立二十周年記念誌の中から阿寒町野菜組合入植者一覧を掲載していただいた。この中の多くの人々が鶴を愛して、鶴の飛来地として安心して毎年、飛来できる環境をつくってきた人々である。

現在、丹頂の里として、赤いベレー、道の駅、鶴の観察センターなどの施設ができ、鶴にとつては環境の変化があるが、かわらず飛来してきている。

おわりに釧路市と合併しても、この上阿寒に住む、私達の子や孫達、新しく住人となられる方々が、いつまでも、この地を安住の地として、飛来する鶴達に変わらぬ愛情をそそぎ、受け継いで守っていただきたいと切に念願し、後世に伝える言葉としたい。

丹頂鶴慰霊塔



特別天然記念物タンチョウは、この地方に毎年秋から春まで、およそ百二十羽飛来し、地元の暖かい愛情のもとに保護されています。

この慰霊塔は、これまで死んだ多くのタンチョウのめい福を祈り、あわせて一般の人たちに保護を訴えようと建立したものです。タンチョウは、このような人たちの愛にこたえ、雪原で華麗に乱舞し、訪れる人たちを幻想の世界へと誘ってくれています。

昭和五十二年四月

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

資料として

野菜組合入植者一覧

氏名	初代	二代	三代	入植年	入植地	入植前居住地
菅野孝志	定吉	和	孝志	明32	上阿寒	福島県相馬郡
中屋若夫	竹松	繁松	若夫	35	"	富山県
吉田正	藤九郎	徳治	正	35	"	石川県鳳至部鶴川村
前崎弘正	定八	弘	弘正	39	"	福島県
松橋邦彦	寅治	邦義	邦彦	40	"	福島県相馬郡日之木村
松橋直義	寅治	份直義		40	"	福島県相馬郡日之木村
坂本勝正	栄作	与作	勝正	40	"	青森県北津軽郡亀田村
辰尾治雄	徳治郎	直治	治雄	45	"	富山県中新川郡
山崎定作	定次郎	定作	一彦	大2	"	富山県中新川郡上市町
山崎進一	定次郎	份進一		2	上舌辛	富山県中新川郡上市町
山崎定義	定次郎	份定義		2	上阿寒	富山県中新川郡上市町
佐藤三春	三之助	三春		7	"	山形県
高橋通	泰治	通		7	"	岐阜県
金子信治	亀蔵	份政蔵	信治	7	"	福島県
木村輝夫	捨松	七郎	輝夫	8	"	和歌山県
高井幾夫	幾夫	晴士		昭22	"	岐阜県
石村三郎	三郎					帯広市
成田又吉	又吉	達也		40	布伏内	布伏内
畑島秀雄	米吉	嘉七郎	秀雄		上舌辛	富山県西砺波郡
浜田幸蔵	影雄	幸長	幸蔵		下舌辛	高知県

人々を尽くしたその保護のヨシ

昭和三年北海道特定移民願叶う。この年四十一才。入地するため伊豫三島神社に、吾は北海道移民につき祈願、「只今から北海道に渡りこの大神米を作つて参ります。米の出来ない土地には子孫をおきません」との決意を申し述べる。

見送り下さる一同に御札を述べ三島駅から乗車して二夜三日がかりで上川郡鷹栖村十七線十六号、加地庄吉伯父宅に立ち寄り、米種五合を頂き、現地に到着。移民同志のクジにより小生には当地が当たる。

移民収容バラックから通い、二間四間のバラックを建て、親子四名の生命を守る。鍬と鎌、心身一体真を守れば、神は守る。精神一到何事か成らざらん。身を捨ててこそ先途と勤むれば、月日の数も知らで年経ん。

五月に成れば、雪も融けこの二十一線の地も春めききたりて、その中に、鶴二羽現われたその時、鶴に松と教えられたが、このようなところに住む鳥かと後ずさりして帰宅したが、家人にその話せず。

昭和三年の暑さは故郷の如し、遅まきトウキビも実り上々。世の中は草木も同じ神にこそあれ。昭和六年当地々下二尺凍結

六月来るも地温昇らず、収穫皆無。鶴も姿を見せず。

鶴は我ら阿寒町民初め生息地の人々の愛護精神により増殖しましたが、ヨシズ原野でなければ子育てできない。湿原ヨシズ地に集まる故我等の畑に姿を見ることがなくなり、給餌もできなくなることと思う時、この大自然の美が見られなくなるのを寂しく思う。昭和四十八年頃のように水田地に行くと必ず鶴が見える観光地でありました。中間に小川が流

私の長寿は鶴のおかげ



阿寒町 給餌人 加地良次

れ、ヨシズの生えた沢と凹地。水田の中に鯉を育てるための池。田植の六月の初め、夫婦鶴は大空を飛ぶ。その姿は今もなお心に残る私の長寿も鶴のおかげと鶴を敬し慕うものがある。





仁々志別で給餌を続ける加地さん。給餌は親子2代にわたる



加地 政富さん (阿寒)

加地さんの自宅は、阿寒町の仁々志別にある。給餌は父親の良次さんが昭和四十年に始めたもので、親子二代にわたる。今年は一組六羽のタンチョウが飛来している。加地さんが給餌を引き継いだのは、同六十一年のことだった。父親はタンチョウのため、わざわざ下ウモロコシを作るほど熱心だった。私は父が亡くなる少し前から給餌を行っているが、引き継

ぐという強い気持ちはなかった。ツルの話をすることはなく、アドバースも受けなかった」と思い出を語る。今年、飛来しているのは二組の六羽。それぞれがつかいで、幼鳥を連れてきている。なわばり意識がとてもしっかりで、力の強い方が弱い方を追っ払ってしまっている。一緒にエサをついはむ姿を見ることがないという。また、給餌を行っている

るこの間には、ケガをしまったタンチョウも

毎冬の飛来楽しみに 仁々志別で親子2代の給餌

いた。今から五年前のこと。「ケガをしたため、片

方の羽が下がってしまっ
たツルがいた。とても弱
っていたので、キツネが
後を付け食べようと狙っ
ていた。支庁に連絡する
と動物園の職員が訪れ、
保護してくれた」と振り
返る。

こつした中、給餌場と
なる牧草地周辺の環境
も、ここ数年で変わった。
「周りにはヨシが群生
し、以前はヤチという状
態。タンチョウにとつて
いいことは分からない
が、山もはつきり見える
ようになった」。

給餌を初めてから十年
以上になるが、飛来する
タンチョウは警戒心が強
く、あまり近くに寄るこ
とはできない。加地さん
はそれでも毎年タンチョ
ウを待ち続けてしまっ
たという。冬のタンチョウは
特に美しく感じる。自分
の所に戻ってきてくれる
ことが何よりもうれし
い」と笑顔で話している。



阿寒町の市街地から約三キロ離れた上舌辛にある牧場。高橋さんはここでタンチョウの給餌をしている。十年前に隣の農家から正式に引き継いだのが、以前から給餌を行っており、その期間は三十年を超える。

高橋さんは四十年前から、この地で酪農を営んでいる。はじめは牛のエサでもあるデントコーンを与えた。昔は十羽ほどのタンチョウが来たが、今年はずがいの二羽だけ。数が減っても寂しい」と振り返る。また、タンチョウの飛来は家族の楽しみにもなっており、十一月になると、毎年待ち遠しい気持ちになる。家族もツルを見て喜んで」と微笑

んで見せる。

高橋さんが給餌を始めたころのタンチョウは、農家にとって書鳥ともいえる存在だった。しかし、生息数が減少し、給餌が定着するようになると、農家の間でも存在が見直されるようになったという。

当時を振り返り「私も最初のころはツルに対して、それほど興味を持っていなかった。家畜の肥料を食べてしまうので、書鳥というイメージがあった。しかし、給餌を続けるうちに段々愛情がわくようになっていった」と語る。

十羽以上飛来していたタンチョウも、現在はつがいの二羽だけになった。周囲の環境も大きく

変化し、生息に与える影響も危惧している。「付近の道路も舗装され、この辺りもすっかり明るくなった。舌辛川も水位が下るなど、大きく変貌した。環境の変化が飛来数の減

少と関係があるのかもしれない」。給餌場の牧草地では、三月いっぱいまでタンチョウの姿を見ることができ、何気なく始めた給餌も、三十年を超えるようになった。「給餌は私の楽しみになっている。数が減っているのはとても残念だが、タンチョウが飛来する限りエサを与えていきたい」と話している。

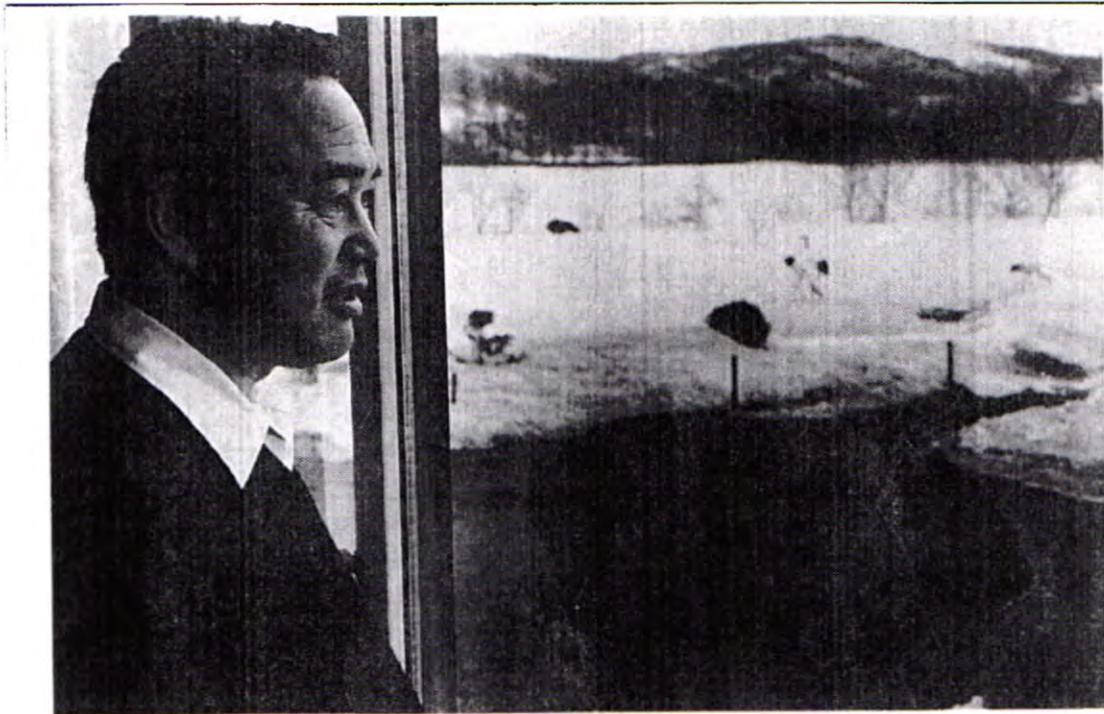
環境変化 生息への影響危惧

給餌続けて30年以上



タンチョウが飛来する高橋さんの牧場。周囲の環境も大きく変わったという

高橋 良一さん(阿寒)



下徹別で給餌をしている鈴木さん。居間の窓からは飛来する3羽の姿を眺めることができる

鈴木さんが給餌を始めたのは、今から四年前。昭和三十三年から父親の義雄さんがエサを与えていたが、高齢のため後を継ぐことが出来なかった。現在も三羽が飛来しており、下徹別の自宅の窓からはタンチョウの美しい姿を眺めることができる。

親子の二代にわたる給餌活動は、約四十年にわたるもの。「父親は郵便局に勤務する傍ら、エサを与え続けた。二年前に故人となったが、それ以前に体が弱くなっていたので、居間からその姿を眺めることはできなくな

った。現在では、家でくつろぎながらタンチョウを眺めることができる」と、自分の身内のようにも感じる。

また、毎年この季節になると、タンチョウは子別れする。今年も幼鳥が飛来しており、その時期がそろそろ近づいている。「子別れの際には、親が子供を突き始めるようになる。自然の摂理と言えるものだが、幼鳥の鳴き声を聞くことも悲しい気分になる」と語る。

鈴木浪夫さん（阿寒）



居間の窓から姿が

親子「カメラで観察記録も」

見ることができるようになった。毎日接している

鈴木さんは以前からタンチョウを観察し、記録を撮っている。今年はずりょうを手に、写真撮影も本格的に始めた。今後写真も撮り続け、アルバムなども製作してみたいという。「シカとタンチョウと一緒にエサを食べている写真も撮った。居間から眺めていると珍しい場面に出くわすこともあるので、カメラを常に準備している。撮影を続け写真で観察記録を作りたいと笑顔をみせている。



上舌辛で給餌を行っている及川さん。牧草地にはつがいの2羽が飛来している



及川 シマ子さん(阿寒)

阿寒町の市街地から約五時離れた上舌辛の一角に、及川さんの自宅がある。飛来しているのは、つがいの二羽。給餌人になったのは、昭和五十年のことだった。今年、訪れているタンチョウは特に警戒心が強いという。及川さんは昭和三十年、この地に移住した。同四十年から酪農を営むようになり、同五十年に給餌を始めた。「酪農を始めたころは、牛のエサでもあるトウモロコシをタ

ンチョウに与えた。昭和五十年代には四十羽以上が飛来していたが、最近は一羽がいただけ。数がめっきり減ってしまった、とても寂しい気がする。」

今年飛来しているのは、例年訪れていたタンチョウではなく、新しいつがい。これまで、かなり近々まで寄ることができたが、ある程度の距離になると飛び去ってしまう。「今年のタンチョウは、とても警戒心が強い。しかし、自宅の窓からは

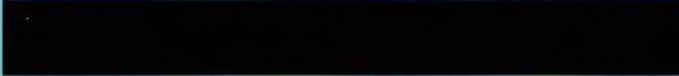
優雅なダンスを眺めることができるので、毎日薬

往時の40羽から2羽に 「給餌は今や生活のリズム」

しい思いをしつづける」と語る。

給餌を行っている間には、缶ジュースのフルトップにくちばしを突っ込んだため、エサを食べることができなくなってしまうタンチョウもいた。「町教委や鶴公園、動物園の関係者がワナを仕掛け、なんとかフルトップを外そうとしたが、警戒心が強くなった。十日ほど経つと自然に外れ、ほっとしたことも思い出のひとつ」と当時を振り返る。

十一月下旬に姿を現すタンチョウも、三月中旬になると飛び立っていく。親と分かれる際に発する幼鳥の鳴き声は、悲しい声に感じられる時もあるという。タンチョウが姿を見せると一年の仕事が終わる、帰っていく時には仕事が始まるという気がする。給餌は日常生活のリズムと言えるもの。「この笑顔を見せたい。



町内愛鳥校紹介

阿寒町立阿寒小学校

校長 竹本 和彦

阿寒小学校の前庭には、「丹頂」をあしらったモニュメントの「カリオンの鐘」があり、体育館アリーナの外壁には丹頂が大空に舞い上がる姿と丹頂の親子の姿が描かれている。

安らぎを与えてくれるカリオンから流れる鐘の音と子供たちに寄せる想いを描いた「丹頂」の姿は、まさに阿寒小学校の象徴であり、学校を訪れる多くの方々から一様に感嘆の声が聞かれるのである。

阿寒小学校はこれまで色々なかたちで「丹頂」とのかかわりを持ってきた。

その一つに、「丹頂の里」の学校でもある本校は、阿寒町タンチョウ鶴愛護会の愛護活動協力校として、十二月に行われる丹頂一斉調査に長くからかわり、保護のための一役を担ってきたのである。

また、子供

たちが郷土の

誇りである特

別天然記念物

である「丹頂」

のことを調べ

たい時に役立

つようにと、

「丹頂」の生

態や保護の歴

史など様々な



八代小学校の児童の文芸会

「ツル」が縁で姉妹校に
山口県の八代市にある八代小学校と阿寒町立阿寒小学校は、昭和四十三年十二月に「ツル」が取り持つ縁で姉妹校になった。

阿寒町立阿寒小学校は、昭和四十三年十二月に「ツル」が取り持つ縁で姉妹校になった。山口県の八代市にある八代小学校と阿寒町立阿寒小学校は、昭和四十三年十二月に「ツル」が取り持つ縁で姉妹校になった。



(撮影 前阿寒町教育長 高橋兼夫)



ことを学習資料集としてまとめ、学習に活用させている。

これらの活動を通し「丹頂」を取り巻く自然や保護に対する意識の啓蒙を図ってきたのである。

このことは「丹頂」だけでなく、どまらず、昭和四十三年、本校が北海道愛鳥モデル校として指定を受けたことをきっかけに、

校庭に小鳥の村をつくり、巣箱掛けをするなど野鳥の保護運動にも力を注いできたのである。

これら一連の活動によって、子供たちの「丹頂」や野鳥など

に対する愛鳥思想が深まり、普及啓発の模範校となったのである。こうした歩みの中、平成六年には「ツル」が取り持つ縁で、ナベツルの越冬地として知られる山口県の八代小学校と姉妹校になり、お互いに保護活動など情報交換を深めることになった。しかし、残念なことに数年間その交流は続いたが、いつのまに



か八代小学校からの情報が途絶えてしまい、今現在行われていないまま今日に至っている。

(2年の学習 1月号 2004 学研発行)

さて、阿寒小学校の子供たちと丹頂との直接のかかわりは、阿寒中学校とちがって、ごく最近のことである。

実は、「丹頂」と本校の子供たちとの直接のかかわりは、平成十四年に「生活科」や「総合的な学習の時間」などを使った学習活動の一環として誕生したものであった。つまり、「目的をもって自然体験や社会体験、生産体験などを行い、阿寒町の自然や社会、文化を愛する心情を育てる」ことをねらいとする「生活科」や「総合的な学習の時間」の中で「丹頂」を取り上げたのである。

子供たち自らの体験を通して「丹頂」や自然に対する自分とのかかわりについて考えさせたい。そのためには、子供たち自らの手でデントコーンを育てる活動を春から秋にかけて取り組むのである。そして、冬には「にお」をグラウンドにつくり、「丹頂」とともに生活をしようと試みたのである。

その結果、子供たちの努力が実り、数は多くはないのだが、子供たちの作った「にお」に舞い降り、餌を啄む姿が毎年のように見られるのである。

特に、平成十五年、阿寒小学校で文部科学省の地域指定による「児童生徒の心に響く道徳教育」の研究会が開催された時、「丹頂」がグラウンドに舞い降り、子供たちの歓声と共に自然に溶け込む「丹頂」の姿を見た参観者は感動を受け、「豊かな心を育む道徳教育」研究会に花を添えてくれたのであった。

また、平成十六年の学研一月号に餌づくりや「にお」づくりなど「丹頂」をめぐる、子供たちの活動の様子が紹介された。

さらに、平成十八年度から使われる中学校の英語の教科書に本校の子供たちと丹頂の写真が一部掲載された。

これからも「丹頂」を地域の宝として、そして誇りとして、大切に見守り、「丹頂」や阿寒の自然との共存・共生を図っていくために子供たちの活動を今後も続けていきたいと思っている。

自分たちでえさをふくらしただよ

? たんちようは何を食べるの?

どじよう、うぐい、かえる、とんぼ、ばった、とうもろこし(デントコーン)、クローバーなど、何でも食べるよ。冬はえさがなくなるので、人があたえるデントコーンを食べるよ。

春 たんちようのえさにするデントコーンのたねを学校の畑にまいたよ。



「じぶずつまごてごよ。」

夏 畑の草とりをしたよ。なかなかぬけないぞ。



秋 デントコーンがみのったよ。かわをはいで日にほしたよ。たんちようがえさを食へやすいように、目じるしになるしかけ、「にお」を作ったよ。



「こんなにたくさんとれたよ。」

※デントコーンは、牛などが食べるとうもろこしだよ。

冬 「にお」を校ていのまん中に立てたよ。よいしたデントコーンは300本。



「にお」は、えさがある目じるしたよ。



「にお」のまわりはデントコーンをまぐよ。





学校に

たんちようが

やって来た!

近よるとニギハクしつまるのび

50メートルいじょう

はなれて見まもるよ。

? たんちようは
どこでねるの?

川の中でねるよ。ながれがゆるやかなあさいとこで一本足で立って、くちばしをせ中の羽の中に入れてねるよ。川でねると、きつねなどにあそわれにくいし、冬は、地面の上よりあったかいんだよ。

来ない日は、
しんばいこ
なるんだ。

うれしくて
じゅぎょう中で
見とれてしまつたよ。

阿寒町立下徹別小学校

(平成五年三月三十一日閉校)



(写真撮影：第48回卒業生 松下美智雄氏)

遠くに阿寒連峰を望み、丹頂の舞う学び舎。阿寒町立下徹別小学校はまさしく「丹頂の里」の学校であった。

しかし、残念ながら児童数の減少により平成五年三月三十一日をもって六十七年の歴史に幕を閉じ、阿寒小学校へ統合するに至ったのである。

今現在、学校は下徹別コミュニティセンター（丹頂の家）として活用されている。

さて、下徹別小学校は丹頂と共に歩んできた学校といえる。

昭和五十九年に作成した学習資料集に次のようなことが記されている。

「私たちの学校 下徹別小学校は、『タンチョウの里』の学校です。きゆうじ場である『タンチョウ観察センター』と、タンチョウのねぐらとの、ちょうど真ん中ほどにある学校です。

朝、冬のしばれで、すき通ったように青く輝く空を、大きな白い羽をゆっくり動きしながら、仲良くエサ場に向かう親子のタンチョウのやさしさあふれた美しいすがた。

夕方、三十羽も四十羽もきれいにV字形にならんで夕焼け雲の空いっぱいになって、『ピイピイ』鳴く子づるを中にして、たがいに鳴き合いながらねぐらに向かうタンチョウの群れの見事なまでの美しさ。そんなすばらしく美しいタンチョウが、校舎の屋根スレスレに朝夕飛び交う学校です。晩秋から冬にかけては、まさに、タンチョウに明け、タンチョウに暮れている学校なのです。

私たちは、絶滅の危機にあった世界でもめずらしく美しい鳥、特別天然記念物『タンチョウ』が、この地で冬を過ごしていることが、とてもうれしく、誇りにさえ思っているのです。」

このことからいっても下徹別小学校は「丹頂の里」の学校であり、学校の歴史と共に丹頂を見守り続けてきているのである。

子供たちは丹頂の一斉調査はもちろんのこと日常観察、給餌など保護運動や啓蒙活動に一生懸命に取り組み、

昭和三十九年には教育映画(東映)「鶴と子供達」に五、六年児童が出演するなかでその様子が紹介されたのである。昭和四十一年にもHBC映画班が丹頂鶴



行啓に際し本校児童・職員特別面談懇談をする

と子供たちの様子を撮影。このように下徹別小学校の子供たちと鶴との深い結びが全国・全道で紹介されたのである。

また、昭和五十九年、一月に皇太子ご夫妻（現天皇陛下・皇后陛下）が当町のタンチョウ観察センターをご視察された時、全校児童十三人の子供たちが丹頂に関してお話すると言う大任を仰せつかったのである。忘れられぬ喜びの思い出の一ページであった。

皇太子ご夫妻観察センターご視察

皇太子御夫妻に会う

五年 佐藤 近良

きのうの二時ごろから、タンチョウかんきつセンターで、皇太子御夫妻に会いました。

初めに中に入って、食堂のほうにいった皇太子殿下、美智子妃殿下のくるのをまっています。二十分ぐらいたってから、皇太子殿下がいらっしやいました。そのしゅんかんに、報道人たちが写真を撮りはじめました。

皇太子殿下が資料室の方についている間に、ぼくたちは並びました。並んだときは、どういふ質問があるかあせていました。しばらくして、記者の人たちがこつちにくるので、ドキドキしました。

皇太子殿下がこちらにきたら、急に寒かったのがあたたかくなりました。そして、いろいろ質問されたことを、ほとんどぼくと由香ちゃんの二人でこたえました。

お帰りになる時に、「どうもありがとう」と何回も言っただけです。車になるところまで、見おくりをしました。

（下てしの子の四季11号より）

昭和59年1月25日（水曜日）

タンチョウで皇太子ご夫妻とお話

下徹別小児童が"大任"

資料作成、礼儀作法や服装も地域挙げて準備



皇太子ご夫妻と対面する児童たちと、お母さんたちも当日の準備に大変な様子。

皇太子ご夫妻が皇太子ご夫妻と対面する児童たちと、お母さんたちも当日の準備に大変な様子。

皇太子ご夫妻が皇太子ご夫妻と対面する児童たちと、お母さんたちも当日の準備に大変な様子。

昭和六十年には全校あげての丹頂の愛護活動が認められ、北海道社会貢献賞（野生鳥獣保護功労）を受賞したのである。

その後、閉校になるまで子供たちの手で「丹頂」の愛護活動は続けられたが、現在、学校がなくなっても丹頂の里として地域ぐるみで丹頂を見守り続けているのである。

表彰状

北海道社会貢献賞

阿寒町下徹別小学校 殿

あなたは毎年、丹頂野生鳥獣の保護のために、児童、教職員、保護者、及び地域住民と協力して、丹頂の里の整備に貢献して来られています。この功績を表彰いたします。

昭和五十九年十二月 北海道知事 横路孝弘

タンチョウとお友達！

阿寒町の下徹別小

道社会貢献賞（野生鳥獣保護功労）を受賞

の功績を毎年調査に毎年参加



阿寒町下徹別小学校の児童、教職員、保護者、及び地域住民が協力して、丹頂の里の整備に貢献して来られています。この功績を表彰いたします。

阿寒町立阿寒中学校

校長 安藤 弘子

◇本校の教育指針

「鶴翔青雲」とは、昭和四十年に制定された阿寒中学校の校訓であり、学校教育目標でもあります。当時の鎌田 勉校長は、学校教育目標を、地域に密着する鶴の姿態や生活に表象して校訓を設定、これの具体化を目標とするとされました。

現在も教室に、この学校教育目標を掲示し、大空を天高く、そして、力強く飛んでいく一群のツルののように、大きな夢と希望と志をもち、現在・未来へ向かって羽ばたいていく生徒を育てることを目指しております。

・青雲の大志を抱こう

青雲に向かって誇り高く翔く一群の鶴のように

・不屈の情魂を燃やそう

厳寒の夜も不屈の情魂を燃やして、仲間の安全を警戒する

鶴のように

・磨かれた教養を身につけよう

果敢な活動をうちに秘め、しかも容姿端麗、挙動優美な鶴

のように

・たくましい体をつくろう

広原を疾駆し冬の河中に眠り、飢餓に耐えて王者の権威を

守る鶴のように

◇阿寒中学校と鶴のかかり

昭和二十五年に阿寒町の山崎定次郎さんが給餌をはじめて以来、中学校周辺にもツルが姿を見せるようになっていました。

昭和三十二年春に赴任してきた大井健次校長は、市街地を飛ぶツルを見て、この美しい鳥を何とか生徒の教育に生かせないものかと考え、早速「ツルクラブ」を発足させました。

大井校長は「教育は空想や理想ではなく、じかに身にふれるものと取り組んでこそ」という信念であったと、「教師のツル日記」に綴っています。

ツルクラブはその十月に三十六名で編成、校下を十三地区に分けて持ち寄りのエサで給餌を開始し、同時に観察結果をツル日記として記録を続けました。生徒たちは観察や調査だけにとどまらず、トウモロコシ畑やドジョウ池まで造ってツルのエサの確保に取り組みました。その成果は昭和三十五年の「鶴の日記」や昭和三十九年の「日本の鶴」にまとめ、貴重な資料は全国から寄せられた善意の協力者にも送られました。

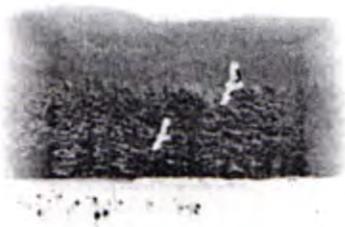
この実績は北海道知事表彰などの多くの賞をはじめ、昭和四十五年には名誉ある吉川英治賞に輝きました。

◇停滞を余儀なくした保護活動

しかし、盛んだったタンチョウの保護活動も、昭和四十九年にはトウキビ畑が宅地造成の関係で栽培不可能になったことや、送電線によるタンチョウの事故死の増加により給餌が困難になったり、昭和二十七年から続いている十二月の恒例のツルの一斉確認調査への協力以外は活動が停滞しました。

◇新教育課程の中で

平成十一年総合的な学習の時間の取り組みの中で生徒からグラウンドに鶴を呼んでみたいという発想から鶴の保護活動が再開さ



タンチョウの一斉調査

れました。

それ以降、タンチョウの給餌は、生徒会の委員会活動として行われ、「鶴特別委員会」として、担当は各学級より選出された十二名の生徒から構成され、一年間を通して活動しています。

春は、前年度の「にお」の撤去作業、保護者の方の協力でトラクターで畑を耕していただきデントコーン（トウモロコシ）の種まき、夏は間引き、雑草取りと追肥作業を行い、秋から冬にかけてはデントコーンの実の取り入れ、殻の刈り取り、「にお」作り、給餌活動を行います。十一月から二月にかけてツルの家族が飛んできています。

◇鶴の阿寒中学校として

タンチョウが人里近くに舞い降り飛び立つ姿を頻繁に見ることができ、阿寒の山々を背景にしたその姿は、ひととき美しく目に映ります。この光景があたりまえのように見えるそのことが阿寒中学校生徒をはじめ阿寒町の多くの人々にとって喜びなのだと感じます。今、社会は大きく変わろうとしております。今までのように経済優先、利便性を重視した都市型社会構成から、地球環境の大切さ、そして、すべての生物と共生できる優しい心を持った生き方が重視されています。その先取りともいえる、タンチョウの給餌保護活動が、五十年近くも前に阿寒中学校と阿寒町の人々の心と行動で示されたことが、今日の阿寒中学校の教育の大きな礎石となっています。

今、阿寒中学校の生徒は落ち着いた学校生活の中でさまざまな学習に取り組んでいます。特に「鶴の保護活動」などを通して育った伝統ある校風を受けつぎ、地域の方々の協力のもと、故紙空瓶回収活動やボランティア活動など広い視野の中で自らの「生き方を」つかんでいってほしいという指導理念ですすめています。





第4回 吉川賞贈呈式



栄ある吉川英治賞 (S45・4)



一斉調査

鶴と阿寒中学校のあゆみ

校長 廉 澤 邦 雄
担当 田 中 博 昭

鶴の歴史

かつては我が国にも多数見られたものと思われる。古来霊鳥として保護され歌にうたわれ絵画に描かれているところからも想像される。

一方長寿の瑞鳥として江戸時代には朝廷でも幕府でも年始の嘉例としてその料理に用いられている。この料理は「鶴の庖丁」として秘伝にされたものとして年中行事大成に載っている。鶴のめめたき鳥であることが鎌倉時代の歌謡に最も歌われ今様のめめたき舞に祝された。

源頼朝は鶴を高潔なる仙驥として天下のためにまた自らのために千羽の鶴を放つて祝ったという。これが千羽鶴のはじめであると云われている。

釧路地方と鶴

これらのことから推しても建文の頃には我が国にも多くの鶴が棲息したと思われる。「和訓栞」に宝永の主上東山天皇新内裏へ還幸ならせたまう折鳳輩の上はるかに鶴の舞いかけたるを見て諸臣千年のためとして賀し物し奉ったという記事が見える。いろいろの点から相当数の存在が考えられるけれど維新当時濫獲された結果著しくその数を減じ現在では鹿児島県と山口県と北海道の釧路地方のみに見ることが出来るだけである。

北海道にも往時はたくさん鶴が住んでいたものと思われる。この根釧原野にも住んでいたことがアイヌの伝説にもとりあげられている。

アイヌの人たちは丹頂鶴を湿原の神様と呼んでいる。昔手負いの熊が湿原に逃げこんでツルの長い首を下敷きにして死んでしまった。ツルは苦しさをあまりに悲鳴をあげた。それをききつけて集り熊を発見した。熊の居場所を知らせてくれたので神様として祭りあげたという。

またこのツルは飼われていたという伝説もある。いまの遠矢駅の近くに砦があつてここに釧路アイヌの始祖キラウコロエカシが一对のツルを飼っていた。そしてその孫のカネキラウコロエカシの頃には相当にふえていた。

ところがクルンセと云う一族が攻めて来て国後根室をおとし入れて釧路へもせまって来たので厚岸北見十勝のコタンから援軍を求めて迎えうったが味方のなかに裏切者がいてエカシが部下の大部

分を引きつれて砦をはなれて戦っている間に敵の手に砦がおちてしまった。その時地上にそんな変事あるともわからず遊びに出ていたツルの群れがもどってくるのとクルンセ族のために矢をいられて殺された。

この時釧路軍は引きかえし砦を取りかえしたが戦いが長びいたためツルは恐れをなして近よらなくなり遂には野生にもどってしまったと云う。

◇こうした伝説をもちながらも明瞭な記録もなく或は絶滅したのではないかと思われていたのが大正八年頃の三月、堅雪の上で十羽位の丹頂鶴が舞をしているところを見た人があり残存していることが認められた。その後大正十二年に北海道庁の狩猟取締官だった齊藤春治さんが実際に調査され丹頂鶴のいることを確認して発表した。このことから再び丹頂鶴は世人の注目を集めるようになった。

◇渡り鳥と思われていたものが釧路地方に留鳥として定住し営巣していることも次々と発見されてきた。前に記したように日本の鶴の在所は全国で三カ所であるが鹿児島県と山口県の場合は完全な渡りである。従って日本で定住しているのは釧路を中心とした地帯だけであり、しかもそれが丹頂鶴である点から釧路地方の丹頂鶴は日本の鶴と称して過言ではない。やがて昭和十年八月二十七日に天然記念物の指定をうけ人々から保護されることになったが満洲事変を契機として日本が戦時に移行してからは、かえりみられず次第にその数が減少し山野にひそんでしまい人の目から遠ざかっ

阿寒の鶴

ていった。それが終戦と共に又里の方へ姿をみせるようになり人々の関心を集め昭和二十七年三月二十九日に特別天然記念物に指定された。保護の手も次第に密度を高めていった。

◇雌阿寒岳や雄阿寒岳の頂きがうっすらと白くなる頃、真白な鶴の姿が青空に浮いて見えるようになる。

この鶴の飛ぶ姿をみてはああ今年も冬の訪れがやってくるのかと独り言が出る。どこからか今日は二羽あすは三羽とふえていく。あの三羽のうち一羽は幼鳥なのだろう。どこで生れたのか父なる鶴、母なる鶴にもなわけて阿寒の里へやってきたのだなあと、つくづく空を仰いでみる。

これからしばらくの間は鶴が私たちの友達になるのです。たくさん集るところと何羽かやってくる場所とあり、たくさん集るところは四、五十羽もやってくる。親子だけでやってくる場所もある。毎日同じようにやってくる。

日中はどこかへ飛んでいってたり、又途中で戻って来たりして夕方になると一斉に林の方へ飛んでいく。川辺や浅瀬の水の中に長い脚を立ててねむっている。朝になるとまたとんでくる。

こうして冬の間をすごした鶴は川の水もぬくもりを持ち雪も消えていく三月から四月の始めにかけて阿寒の里を去っていく。行く手は根釧原野の大湿原地帯である。容易に人も獣も近づくとこと出来ない湿原のなかで水につからないところへ葦

の茎などを（主として葦である）折って巢を作りそこへ産卵する。卵は普通二箇の由。やがて雛が生れ親子の生活が始まる。水草や小魚や湿地の小動物を食べて生活し、やがて木の葉が散り湿原の水が氷に閉ざされ出すと阿寒の人里近くに飛んでくるのである。この生活をくりかえしているのである。

即ち、根釧原野を中心にその周辺の地域が生活圏なのである。やはり冬一番飛んでくるのが阿寒町である。だから私達は鶴は阿寒の里のものと思っている。

◇阿寒町丹頂鶴愛護会について

特別天然記念物に指定され又道鳥に指定された丹頂鶴の大多数が生息する阿寒町として、あくまでも鶴は私共のものと云う心の発露から生徒にのみその保護をまかせておくべきではない、町民の一人一人が保護し維持していかねばならないと、ここに阿寒町丹頂鶴愛護会が発足して活動している。

◇阿寒の鶴の一日 ―生徒の記録から―

(イ) 朝

「タンチョウツルは宵っぱりの朝寝坊だ。だから僕たちが野ウサギを捕えるためにかけたワナを朝早く見まわりに出かける頃にツルはまだ寝ている。首はどこにあるかわからないように羽の下に入れていたが、必ず見張りの鶴が何羽かいる。」と先輩の記録したツルの日記に書いてあるがツルのねぐらは川の中州を中心に凍らない場所に片方の脚をおりまげて胴につけ一本脚で浅い流れに立つ

て寝ており日の出とともに家族単位で移動を始める。時には午前六時すぎまでいることもある。「起きろー」という合図のように朝のかん高い声が市街地までも聞える。

ねぐらを飛び立った二羽ないし三羽、時には四羽の親子づれが自分たちのなわ張りになっている土地へいくのもあるが多くは上阿寒の山崎定次郎さんの裏畑の給餌場へ集ってくる。だからここでは多い時には五十羽以上のツルの群れを見ることもある。

こうして七時頃から九時頃まで給餌場のトウキビをついばんで（ドジョウを貰うこともある）腹ごしらえをして自分たちのなわ張りへとんでいく。

(ロ) 昼

阿寒町では十月から翌年の三月まで日中に見るツルの群れで時に二家族三家族とより合っている群れもあるが、それでいてそのなわ張りの土地へ家族以外のはぐれた一羽ツルなど飛びこんでこようものなら、たちまち追い出されてしまう。

親子三羽でいる時には子ヅルを中心に畑に落ちていた餌をひろって食べているが、いつも警戒心の強いのは雄のように警戒しはじめるとまず雄が首をすつと立ててあたりを見渡し、次に雌が首をあげて人が近づくと反対の方向へ子ヅルをうながして遠のいていく。そして何かの拍子に危険を感じると二、三步大またに歩き出すようにして飛び上る。よほど驚くとその場から飛び上るがなにして四キロもある体重であるから普通は走ってから

飛び上る。あわててバランスのとれないまま飛び上る時、急に傾いてたりしておかしな飛び方をするとときもある。

夕方になると家族そろって給餌場へもどり腹をふくらませる。この給餌場でみられる風景ではボスツルに気がねしてたべているものや、満腹で胃の運動をたすけるのか、ひくくはね上り、首の上下運動をさかんにしているものもある。

これを見てツルが感謝のためにお礼に舞っているのだなどという人もいる。

(ハ) 夜

午後四時すぎ頃、早い冬の夕暮れがたちこめるとツル達は阿寒川と舌辛川のねぐらへ移動をはじめめるが、その移動時刻は天候や、その日の食物の量などによってかなりおそくなる時もあり暗くなつてから飛んでいくこともある。これを見るとツルは鳥目でないようである。

ねぐらへたどりついたツルは、しばらくカン高くなきかわし、やがて静かになる頃ねむりにつくようだが、この時はもとの渡り鳥であった頃の習性にもどるようだ。何羽かのツルが見張りについて、あとはたたんだ翼の間に首をつつこんで片脚で浅瀬に立ち川の流れに静かにほんのりと白さを夜目に浮きあがらせている。これが月明かりでくつきりとその姿をあらわしているところは本当に神秘的である。

こうして外敵から身を守る最適の場所に、しかもおたがいに助け合っている。

私たちと鶴とのあゆみ

(1) 昭和三十二年 ― 大井校長 ―

◇ 大井校長が青空を飛ぶ鶴の姿を見上げて、いままにして愛護の手をさしのべねばと思いつルクラブを作る。クラブ員は給餌と観察を始める。

◇ 十月から校下を十三区にわけて観察日誌をつける。

◇ 十二月の一斉調査で六十三羽をみとめる。

(2) 昭和三十三年二月大正以来の大雪のため餌に困つてたおれる鶴がでてきたのでクラブ員はスキーによる給餌に追われた。

◇ 四月これまでの観察記録をもとに丹頂鶴の作文をかく。

◇ 五月丹頂鶴の愛護校として道知事の表彰を受ける。

◇ 十月神戸市で開催された全国中学校長大会に大井校長が出席、ツルの日記を発表する。

◇ 十一月ツルの日記が野鳥観察記録として入賞する。

◇ 十二月の一斉調査で確認七十羽。

(3) 昭和三十四年 ― 一戸校長 ―

◇ 四月一戸校長着任して仕事を引継ぐ。

◇ 十二月の一斉調査で確認八十九羽。

(4) 昭和三十五年一月鶴の習性研究の結果、給餌場所を二カ所にする。

◇ 二月「ツルの日記」の出版にとりかかる。

◇ 三月鹿児島県野田中学校とツルの研究姉妹校となる。

◇ 五月「ツルの日記」を発刊する。

- ◇ 十月標本によるツルの研究、給餌場所造り観察場所づくりを行う。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認百一羽。
- (5) 昭和三十六年三月野田中学校と資料の交換並びに特産物の交換を行う。
- ◇ 十二月の一斉調査で校下確認八十二羽。
- (6) 昭和三十七年二月スウェーデンの探検家ベルクマン氏来校、ニューギニアの風俗スライド上映、ツルクラブ員と懇談する。
- ◇ 三月キューボラのある街の原作者早船ちよきん来校、ツルクラブ員と話合う。
- ◇ 五月ベルクマン氏にツルの生活画を送る。
- ◇ 十月自然公園の餌不足を知り、小魚をとっておくり、管理人の高橋さんと共同研究する。
- ◇ 十月山口県八代中学校（現在熊毛中学校）と姉妹校となる。
- ◇ 十二月野田中学校、熊毛中学校へツルの資料を送る。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認百二十羽。
- (7) 昭和三十八年十月給餌場所を町の給餌場所に限定し観察に重点をおく。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認七十四羽。
- ◇ 十二月札幌医大に入院中の大井先生をツルクラブ員が見舞いツル便りを送る。
- (8) 昭和三十九年一月ツルクラブの活動がNHKこちらワンパクテレビ局の電波にのって全国に放送され、それによってツルの餌が続々と届き、給餌活動が活発となる。
- ◇ 二月札状にタンチョウツルの里というパンフレットを送る。
- ◇ 三月タンチョウツルの校内展を開く。
- (9) 昭和三十九年四月 一鎌田校長 一
◇ 四月鎌田校長着任、引継ぐ。
- ◇ 五月ツル基金を基にドジョウの養殖池を作りツルクラブ員がドジョウを放流する。
- ◇ 八月標茶町シラルトロ湖でツルの生息調査を行う。
- ◇ 十月ドジョウ養殖池付近に給餌場所をつくり給餌する。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認六十七羽。
- ◇ 十二月「日本の鶴」を発刊、お礼に全国にくばる。
- (10) 昭和四十年一月ツル給餌校交流会が下雪裡小学校で行われ参加する。
- ◇ 四月校訓として「鶴翔青雲」を設定する。
- ◇ 五月愛鳥週間にさきがけて学校の裏林に二十箇の巣箱をつける。
- ◇ 八月ツルクラブ夏季研修を釧路市立郷土博物館で行い、正富館長の指導をうける。
- ◇ 十月給餌活動を校下九カ所に分けて行う。
- ◇ 十月アメリカの鳥類研究家ウオーキンシヨウ夫妻来校する。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認八十二羽。
- (11) 昭和四十一年一月第一回丹頂祭を開く、併せて給餌校の交流会を阿寒で開く。
- (12) 昭和四十一年四月 一三原校長 一

- ◇ 四月三原校長着任引継ぐ。
- ◇ 四月愛鳥週間にちなんで野鳥研究家永田洋平氏を招いて講演をきく。
午後ツルクラブ員と懇談する。
- ◇ 六月ツル公園を訪れ管理人の高橋さんからツルの話をきく。
- ◇ 十月阿寒町開基八十年式典でツルクラブ員表彰を受ける。
- ◇ 十一月愛知県の片山さんからドジョウ六十キロが送られて来た。
- ◇ 十一月一斉調査十五周年記念式典でツルクラブ表彰される。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認八十羽。
(13)昭和四十二年三月第二回丹頂祭に茨城県小松小学校、山口県熊毛中学校を招待し両校と交流会を行う。
- ◇ 四月生徒全員が一人一人愛護の意識をもって集団としての愛護活動を行うため在来ツルクラブを解消して各学級にツル委員をおき、生徒会にツル委員会を設置する。
- ◇ 五月餌の外部依存を排除して自らの手で餌を作り汗のじむものを給餌するために十アールの荒地を拓いてトウキビ畑とし全校生徒の手で播種する。
- ◇ 七月野鳥の習性と観察の要領について講演をきく。
- ◇ 十一月ツル愛護活動十周年を記念して行事を行う。
- ◇ 十二月町内タンチョウツルを守る子どもの集いに代表四十名参加する。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認九十八羽。
- ◇ (14)昭和四十三年四月ツル委員第一回の会合を行って本年度の活動について計画する。
- ◇ 五月委員代表でツル公園を訪ね管理人の高橋さんから公園のツルについて説明をきく。
- ◇ 六月全校生徒で給餌畑にトウキビを播種する。
- ◇ 六月ドジョウ池の整備をする。
- ◇ 六月ドジョウや小魚をとってツル公園にとどける。
- ◇ 十月ツル委員でトウキビの収穫を行う。
- ◇ 十月小松小学校からトウキビがとどく。
- ◇ 十一月片山さんからドジョウがとどく。
- ◇ 十二月リーダーズダイジェスト社アジア局長来校、ツルの記事取材する。
(一月号に連載される)
- ◇ 十二月の一斉調査で確認七十二羽。
- ◇ (15)昭和四十四年四月中学校で使用の教育出版社版国語教科書に「ツルの日記」から選出登載される。
- ◇ 六月給餌畑の播種を行う。本年度活動計画をたてる。
- ◇ 八月ツルクラブ生みの親大井校長死去する。
- ◇ 九月ドジョウ池を整備する(周囲の立木伐採のためひどくあらされていた)
- ◇ 十月小松小学校からトウキビ百キロ送られてくる。
- ◇ 十二月の一斉調査で確認百二十一羽(調査開

始以来最多数をかぞえる)

(NHKから全国放送される)

(16)昭和四十五年三月第四回吉川英治賞授賞校に選出された旨の通知あり。

◇ 四月吉川英治賞授賞式へ出席のため学校長生徒代表男一女一を引率して上京する。四月十一日受賞する。

◇ 四月学校長から受賞についての状況報告がなされる。

◇ 四月十五日北海道放送から表彰される。

◇ 五月吉川英治賞受賞記念講演会を開催。講師としてツル公園管理人高橋さんに来校してもらう。ツルの記録(卵から雛へ雛から幼鳥までの)を映写しながら説明をきく。席上代表生徒から受賞報告あり。

◇ 五月吉川英治展札幌で開催され招待をうける。

◇ 田中教諭ツル委員長若林良恵をつれて出席する。

◇ 六月給餌畑の播種作業を全校生徒で行う。HBCで撮影する(ツルと共に)

◇ 八月HBCで放送「ツルと共に」を

◇ 八月ドジョウ池の整備を行う。

◇ 九月末に給餌畑のトウキビを収穫する。

◇ 十月新校舎落成開校二十三周年記念行事の際「ツルの資料展」を開催する。

―ツル委員の手で整理して―

◇ 十一月トウキビをツル委員の手によって飛来箇所へ運び散布する。

◇ 十一月観察記録を開始する。

◇ 十二月の一斉調査で確認八十四羽。

(17)昭和四十六年一月在来発刊された「鶴の日記」と「日本の鶴」を補完するためと資料集成的ため発刊を企画着手する。

◇ 四月ツル委員会活動計画作成。

◇ 給餌畑の播種作業を全校生徒で行う。

◇ ドジョウの養殖のための観察開始。

◇ 舌辛川からウグイをとり養殖のための観察開始。

◇ タンチョウツル愛護週間(ポスター、詩、作文、標語募集)

◇ トウモロコシの収穫。

◇ 小松小学校よりトウキビが送られてくる。

◇ 十月タンチョウツル「給餌畑」に来てえさをついばむ。

◇ 十月文化祭「ツルコーナー」で、標語、ポスター、資料展。

◇ 十一月舌辛川からウグイをとり山崎さんの池に放流。

◇ 十一月ウグイの給餌の実験を行なう(NHK TV放送)

◇ 十一月フジテレビ、日本テレビ「阿寒の里」を撮影

―ツル委員会の活動を中心に―

◇ 十二月一斉調査、校下確認数五十一羽。

(18)昭和四十七年四月 ツル委員会活動計画作成

◇ 五月トウモロコシの播種(一、二年)観察記録の開始。

◇ 六月ツル資料の整理、タンチョウのはくせい

- 一羽。
- ◇ 九月全校生の、ツルの愛護に関するポスター展を開く。
- 愛護普及運動、タンチョウパレードに全校生参加
― 各学級のアイデアを生かして、プラカード、旗、など製作―
- タンチョウ愛護思想普及のため、「滅びゆく野生の詩」の映画鑑賞
トウモロコシの収穫
- ◇ 十月舌辛川からウグイをとり、山崎さんの池に放流。
- ◇ 十二月一斉調査、校下確認数六十羽。
- (19)昭和四十八年四月 ツル委員会活動計画作成
- ◇ 五月給餌畑播種(一、二年)
- ◇ 六月ツル資料整理
- ◇ 八月東神楽中学校三年修学旅行の途中、ツルについての説明を聞きに来校。
- ◇ 九月愛護普及運動タンチョウパレードに全校生参加。
- ◇ 十一月全校タンチョウのポスター展を開く。
- ◇ 十二月一斉調査、校下確認数七十九羽。
- (20)昭和四十九年五月 ツル委員会活動計画案作成
- ◇ 五月公営住宅地造営工事のため、給餌畑の作付不可能となる。
- ◇ 八月愛護普及運動タンチョウパレード全校生参加
- ◇ 十二月一斉調査、校下確認数六十七羽。

給餌と愛護、開始以来主として手がけて来た先生方

- △ 沢出喜代志先生
- △ 塩梅祥次先生
- △ 佐々木勉先生
- △ 田中博昭先生
- △ 畠山軍司先生
- △ 伊藤博通先生
- △ 大山昇先生
- △ 松川利雄先生

現在の活動体制と仕事

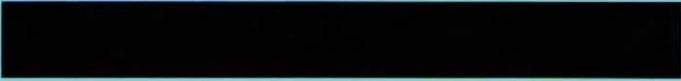
学校長 ― 分掌教師 ― 指導教師 ― 担任教師

生徒会 ↓ 鶴委員会 ↓ 学級鶴委員

(学校としての活動 審議) ← (企画・学習・中間審議・実施) ← (学級としての意見・日常実動)



北海道新聞社提供 岩松健夫氏撮影



鶴

群

よ

り

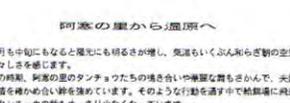
会報 鶴群 発行：1997.3.25 定価110円



丹波川で丹波川... 阿婆タンチョウの里

毎年、10月の上旬になると丹波川... 阿婆タンチョウの里に多くのタンチョウがやってくる...

会報 鶴群 発行：1997.3.25 定価110円

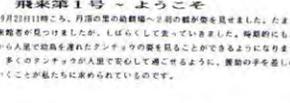


阿婆の里から返原へ

阿婆の里から返原へ

3月中旬にもなる頃には雪が降り、寒風が吹き渡る中... 阿婆の里から返原へ...

会報 鶴群 発行：1997.3.25 定価110円

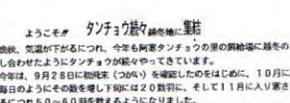


丹波川で丹波川... 阿婆タンチョウの里

阿婆タンチョウ愛護会

阿婆タンチョウセンターの開催を機会に阿婆タンチョウ愛護会が設立された...

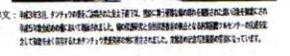
会報 鶴群 発行：1997.11.26 定価110円



ようこそ! タンチョウの里へ

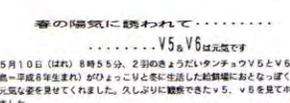
ようこそ! タンチョウの里へ

晩秋、気温が下がるにつれ、今年も阿婆タンチョウの里... タンチョウの里へ...



鶴の群れ

会報 鶴群 発行：1997.3.25 定価110円

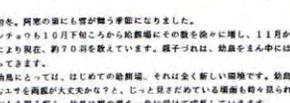


春の陽気に誘われて

春の陽気に誘われて

5月10日(日) 8時55分、2羽のようたいタンチョウ... 春の陽気に誘われて...

会報 鶴群 発行：1996.11.27 定価110円

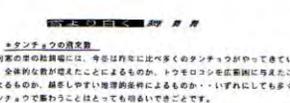


阿婆の里にも雪が降り...

阿婆の里にも雪が降り...

阿婆の里にも雪が降り季節になりました。タンチョウも10月下旬から阿婆の里...

会報 鶴群 発行：1997.1.27 定価110円



タンチョウの渡来

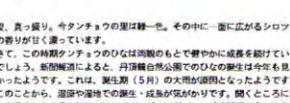
タンチョウの渡来

阿婆の里のタンチョウは、今年も昨年よりも多くのタンチョウがやっています...



お静かな時間です

会報 鶴群 発行：1997.7.26 定価110円

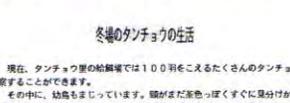


夏の日、阿婆の里

夏の日、阿婆の里

夏の日、阿婆の里。今年タンチョウの里は緑色... 阿婆の里に...

会報 鶴群 発行：1997.1.23 定価110円



冬場のタンチョウの生活

冬場のタンチョウの生活

現在、タンチョウの里の環境は10日前よりもよくなりました... タンチョウの里に...

会報 (大表) 16号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 3. 25号

鶴群

— 温泉での生活へ —

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



<1>

会報 (大表) 13号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 3. 25号

鶴群

— タンチョウの生活 —

・秋—うとうといい海鳥(ガス)から解放され、大人だき堂々が広がり、涼風が吹く美しい温泉の九月です。

・秋の丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



これから2ヵ月間は用をばせ。(1998. 9. 9号)

<1>

会報 鶴群

電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 3. 25号

鶴群

— 一人立ち —

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



<1>

会報 (大表) 17号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 3. 26号

鶴群

— 5月・育雛中のころ —

・道草は、例年比で雪が少なくタンチョウにとって恵まれた冬のようにです。このことにより春が早いかなと思われたのですが...

・この春、たすける梅の便りが阿寒町に届いたのは5月13日です。この春、たすける梅の便りが阿寒町に届いたのは5月13日です。この春、たすける梅の便りが阿寒町に届いたのは5月13日です。

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



鶴: 湯川 博氏 (098) 1998. 3. 26号

<1>

会報 (大表) 14号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 11. 30号

鶴群

— はじめての越冬: ようこそ幼鳥たち —

・道草は、例年比で雪が少なくタンチョウにとって恵まれた冬のようにです。このことにより春が早いかなと思われたのですが...

・この春、たすける梅の便りが阿寒町に届いたのは5月13日です。この春、たすける梅の便りが阿寒町に届いたのは5月13日です。この春、たすける梅の便りが阿寒町に届いたのは5月13日です。

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



<1>

会報 (大表) 11号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 5. 27号

鶴群

— ヒナたちよ元気な育て —

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



鶴: 湯川 博氏 (098) 1998. 5. 27号

<1>

会報 (大表) 18号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 7. 27号

鶴群

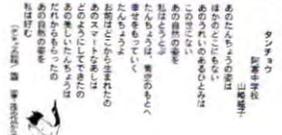
— 温泉の夏へいそいそと —

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



鶴: 湯川 博氏 (098) 1998. 7. 27号

<1>

会報 (大表) 15号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 7. 28号

鶴群

— 阿寒町頂の里 今日のごころ —

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



<1>

会報 (大表) 12号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 電話: 098-0245 (098)2384088 (098)741(オホ)
 1998. 7. 25号

鶴群

— 阿寒町頂の里 今日のごころ —

・丹頂の鳥は、繁殖期を告げるオスのあの独特な甲高い鳴き声で知られます。そして、聞きしに聞かざる感じはじめて、雪解けを待ちきれず申し合っていたかのように、は鳥を連れて温泉を目指します。

・春、それは野生の生き物は皆そうであるようにタンチョウにとっても、これらが大好きです。タンチョウが温泉に自分たちのなわばりをつくると、葉作り、産卵、子育ての一環の営みがはじまります。

・昨年は大群に生まれ、100羽ものタンチョウのひなが無事に巣立つことができました。今年も、昨年のように1羽でも多く、しっかりと育てられることを願っています。

・原も4月、春にあって行かれた活動は、4月中旬まで続いています。中でも、中では遅れたって温泉へ遊びます。こうして丹頂の鳥は徐々に明けぼるのです。



鶴: 湯川 博氏 (098) 1998. 7. 25号

<1>

会報(紙) 34号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

また春に会いましょう！ 阿寒丹頂の里をめぐり
 タンチョウの里に参ります

① 今年も春の訪れが早く、雪が早く融け、春の光を浴びたタンチョウたちは3月に人里へ出て歩き始め、10日現在の平地が移動しました。いつもより早い戻りとなりました。

② 現在、給餌場やビオトープは張り立ちした幼鳥が主になっています。近いけれど、タンチョウ 飛び回ると危険に感じます。

③ 今年、阿寒の里で飼育したタンチョウは例年にくらべて30羽前後を育てる計画が実現しました。給餌場は大幅に増え、観察もできる多岐に「うわーんこんなん」とびっぴりの顔をして。またこのことに伴って、これまで以上に消費する量になり追加したほどです。

④ このようにたくさんのタンチョウが飼育される中にも、一件の事故も発生したことはおぼろげに覚えていた、わが町となる。その日、給餌場・ビオトープを中心としたタンチョウの里に、おもしろい風景が広がっていました。

⑤ 今年もタンチョウの里に向けて会員を招き、タンチョウの里に参る人々、阿寒の里さん。そして全国のタンチョウ愛護者の方々のご参加に感謝いたします。



阿寒の里さん

会報(紙) 31号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

阿寒の里 まもなくタンチョウが飛来
 阿寒の里

● 今年、阿寒の里は例年より早く、雪が早く融け、春の光を浴びたタンチョウたちは3月に人里へ出て歩き始め、10日現在の平地が移動しました。いつもより早い戻りとなりました。

● 現在、給餌場やビオトープは張り立ちした幼鳥が主になっています。近いけれど、タンチョウ 飛び回ると危険に感じます。

● 今年、阿寒の里で飼育したタンチョウは例年にくらべて30羽前後を育てる計画が実現しました。給餌場は大幅に増え、観察もできる多岐に「うわーんこんなん」とびっぴりの顔をして。またこのことに伴って、これまで以上に消費する量になり追加したほどです。

● このようにたくさんのタンチョウが飼育される中にも、一件の事故も発生したことはおぼろげに覚えていた、わが町となる。その日、給餌場・ビオトープを中心としたタンチョウの里に、おもしろい風景が広がっていました。

● 今年もタンチョウの里に向けて会員を招き、タンチョウの里に参る人々、阿寒の里さん。そして全国のタンチョウ愛護者の方々のご参加に感謝いたします。



阿寒の里さん

会報(紙) 28号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

タンチョウたち 元気に温泉へ
 越冬地をあとにして

① 今年、2月4日(土)の夜明けに見られた北海道の、各地で温泉による生活への影響が、ニュースとして報道されました。2月下旬になり、ようやく真冬から開放される3月を迎えました。日差しは明るく希望の春、春としたところでした。

② 3月に入り、春の訪れが早く、雪が早く融け、春の光を浴びたタンチョウたちは3月に人里へ出て歩き始め、10日現在の平地が移動しました。いつもより早い戻りとなりました。

③ 現在、給餌場やビオトープは張り立ちした幼鳥が主になっています。近いけれど、タンチョウ 飛び回ると危険に感じます。

④ 今年、阿寒の里で飼育したタンチョウは例年にくらべて30羽前後を育てる計画が実現しました。給餌場は大幅に増え、観察もできる多岐に「うわーんこんなん」とびっぴりの顔をして。またこのことに伴って、これまで以上に消費する量になり追加したほどです。

⑤ このようにたくさんのタンチョウが飼育される中にも、一件の事故も発生したことはおぼろげに覚えていた、わが町となる。その日、給餌場・ビオトープを中心としたタンチョウの里に、おもしろい風景が広がっていました。

⑥ 今年もタンチョウの里に向けて会員を招き、タンチョウの里に参る人々、阿寒の里さん。そして全国のタンチョウ愛護者の方々のご参加に感謝いたします。



阿寒の里さん

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 会報(紙) 35号 事務局 阿寒町23番40番地
 (阿寒町福祉センター内)
 TEL 085-0245 FAX 0154(66) 4011
 TEL 0154(66) 4022 FAX 0154(66) 4022
 発行 2002. 5. 20

緑深まる丹頂の里

日本列島を北上して来た丹頂の里は、ここ阿寒は5月4日に到着。キタコブシの白とサクラのピンクが美しく山を彩りました。

今、阿寒の里に美しいタンチョウの里、まもなく丹頂の里は青々とした初夏の風景が広がります。

今年も、例年より早く戻ったこと、また阿寒の里にタンチョウたちの移動も早く3月下旬には戻った幼鳥たち十数羽と春の里の風景が見られるようになりました。4月に入りビオトープを中心とした幼鳥の里に、おもしろい風景が広がりました。

これらの幼鳥たちも、4月25日を過ぎると丹頂の里をあとにして温泉へ飛び立ちました。いま時期、それらのタンチョウたちは子育てに多忙な毎日のことでしょう。今年にはまた、たくさんの幼鳥を連れて阿寒の里へ帰って来ることを願っています。



阿寒の里さん

会報(紙) 32号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

みなさんに見守られて
 阿寒の里で <どろろ> 越冬します

私たちの里では、今年度も例年通り10月1日に越冬しています。阿寒の里から阿寒の里までの間は例年通り10月1日に越冬しています。阿寒の里から阿寒の里までの間は例年通り10月1日に越冬しています。

今年も例年通り早く紅葉が頂上へ降りてきました。阿寒の里の里で、おもしろい風景が広がりました。今年も例年通り早く紅葉が頂上へ降りてきました。阿寒の里の里で、おもしろい風景が広がりました。

この他、阿寒の里と阿寒の里の間には、おもしろい風景が広がりました。今年も例年通り早く紅葉が頂上へ降りてきました。阿寒の里の里で、おもしろい風景が広がりました。



阿寒の里さん

会報(紙) 29号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

緑一色、阿寒丹頂の里

春の訪れが早く、雪が早く融け、春の光を浴びたタンチョウたちは3月に人里へ出て歩き始め、10日現在の平地が移動しました。いつもより早い戻りとなりました。

現在、給餌場やビオトープは張り立ちした幼鳥が主になっています。近いけれど、タンチョウ 飛び回ると危険に感じます。

今年、阿寒の里で飼育したタンチョウは例年にくらべて30羽前後を育てる計画が実現しました。給餌場は大幅に増え、観察もできる多岐に「うわーんこんなん」とびっぴりの顔をして。またこのことに伴って、これまで以上に消費する量になり追加したほどです。

今年もタンチョウの里に向けて会員を招き、タンチョウの里に参る人々、阿寒の里さん。そして全国のタンチョウ愛護者の方々のご参加に感謝いたします。



阿寒の里さん

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 会報 36号 事務局 阿寒町23番40番地
 (阿寒町福祉センター内)
 TEL 085-0245 FAX 0154(66) 4011
 TEL 0154(66) 4022 FAX 0154(66) 4022
 発行 2002. 7. 28

夏の阿寒丹頂の里

冬期間はタンチョウが越冬する阿寒の里は、今、夏真っ盛りです。例年通り2月4日(土)の夜明けに見られた北海道の、各地で温泉による生活への影響が、ニュースとして報道されました。2月下旬になり、ようやく真冬から開放される3月を迎えました。日差しは明るく希望の春、春としたところでした。

3月に入り、春の訪れが早く、雪が早く融け、春の光を浴びたタンチョウたちは3月に人里へ出て歩き始め、10日現在の平地が移動しました。いつもより早い戻りとなりました。

現在、給餌場やビオトープは張り立ちした幼鳥が主になっています。近いけれど、タンチョウ 飛び回ると危険に感じます。

今年、阿寒の里で飼育したタンチョウは例年にくらべて30羽前後を育てる計画が実現しました。給餌場は大幅に増え、観察もできる多岐に「うわーんこんなん」とびっぴりの顔をして。またこのことに伴って、これまで以上に消費する量になり追加したほどです。

今年もタンチョウの里に向けて会員を招き、タンチョウの里に参る人々、阿寒の里さん。そして全国のタンチョウ愛護者の方々のご参加に感謝いたします。



阿寒の里さん

会報(紙) 33号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

◆◆◆越冬期のタンチョウの里◆◆◆

阿寒の里は今年も例年通り、冬20日前後の日に越冬しています。阿寒の里から阿寒の里までの間は例年通り20日前後の日に越冬しています。阿寒の里から阿寒の里までの間は例年通り20日前後の日に越冬しています。

今年も例年通り早く紅葉が頂上へ降りてきました。阿寒の里の里で、おもしろい風景が広がりました。今年も例年通り早く紅葉が頂上へ降りてきました。阿寒の里の里で、おもしろい風景が広がりました。

この他、阿寒の里と阿寒の里の間には、おもしろい風景が広がりました。今年も例年通り早く紅葉が頂上へ降りてきました。阿寒の里の里で、おもしろい風景が広がりました。



阿寒の里さん

会報(紙) 30号 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 編集 阿寒町福祉センター (阿寒町福祉センター内)
 〒090-0245 阿寒町 2-3-40
 TEL 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

静寂してみませんか
 ビオトープに遊歩道

冬期間、たくさんのタンチョウの里に見られるタンチョウの里、まもなく丹頂の里は青々とした初夏の風景が広がります。

今年も、例年より早く戻ったこと、また阿寒の里にタンチョウたちの移動も早く3月下旬には戻った幼鳥たち十数羽と春の里の風景が見られるようになりました。4月に入りビオトープを中心とした幼鳥の里に、おもしろい風景が広がりました。

これらの幼鳥たちも、4月25日を過ぎると丹頂の里をあとにして温泉へ飛び立ちました。いま時期、それらのタンチョウたちは子育てに多忙な毎日のことでしょう。今年にはまた、たくさんの幼鳥を連れて阿寒の里へ帰って来ることを願っています。



阿寒の里さん

会報

鶴群

第23巻40号
阿寒国際ツルセンター
阿寒町ツル愛護会発行[1]
TEL 66-4011
Fax 66-4022

飛来第1号～ようこそ

9月22日11時ころ、丹頂の里の給餌場へ2羽の鶴が姿を見せました。たまたま、来館者が見つけたが、しばらくして去っていきました。時期的にも、これから人里で幼鳥を連れてタンチョウの雛を見ることができるようになります。多くのタンチョウが人里で安心して過ごせるように、援助の手を差し伸べていくことが私たちに求められているのです。

阿寒町ツル愛護会

阿寒国際ツルセンターの開設を機会に阿寒町タンチョウ鶴愛護会は「阿寒町ツル愛護会」に名称が変わりました。阿寒町タンチョウ鶴愛護会は昭和40年に発足し、30年の保護活動の歩みを上げてきました。タンチョウの給餌活動をはじめ飛来地やねぐらの監視活動、丹頂つる音頭の普及、愛護発祥の碑の建立、鶴に関する資料の発行などタンチョウの保護や保護思想の啓発活動を行ってきました。

さて、8年度より歩むツル愛護会は従来から行ってきたタンチョウの保護活動を発展させながら、さらに、ツルの調査研究と教育活動を主な目的に設置された阿寒国際ツルセンターが行う

事業活動に協力しツルの保護とツルと共存する地域の発展に寄与することとしています。(事業内容については、8年度の事業計画に示しています。)

タンチョウに温かい心配りを!

過日、網路市北斗の道道でタンチョウ1羽がトラックにはねられ両足を骨折するという大変な事故が発生しました。これからは、人里へ戻ってきます。生息環境の保全と併せて、多様な事故を想定し、事故から尊い生命をまもってあげなければなりません。

(1)

網路のタンチョウ保護の歴史

【大正期に始まった保護】1924年(大13)、網路原野の地で10羽のタンチョウの生存が確認され、網路での保護の歴史が始まりました。発見翌年の1925年(大14)には、生息地のツルハシナイ地区を禁猟区に指定しました。

その後、1935年(昭10)になり、タンチョウは繁殖地2700haとともに天然記念物に指定されました。この年に釧路国丹頂鶴保護会が結成され、住民への保護思想の徹底や給餌活動などを始めました。

初期の給餌活動としては、生息地である原野にドジョウを放流したり、セリを移植したり、ツバを散布したりしたようですが、あまり効果がなかったようで、冬期には餌不足による餓死が相次いだといわれています。これは白鳥などの他の鳥がタンチョウの餌を食べてしまうからだという意見に従って、1940年(昭15)12月には、「雑鳥駆除」に育備隊が員置されたりしました。しかし、冬期は産卵地の不凍箇所が餌だけが頼りという状態で、餌の不足から生息数の増加はほとんどなかったようです。

発見当初、生息数の算定は大変難しいものでした。それは当時のタンチョウがほとんど人里に近づかず、夏冬を過ぎて湿原の奥にすんでいたからですが、おおまかな推定では200羽くらいと想像されていました。ただ1941年(昭16)に青藤肇雄氏(道庁警察部技手)が40羽ほどの生息を確認したとの報

告もあります。

【戦後の保護活動——浸透する保護思想】戦争による空白の後、1946年(昭21)に戦後初の保護会役員懇談会が開かれ、禁猟よりも積極的飼育にのり出すべきだということになりました。また、戦時中は中止されていた餌の散布やパンフレット、ポスターの製作などを決定しました。

1948年(昭23)12月には網路丹頂鶴保護会が再編されて、戦後の保護活動が再開されました。なお、この年のタンチョウ保護のための国費補助が1万円であったといえます。翌1949年(昭24)11月には保護会の手により生息地の一斉調査がおこなわれ、17羽が確認されました。給餌活動も再開されて、ナラの實(ドンリ)、ソバ、ドジョウなどが散布・放流されました。

このような給餌はあまり直接的な効果を上げませんでしたが、1953年(昭28)の保護会結成からの長い保護活動によって、周辺住民に保護思想が浸透したこともあって、タンチョウは徐々に人里に近づくようになり、冬期、畑でトウキビを餌上げたニオをついばんだりするのが見られるようになりました。

【餌付けに成功】1952年(昭27)の2月、網路地方は猛吹雪に襲われ、大変な大雪となりました。このため、多くのタンチョウが餌を求めて人里に出てきました。このとき観たタンチョウのために、毎日同じ場所にとウモロコシをまくという方法で初めて餌付けに

(2)

成功しました。阿寒町と鶴居村の放牧所で同時になされたこの餌付けの成功は、その後、生息数の顕著な増加をもたらす保護活動の中でも、最も重要なできごととなりました。

(文献 世界の動物「ツル目」より)

世界の鶴の紹介 シリーズ (1) オグロツル

生息の概要

オグロツルは丹頂よりも近い種類の鶴で、チベットや中国、ブータンなどの高地の湿地にすんでいます。15種の中で最後に見つかった(100年前)ツルで、つい最近になって詳しい生息が調べられるようになりましたが、まだまだわかりません。オグロツルはヒマラヤ山脈周辺の4,000-5,000mの高地で営巣します。冬にはチベットの高度の低いところやインド北部、ブータンなどで越冬します。

現状

現在では5000羽以上生息すると言われています。この種は主に湿地に生息するので、湿地の農地化が主な脅威となっています。中国は希少種のために、300以上の自然保護区を制定しています。これらのうち8つがオグロツルのための保護区になっています。

飼育されているオグロツルはめずらしい

中国政府は、オグロツル保護・増殖の目的で野性個体を捕獲・飼育し、またドイツのフォーゲル・パークとアメリカの国際ツル財団に1つがいつづ贈与しています。これまで中国はこれら2施設以外にはオグロツルを輸出せず国内で増殖させてきました。オグロツルを収容している保護増殖施設の数がそのもととなるつがいの数はあまりにも少なく、これから飼育個体を増やさなければなりません。

阿寒国際ツルセンターはこうした状況の中、タンチョウとの比較研究のためだけでなく国際協力的な見地から、オグロツルの飼育を通して、その保護に貢献したいと願っています。



(3)

阿寒国際ツルセンターで飼育している2羽を紹介します。

——ココノとラサ——

国際ツル財団でつけられたオグロツルの名前です。ココノはメスで金属のリングをつけています。ラサはオスで緑の足環をしています。ココノとラサはオグロツルの生息地から取った名前です。この2羽は4才です。この2羽は国際ツル財団で飼育されている番の子です。ではなぜ、姉弟と一緒に飼育しているのでしょうか。ツル類は性成熟に達すると、つがいを形成します。

このため、成鳥を正常な状態で飼育するためには、つがいで飼育しなければなりません。しかし、オグロツルを含めツル類は気性が激しく、人為的にオス・メスを同居させると、オスはメスを気に入らない場合にはそれを殺してしまいます。このため、つがいを人為的に形成させる場合には細心の注意が必要です。ふつう、親から独立した幼鳥は他の若いツルと集団で行動し、2歳齢頃には一時的なつがいを形成し、性成熟に達する4歳齢以降になって群のより強いつがいを形成するようになります。単独で飼育した場合、その個体を使って人為的につがいを形成させることはとても困難です。しかし、若いときに「つがい」として一緒に飼育すると、その後つがいを再び形成させることが容易になります。また、その様な「一時的なつがい」を飼育して、それぞれの個性を把握することは、他個体とつがいを再形成させる時に役立

ちます。しかし、姉弟を繁殖させることはできません。オグロツルの入手することは手続上、とても難しいことですが、何となく血縁関係のない個体とつがいを作らせたいものです。

阿寒国際ツルセンター
研究員提供



(4)

8 紹介
阿寒国際ツルセンター施設

シリーズ その(1)

映像コーナー

タンチョウの四季の生活の姿を15分にまとめたオリジナルの映像です。200インチの大画像にたんちょうの一年が生き生きと映し出されます。またタンチョウを愛する人と園の保護が増えていますが、しのびよる環境の悪化にともないトキの二の舞いを踏まないようにするためにどうしたらよいかを四季を通ず中で訴えています。

これぞ、ライブラリーのはたらき

去る夏休みの某日、来館した小学5年生(男)が200インチビデオに映し出された子別れのシーンを見て涙したというのです。春、産卵へもどる両親に威嚇、威圧され給餌場に残される幼鳥の寂しげな様子は、あまりにもかわいそうです。生まれてから、その日まで温かい両親の愛情をたっぷり受けて育ってきた幼鳥にとってはどんな思いでしょう。あまりにも切ない場面を見るにつけ、男の子の涙を誘ったものと思います。

そのあと、ライブラリーでツルの生活のあれこれを読み得のいくまで時間を忘れて調べていたのです。
“ただただ感心しました”

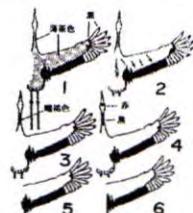
豆 知 識

① 尾羽の色

オグロヅルの中国名は黒頸鶴で、頭から首にかけて黒いことを示しています。“尻”とまがえられる黒い部分は翼の三列風切で実際の尾は隠れています。そして、タンチョウの尾は白いのですがオグロヅルはその名の通り尾も黒色です。

② タンチョウ

幼鳥、亜成鳥、成鳥の区別
飛べるようになったヒナは幼鳥と呼ばれます。はじめ首から背中にかけて茶色を帯びていますが、冬に給餌場に来る頃には、背中の部分は白くなっています。そして、1〜2歳になると、成鳥と区別が難しくなりますが、翼の羽の先端が黒いので、飛んでいるときには区別できます。満3歳以上になると年齢はわかりません。



羽色と年齢との関係
1. 飛び立てるようになったばかりの雛鳥; 2. 羽地帯で見られる幼鳥; 3. 1歳齢; 4. 亜成鳥(1〜2歳齢); 5. 亜成鳥(2歳齢); 6. 成鳥(3歳以上)

<5>

平成8年度 事業計画

事業名	内 容	時 期
1 タンチョウ保護 監視事業	主としてねぐらの安全確保のため、これまでの保護監視を、町の委託事業として実施する。 監視員一山崎定義(上阿寒)	12.1 〜2.29
2 ツルの学習教材 作成	ツルの観察学習に役立つ解説資料を発行 北海道新聞社の補助事業として実施し、学習教材として町内全小学生に無料配布する。一部は一般への普及資料として売店で有料販売する (A5版、30頁、2,000部)	8月22日
3 会報の発行	国際ツルセンター及びツルに関する最新情報を会報として発行し、主として会員を対象に配布する。	年3回
4 オリジナルグッズ の開発と販売活動	国際ツルセンターとツルの保護啓蒙普及のためツルセンターの売店において、グッズの開発と販売活動を行う。	年間
5 ボランティアの 養成と活用	タンチョウの給餌、監視活動及び国際ツルセンターの解説、環境整備等のボランティアを養成し活動を推進する。	年間
6 丹頂鶴会員の普及 及び愛護発祥地 の保存	各団体への普及 記念碑の清掃及び除草、除雪	年間
7 一斉調査への協力	平成8年度の調査予定 ・第1回 12月5日(木) ・第2回 1月16日(木)	
8 学習会、観覧会等 の開催	ツルの観察学習会及びツル写真展を開催する	年間

<6>

会員の紹介

9月25日現在

(甲) 個人

橋本 貴子	上阿寒
山崎 定作	上阿寒
金子 信治	網路市
川人 豊弘	網路市
松田 善光	網路市
今村 美智子	富士見町
木原 宣明	北新町
河合 正信	〃
藤原 雅雄	仲町
荒木 千枝子	北新町
大場 和典	網路市
藤平 久仁子	富士見町
村井 廣彦	中央町
村田 邦治	中央町
小林 特之	仲町
福嶋 志江	富士見町
北村 剛	中央町
高橋 薫	中央町
山下 昭彦	中央町
坂多野 紀雄	網路市
藤村 力	新町
藤田 貴貴	新町
藤田 美知子	新町
林 正昭	阿寒湖畔
森 正裕司	北新町
中川 匡史	網路市
山崎 延壽	上阿寒
大山 昇	中央町
小森 隆	網路市
高橋 善夫	仲町
加地 政富	上阿寒
佐々木 三男	中央町
水野 晃	富士見町
西村 毅	富士見町
秋 康久治	東京府
小 北 茂雄	新町

(乙) 賛助

(有) オートライフ草原 阿寒ライオンズクラブ	網路市 新町
(3) 法人	
株式会社 松屋	阿寒
阿寒共立建設株式会社	網路市
村井建設株式会社	網路市
ヤマシタ工業株式会社	阿寒
株式会社依藤組	阿寒
株式会社依藤組	阿寒
株式会社山崎組	阿寒
株式会社マルカツ	阿寒
株式会社 小野寺組	阿寒
(4) ボランティア	
野口 雅代	布伏内
今 重 貴	布伏内

(株 務 局)

ツル愛護会の活動に理解をいただき
広く会員の募集を継続しています。

<7>

お願い

ボランティアのご協力を
— お願い —
連日、ツルに関心を持ってセンターをおとづれる人で賑わっています。おとづれる方たちに少しでもツルについて理解してもらおうとにも満足してもらおうため解説が必要です。現在、センターの職員が解説に当たっていますが、愛護会からも協力していただきたいです。また、屋外の標示板の作製も望まれています。よろしくお願いたします。

※会報 “鶴 群” は、

“たづむら”と読みます。鶴のむれと言う意味です。愛護会創立の万葉歌碑に刻まれた「天乃鶴群」— “あまのたづむら” からとりいれました。多くの鶴がこれからも、群をなして飛ぶというそんな願いをもっています。
○会報1号をお届けします。これからは、よりみじかな情報をお伝えできるよう頑張ります。
○会報掲載の会員の皆様方からのご投稿もお待ちしております。

<8>

会報

鶴群

阿寒ツル研究会 [10]
阿寒23840番地
(阿寒道ツルセンター内)
TEL0154-66-4011
FAX0154-66-4022
1998.3.26発行

一人立ち 春の3月

褐色の羽と首、頸には鮮やかな赤いベレーもない。鳴き声もビービー。しかし、体の大きさは一人前。そんなわたしたちを多くの人々はヒナとか子どもと呼んでいます。幼鳥と誉めてくれる人はめったにいません。ただけなのは、「ちょっとかわったツルがいるよ、なんというツル？」と聞いて珍しがられます。

しかし、わたしたちは立派なタンチョウなのです。赤いベレー、今はありませんが。

2月末、親たちに愛の季節が近づくとわたしたちは容赦なくつき放されます。これを、人さまは「子別れ」と言っています。わたしたちも独立するためのタンチョウ族の厳しい校としてとらえています。これまで育ててくれた親に感謝しながら一人立ちします。

3月も10日を通るとわたしたち幼鳥は自分たちだけでねぐらへの行き来を始めています。雪解けのいっそう進む3月下旬ともなると親に置き去りにされたわたしたち幼鳥は、力強く立ちます。

秋には赤いベレーをかぶってやってきます。これからもお世話になります。



ツルの子供たち(阿寒道ツルセンター) (2月・撮影)

~1~

世界のツル紹介 シリーズ (10)

ツル亜科・タンチョウ属 ～オオヅル～

○全長150 cm。非常に大型のツルです。体は淡灰色で、灰褐色で耳部以外は喉部と頸部は全部覆出し、頭上と目先が灰色がかかった緑色、目以下の覆出部が赤色です。喉から後頸にかけては頸輪状に黒い剛毛が生え、また覆出部のすぐ下には白い頸輪があります。

次列・三列風切は灰色ですが三列風切の先端部はほとんど白い。嘴はオレンジ緑色、虹彩は黄色ないし橙黄色、脚は肉色ないし赤色。
○広い湿地や湖沼にすみ、通常はつかいか子供連れの家族で観察されます。普通は留鳥で、干ばつときには水を求めて移動します。インドでは宗教上の理由で手厚く保護されていますので人家の近くでもすんでいます。

果は、湿地の中に作られ、卵はよごれた白色で、淡褐色の斑点がまばらについています。

食物は他のツル類より動物食を好み、魚、甲殻類、カエル、トカゲ、バッタなどの昆虫類などを多く食べているようです。

○繁殖期は7-10月。分布はパキスタンおよびインド北部アッサムからベトナムまで。近年オーストラリア北部でも繁殖していることが発見されています。

～オーストラリアヅル～

○全長120 cm。オオヅルによく似ていますが、比較的小型で頸部のみ覆出し頸には羽毛が生えています。また、喉の下に黒い羽毛に覆われた喉袋があります。嘴はオレンジ緑色、虹彩は黄色ないし橙黄色、脚は黒色。

○生態はオオヅルと同じですが、果は非常に粗末で、乾いた地面の凹みに若干の草を敷くだけです。卵はオオヅルのものに似ています。繁殖期は10-4月。分布：オーストラリアの北部と東部、ニューギニアに留鳥としてすんでいます。

? 人の足跡、ひびきにあたる地面下の根の白色から選んで



~2~

タンチョウを守る

タンチョウは法的にどう保護されているのか。

■条約
○渡り鳥等保護条約
タンチョウは中国やロシアにもすんでいるので、共同で保護をすすめる約束を両国と結んでいます。

○ラムサール条約
この条約は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」というのが正式な名前です。

1971年、イランのラムサールで開かれた国際会議で採択されたのでラムサールとよばれています。
湿地は、水の循環を調整したり、動植物、特に水鳥の生息地として重要なので多くの国が協力して保護するためにつくられました。

日本は1980年に加入し、北海道では釧路湿原やウトナイ湖、クッチャロ湖、別寒辺牛川流域、霧多布湿原を登録しています。

○ワシントン条約
「絶滅のおそれのある野生動物植物の種の国際取引に関する条約」が正式名称で、日本では1980年に加入しました。絶滅のおそれのある種の取引を制限し、主に商業目的の取引は禁止されています。

学術研究を目的とした場合は、輸出国、輸入国双方の許可があると輸出できます。
また、取引を規制しなければ絶滅のおそれが生じる種の輸出入も制限され、輸出国の許可が必要です。

＝湿地(ワットランド)＝

湿地とは豊富(の多量)の水分を保持し、海、湖、及び沼澤の環境を有し、(とら)てられた土地です。

ラムサール条約では「沼澤」を定義し、「天然のものであるか人工のものであるか、永続的なものであるか一時的なものであるかを問わず、さらには水が滞っているか流れているか、淡水であるか汽水であるかを問わず沼澤地、湿原、沼澤地または水域をいい、低潮時における水深が6メートルを超えない海域を含む。」

* 湿地に多くの動物が生きている。魚や鳥や水生動物が生きている。それを餌にする鳥が多量、さらにはその鳥を食べるワシやカヤクサもついでに、餌を餌にする鳥もついでに、長い道のりに沿って、魚の漁り場のためには重要な場所となる動物もついでに。

一方、湿地は人間活動の影響をもっとも強く受けることでもある。湿地に流入した水は、工業排水や家庭排水などで汚染され、土壌や地下水が汚染され、湿地に蓄積した土壌はほとんどが埋め立てられ、工業用地や宅地や道路に転用されていく。世界で湿地が、湿地の面積に減少を続けている。

今、釧路湿原の減少が大きな問題になっています。タンチョウは湿地に生きているわけではなく、タンチョウの保護は湿地の保全と深い関わりがあります。

(文庫・環境の中心)

~3~

平成9年度タンチョウ生息状況一斉調査結果

①支庁別生息数

支庁	9年度 (9.12.5)				9年度補正 (10.1.26)			
	成長	幼鳥	繁殖	計	成長	幼鳥	繁殖	計
釧路	448	51	0	499	499	54	58	611
根室	33	8	0	41	4	1	0	5
十勝	31	6	0	37	0	0	0	0
日高	0	0	0	0	-	-	-	-
網走	2	0	0	2	-	-	-	-
計	514	65	0	579	503	55	58	616

②釧路支庁市町村別生息数

市町村	成長	幼鳥	繁殖	計
釧路市	14	0	0	14
網走市	1	0	0	1
根室市	2	0	0	2
長手町	16	4	0	20
標本町	28	9	0	37
弟子屈町	0	0	0	0
阿寒町	138	18	0	156
釧路町	239	19	0	258
白根町	2	0	0	2
喜多町	8	1	0	9
計	448	51	0	499

~4~

タンチョウ生息数 616羽

・道自然環境課はここ数年600羽前後で推移しており、生息数に大きな変化はないとみられると分析しています。

・同課では平成10年度タンチョウ保護増殖事業として従来の給餌・監視一斉調査に加え生息地の分散を図るため増殖に関する調査を計画しています。

報道

*3月30日
IITBテレビ
PM7:54
往来北海道で
阿寒道ツル
センターが紹介されます。
見て
下さい。

* データより*
阿寒丹頂の里・給餌場への
タンチョウ最大飛来数

9年度は飛来数が多いようです。
また、幼鳥の数が多いのも特徴です。

日付	7年度			8年度			9年度				
	12月	1月	2月	12月	1月	2月	12月	1月	2月		
01日	51	75	50	01	78	125	140	01	32	170	100
02	50	93	101	02	97	80	120	02	44	154	153
03	47	92	93	03	82	129	115	03	64	150	82
04	50	76	100	04	97	120	8	04	80	120	71
05	53	89	92	05	106	142	124	05	103	130	94
06	51	105	53	06	106	134	131	06	113	118	65
07	63	93	87	07	111	90	131	07	132	111	138
08	73	90	88	08	116	84	116	08	130	153	103
09	82	94	80	09	122	110	97	09	103	87	94
10	86	91	52	10	116	103	135	10	137	100	141
11	74	93	72	11	117	128	126	11	140	150	135
12	87	87	92	12	115	133	138	12	119	150	138
13	74	53	90	13	118	80	120	13	138	161	125
14	65	*	90	14	111	149	104	14	154	94	154
15	74	75	96	15	120	89	72	15	113	94	87
16	108	129	90	16	120	80	138	16	136	120	55
17	101	89	56	17	122	143	103	17	154	157	116
18	113	84	97	18	111	91	101	18	155	158	95
19	117	97	80	19	120	110	134	19	159	97	*
20	87	97	106	20	131	80	124	20	163	96	130
21	79	91	90	21	132	104	65	21	151	150	25
22	93	96	75	22	120	110	77	22	166	120	109
23	83	90	85	23	134	130	127	23	164	105	118
24	63	84	81	24	120	100	130	24	161	135	102
25	83	70	86	25	137	114	129	25	170	110	101
26	83	116	82	26	130	104	128	26	169	80	146
27	75	*	86	27	138	114	102	27	178	124	122
28	74	102	96	28	148	64	128	28	170	78	156
29	111	87	74	29	146	128	29	168	*		
30	111	77			140	74		30	145	153	
31	70	90			140	122		31	150	129	

~5~

< 阿寒町 >

阿寒
あなたのツル日記より

初めての北海道旅行にきました。真っ白な雪の上に真っ白な鶴がすごーくきれいでした。2/9 野 朋子

浜名湖のはよりより8名で来ました。舞い散る雪の中の鶴の飛び立つ姿には神秘的で感動しました。2/12 伊藤 由紀、山本 由紀

九州福岡より冬の北海道に初めてまわりました。丹頂鶴の優雅な姿を目の前に見て非常に感動しました。2/14 藤 由紀

鶴をはじめとても感動しました。とても美しい姿に満足しました。2/16 藤 由紀

はるばる三重県よりやってきました。初めてみる丹頂鶴にとっても感動した。真っ白な白銀の世界に白と黒の丹頂鶴とても優雅で美しかった。2/20 yukini&aiyuki

初めて北海道へやってきました。見るもの全てがびっくりです。鶴の可愛さに羨しさにまさに神が与えた最高の鳥のようです。2/21 藤 由紀

昔、池中玄太郎（TV）でツルを見に行く場面があり、それを想像していたのでくさくさいのにびっくりです。こんなに奇麗なものとは思わなかった。2/22 野 朋子

北海道の大自然に大感激です。間近に見た鶴はとても奇麗でした。是非またツルに会いに来たいです。2/23 伊藤 由紀

はるばる神奈川県から来て今日は最終日。帰りたいような帰らないような...。鶴と共にどこかに飛んでいこうかな。はじめて見たけどメチャ奇麗だね。雪があまりにも白くて目が開かないよー。鶴は眩しくないのかい？ 2/25 伊藤 由紀

東京では見たことがなかったのでタンチョウにはびっくり。こんなに近くまで来るなんてすごいです。2/27 藤 由紀

東京から北海道に引っ越してきて最初は寂しかったけどこういう素晴らしい自然や景色を見るとよかったです。今日この頃です。2/27 藤 由紀

鋼路の友人と来ました。ツルってスマートですね。たぐさんのツルを生で見たのはじめてです。白と黒とのコントラストがすばらしい。2/28 藤 由紀

~6~

優雅な歩き方が何とも言えません。私たちもあのような歩き方をして人生を過ごしたい気持ちです。母、妹と息子と四人一筋の旅です。お天気も素晴らしいよかったです。2/28 藤 由紀

神奈川県横浜市から見学にきました。白、黒のコントラストがとても素晴らしいです。東京羽田は大雷でした。2/31 S-T

自然の鶴がこんなに哀しく感じました。また来たいと思います。3/2 Y-Y

「ACE JTB」より和歌山から来ました。このような風景はテレビニュースでしか見たことがなかったのとても素晴らしい感動しました。3/2 藤 由紀

今年も撮影に来ました。まだ盛りません。3/3 藤 由紀

空け音のオジロワシ3羽...。ちゃんと撮れなかつたためだね。3/3 T-T

生まれて初めてツルを見ました。すごきれいで感動しました。でも、近くで見たら恐ろしいことに気づきました。今度おばあちゃんを連れてきたい。3/4 藤 由紀

茨城県結城郡千代田村（筑波サーキット）がある所です。鶴を見に来た。とても奇麗だった。3/5 藤 由紀

九州佐賀より職場旅行できました。タンチョウ実物をはじめとても感動しました。2/16 S-X

丹頂鶴を見に来ました。しばらく見ていると鶴たちが共鳴したり、急に発鳴したのかあちこちの鶴に向かってアピールし追いかける奴がいたり(観察者、観察者)目の前で舞い広がる自然の生態に驚くばかりです。すごく楽しかったです。3/12 藤 由紀

恩師、犬養 孝先生の歌碑に会えて感動でした。3/12 茨城万葉集の会 福田 幸

ツルさんへ。君はとっても奇麗だ。毎日寒いのにご苦労さん。雪は冷たいです。これからも頑張ってツルさん。グッド バイ。私は茨城へ帰ります。3/12 藤 由紀

鶴のとんだ姿、球装の姿、餌をついばむ姿、数十羽の鶴を見ることができました。大感激。そしてカメラマンさん達の多さにびっくり。3/12 藤 由紀

~7~

阿寒町における
タンチョウにかかわる歴史

タンチョウの孤の幽姿
阿寒町23線、山崎定次郎さんの妻の畑はタンチョウの名所として見物客でにぎわっているが、この阿寒バス停留所に、ズバリ「タンチョウの里」の名前がつけられた。(野 朋子)
阿寒町は阿寒何々線といった停留所が多く、まざらわしいため、見物客はいつも「どこで降りたらツルを見るの」と戸惑いがち。そこでこれまでの「阿寒23線」を改称することに踏み切った。
新停留所は「ロマンを感じさせるすてきな名前ね」とまずは好評で、観光客を誘致する一助にもなりそうだ。4/18 野 朋子

降雪中のタンチョウ観察会
命の奇蹟ご苦労さまでした

3/7 野 朋子
このほど愛護会主催で、第2回タンチョウ観察会を実施しました。お子様から年輩者まで23名の方々が参加されました。この日は昨年と同様になぜか降雪の遅り合わせとなりました。しかし降雪の中、そして冷たい風の中の厳しい自然界の中に生きるタンチョウを観察できたのも意義あるものにとらえていただきました。
予定した多くの行動は観察できませんでしたが参加した皆さんは真剣に観察しておりました。参加された皆様には心からお礼申し上げます。

阿寒丹頂の里写真フェア'98
観望のうちに読了
ご協力ありがとうございました

このほど行われました写真フェア'98には写真関係各社の協賛と多くの報道機関及び、丹頂撮影関係の方々のご協力により盛大に実施することができました。
2日間わたっての日程でしたが来館入場者数は前年の同じ時期に比べて約1.8倍の1,452名が訪れていただきました。
カメラ診断、セミナーにも沢山の人が訪れ終日賑わったところです。
今回の第1回をもとに今後に向けて反省を加え多くの方々に喜ばれる催しにしていきたいと考えております。最後になりますが会員の皆様には多大なご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

あしがき
道東の自然界にも春の気配がいっぱいの今日この頃です。タンチョウたちは驚愕地めがして給餌場を後にしています。

9年度の委託業務(監視事業、給餌事業)も3月をもって終了です。タンチョウ保護増進に向けて責任のある大きな業務でしたがおかげさまで無事に終わることができました。ご協力ありがとうございました。
* 阿寒、丹頂の里の自然環境を保全するために、阿寒町、(Kobayashi)

~8~

会報(七北の)20号

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
〒0154-66-4011 阿寒町 鶴愛護会
電話 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

鶴群

タンチョウの里
きょうこのころ

- ◇ 初冬、やわらかい日ざしの丹頂の里に、70数羽(11/23日)のタンチョウがのんびりとえさをついばみ羽づくろいをする様子が見られました。これから、毎日仲間が少しずつ増えだし大きなにぎわいを見せてくれることでしょう。
- ◇ 給餌場で一時を過ごしたタンチョウは時折、ビオトープの池を往來する様子も観察できます。阿寒国際ツルセンターからも間ちかに見ることができるようになりました。
- ◇ ビオトープの池はタンチョウにとって格好の場所。時には水浴びする姿も観察できました。足を曲げて体を洗っている様子は一見、はて白鳥かな?(11/22)
- ◇ 阿寒国際ツルセンターと観察センターをむすんで橋が設けられ(白樺風)そこからは立ち入り禁止となりました。しかし、そこは飛翔の姿をとらえるに格好の場所。カメラマンの姿が見られます。
- ◇ 観光客をはじめ、近郊からの来館者で賑わいを見せている今日この頃です。



ビオトープに集うタンチョウ

<1>

ビオトープ 造成中

今年も阿寒国際ツルセンター裏で「北海道富良野自然環境整備事業」の工事が進められました。

この事業でいろいろな種類の動植物の生息空間を作り、自然を学習したり野生動物を研究する場として使おうとしています。工事は平成15年に完成の予定です。

この工事で保全ゾーン、草地ゾーンエコアップゾーン、水辺創造ゾーンが設けられます。

• 水辺創造ゾーン〜ここには池や小川を作りヨシやスゲなどの湿性植物を植え、小さな湿原を再生します。

冬になればタンチョウが水飲みや水浴びするのを見ることができるともいれません。

• 保全ゾーン〜センターから丘陵方向に見える林地は旧河川の跡で現在ヤナギ等の河原林が生えています。

ここはあまり手を加えずに保存しますが林の中の様子が見られるように遊歩道が整備されます。ただし、冬はタンチョウ保護のため立ち入り禁止です。

• 草地ゾーン〜以前牧草地だったところをそのまま放置して植生の変化を自然にまかせます。

ここでは、春、小鳥が渡ってきて産卵子育てをしています。

冬には雪で覆われダンスしたり歩きながら餌を探すタンチョウを見ることが出来ます。

• エコアップゾーン〜河原林の中にはもともと湿地だったところが乾燥してしまっただけの部分もありました。そこで、造成した池からながれでる水を利用して自然に湿地に戻るように工夫しました。(7月27日 藤田 加藤)

ビオトープとは

いろいろな生き物がお互いに関係をもって暮らしている空間、例えば草地、川、林、森など昔から生き物がいっぱいいるところをいろいろなタイプがあります。

• 小川の砂や小石の多い場所 [イカルチドリやコアジサシといった鳥たちが卵を産みに来る。]

• 小川 [メダカやドジョウ、トンボのヤゴやホタルの幼虫などがいる。]

• ススキの草原 [秋の七草のオミナエシやキキョウなども生え、バッタなども暮らしている。]

• ヨシ原 [川辺でよく見られるヨシ原には、オオヨシキリなどの鳥がやってくる。]

• 落葉広葉樹林 [ブナやミズナラの林に、シカやサル、キツネ、タヌキ、クマなどがいる。]

• 雑木林 [コナラやクヌギ林に、カブトムシやキツツキの仲間のコグロなどが暮らす。]

• 干潟 [シギやチドリなどの渡り鳥が、潮の途中に寄ってエサを食べて、休んだりする。]

• 池や沼 [カエル、ゲンゴロウ、タニシ、フナなどがくらし、それらをカイツブリやサギなどが食べる。]

• 神社やお寺にある林 [シイやカシの大木に、フクロウの仲間のアオバズクがくらししている。]

• 日本は南北に長いので南と北では気候がずいぶん違う。西表島には、暑いところが好きなマングローブ林のビオトープがあるし、北海道には、寒いところが好きなトマツ林のビオトープがある。

海辺にあるビオトープもあれば、数千メートルの山のてっぺんのビオトープもあるのです。

<2>

1青 辛段

鶴を待つ八代
平成11年度ツル保護対策事業
*本年年度の増殖事業を紹介します
八代の「ツルを愛する会」では越冬するナベヅルを一羽でも多く呼び寄せようといういろいろな事業を展開しています。
◆熊毛町、下松町、徳山市の山のネグラ(2カ所)ため池ネグラ(1カ所)田ネグラ(8カ所)と伐間、耕運、整地、ネット張り等を行いツルが安心してネグラを利用できるよう整備にあたる。

◆昨年からツル誘引対策としてデコイ(模型)を利用しているが、今年度新たに7体を作成、昨年度の10体と合わせた17体で設置場所も増やして鳴き声放送を流しながら誘引を実施する。
デコイ設置は2段階で行う。飛来当初はツルに気づかせ降ろす目的で行い次の段階では過去に降りていた場所に設置し、なわばり等で追われたツルを定着させる目的で行う。

◆◆本年度も山口県の長期的ツル保護対策調査研究事業に基づいて、国、県、市町、地元の方々やボランティアの人々で特別天然記念物「八代のツル」を守り1羽でも多くの渡来を見られるように努力しています。
(1999.9.30 鶴群の里(里より))

ツルのヒート

年次	天候	観測日数	計数
平成7年度	曇	14.43	6020
	晴	15.50	5431
平成8年度	曇	11.50	3328
	晴	15.50	2529
平成9年度	曇	12.30	1020
	晴	14.40	1252
平成10年度	曇	12.00	1128
	晴	13.00	1458
平成11年度	曇	12.40	1320
	晴	13.00	528

<3>

2000年 第3回
阿寒丹頂の里
鶴クイズ
1月1日午後1時
の発表会!

Question

問題
平成12年1月1日午後1時に阿寒丹頂の里で確認されるタンチョウの数は何羽でしょうか?

応募方法

応募先

賞品

制限

抽選

お問い合わせ先
阿寒町タンチョウ鶴愛護会
阿寒国際ツルセンター
電話 0154-66-4011 FAX 0154-66-4022

タンチョウ

標識鳥による年齢

今年も給餌場において、標識鳥が見られます。1988年からタンチョウ基本調査グループによってつけられています。

T01~	T94~T99
T02 1988年生 12才	01V~14V 1996年生 4才
T03~	15V~
T08 1989年生 11才	26V 1997年生 3才
T09~	27V~
T18 1990年生 10才	44V 1998年生 2才
T19~	45V 保護鳥 年齢不明
T34 1991年生 9才	46V~
T35~	64V 1999年生 1才 (幼鳥と呼ばれます)
T49 1992年生 8才	
T50~	
T59 1993年生 7才	
T60~	
T74 1994年生 6才	
T75~	
T93 1995年生 5才	

標識鳥によって移動のようすがわかります。タンチョウ基本調査グループ事務局になっている阿寒国際ツルセンターでは皆さんのタンチョウにかかわる情報をお待ちしております。

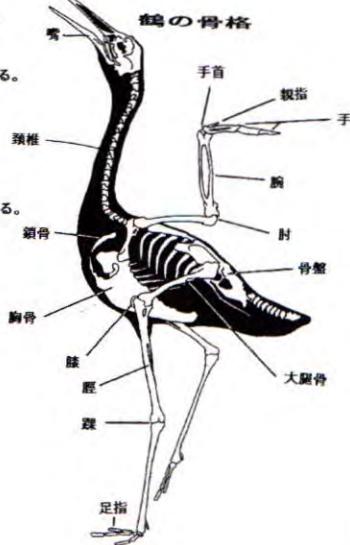
<4>

空を飛ぶ

- 飛ぶためには飛ぶための条件が必要です。
- 人間の骨格・仕組みと比べて見るとその違いが分かります。
- ◇飛ぶためには軽い骨が必要
 - ・人間の骨は重い体を支えるために太く頑丈になっている。
 - ◇鳥の骨は空洞になっていて軽く、内側のところどころに支えがあり頑丈になっている。
 - ◇胸骨は人より大きい。
 - ・大きな筋肉を支えるのに完璧
 - ・翼を動かすために強い胸の筋肉が必要

- くしのついた重いあごの代わりに軽い嘴をもっている。
- ◇人より少ない骨をもっている。
 - ・体重を取り除く必要上

- ◇風切羽と呼ばれる羽は、はばいたときに体を空中に浮かせ前進する力をつける。



<5>

タッコとエム子です どうぞよろしく

※4年間、阿寒国際ツルセンターで飼育され多くの人に親しまれてきたロクサンとヘイセイに替わって、このほどタッコとエム子のつがいが出てきました。

僕（♂）はタッコ（♂）と言う名前が6歳です。1994年8月にひなのとき釧路町達古で保護され釧路市動物園で飼育されてきました。

私はエム子（♀）と言う名前が7歳です。1993年5月に釧路市動物園で父シチロウと母キ子の間に生まれました。これから阿寒国際ツルセンターの新しい顔として皆さんに親しまれていきます。

〜があとを絶ちません。

そうした気持ちを尊重しつつも「野生は野外に」の考え方の普及が必要と思われまます。

一方、秋の保護は、その年に生まれた若い個体が、親から独り立ちしたあと。うまくえさが取れなかったり、風に流されたりなど、原因の多くは経験不足によるものと思われまます。

こうして持ち込まれる動物の多くは数日中に死亡してしまいますが野外に戻せる場合は飼育することになります。これらの個体同士が繁殖するケースも最近では増えており、増えた個体を再び野外に戻す試みも始まっています。

※タッコも産ませたいので保護された大事に育てられたタンチョウなのです。

!!!!!! 採蛋者!!!!!!

釧路市動物園における保護活動について（開園20周年記念誌より）

傷ついたり、弱っているなどの理由により毎年多くの野生動物が保護されます。収容数が多いのは5〜6月、総じて9〜10月です。

春の保護は幼体が多く、例えばエゾシカやカモのヒナなどは、親が離れていたのに、人間が勝手に親にはぐれたと思込み、善意から持ち込まれるケースが多いです。

阿寒国際ツルセンター

来館記念スタンプ

***** 1999 年 日

<6>

ツルクイズ

- 【問題】 幼鳥とは？
- タンチョウの場合は次のどれでしょう
- ① 巣から離れたばかりのヒナ
 - ② 親からひとり立ちしたヒナ
 - ③ 飛べるようになったヒナ
- 前号の答え（③チベット）



あなたのツル日記 より

来館者の皆さんが丹頂を見てその思いをつれづれなるままに書き綴られたものです。愛護会では一資料として保管しています。

*野生のツルを初めてみました。真っ白でとてもきれいでした。今度は飛んでいるところを見たいです。

ちなみに私の名前は千鶴です。

H11.10.20 TIDURU

*初めて野生のツルを見ました。外にいたオグロツルも見れてよかったです。望遠鏡で飛んでいるところも見れて嬉しかったです。やっぱり来てよかったです。

H11.11.1 T.T

*夫婦円満の姿に考えさせられました。

H11.11.1 S.T

*今、隣でユミちゃんが、羽ばたく鶴を折っています。私は途中であきらめた。要するに不器用なのだ。

初めて釧路に来たけど、釧路は交通便が悪いよ〜。車を運転できない人のためにバスを増やしてほしいな。

鶴を初めてみました。ビューティフル！鳴き声に聞き惚れちゃいました。また来たいと思います。

H11.11.5 M.N & Y.K

阿寒国際ツルセンター

来館記念スタンプ

***** 1999 年 日

<7>

*和歌山県から来ました。近くで見れたから、もっと良かったけど望遠鏡のおかげで姿をはっきり見ることができました。感動！今日は20羽くらいかな

H11.11.14 M. 鼓好

*6名で鶴をながむる。

北海道の阿寒の地にて 幼き日思い浮かぶ。

H11.11.16 I.Y

*北海道は初めての旅でした。とても美しい4泊5日の旅でした。最終日、ここに鶴を見に来ました。

H11.11.16 眞断 樹葉

*今日、生まれて初めてツルを見た。とてもうれしかった。ハトもいたよ。ツルがきれいだったので感動しました。

H11.11.19 眞断 木葉

*ツルすてき。ゼツメツしないでね。私は今日帰ります。

H11.11.21 絆

*ツルクイズで ツル博士100点取ったよ。ツルはでかい。！足が細くていいな〜

H11.11.22 眞断 TOM



タンチョウ一斉調査 (11年度)

北海道が昭和27年を第1回として調査以来、毎年実施しているタンチョウの一斉調査・11年度第48回は平成11年12月6日(月)に実施されました。午前9時が本調査です。(0850〜0930が調査・0930〜0945が観察) 昨年は596羽を確認しました。はたして、今年の羽数は？

阿寒丹頂の里写真フェア2000

第3回阿寒丹頂の里写真フェアを平成12年2月12日(土)〜13日(日)の2日間にかけて実施します。

①写真展：7:00〜18:00 入館無料 9:00〜16:00

②演説会：観覧券100円(税別) 10:00〜15:00

③演説会：タンチョウの飼育・観察 12:00〜15:00

④あまざけ、おしるこの無料サービスも行います。

*後日フェスタの要項をお届けいたします。

オリジナルステッカーを同封しました。ご使用ください。



この度作成しました。(1枚・220円(販売中) 会員皆様への販売価格は150円です。

<8>

会報(北光) 30号



阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 〒098-2384 阿寒町
 (阿寒町センター前)
 2001.07.27 新
 #085-0245
 00154-66-4011, 00154-66-4022

散策してみませんか
 ビオトープに遊歩道

冬期間、たくさんのタンチョウの遊び場となるセンター裏手のビオトープに、多くの野生の動植物が生息して行ける環境整備と、タンチョウを間近に観察することができるように今年も手が加えられています。

このビオトープに一周約500mの遊歩道が設けられ、センターから散策できるようになりました。草地・人工池のほとりの部分はウッドチップ歩道、草地から続く旧河川の部分は木道となっています。

遊歩道からは、季節ごとに変化する草花、木々、野鳥や鳴き声が楽しく観察できます。

このビオトープは北海道釧路村自然環境整備事業として行われています。この事業はいろいろな動植物の生息空間(ビオトープ)を作り、自然を学習したり、野生動物を研究する場として利用されます。



21世紀は「環境の世紀」

地球温暖化の進行や野生動物の消失など地球規模の問題を含め、これまでの私たちの生活や産業活動が、環境への深刻な影響をもたらしていることを認め、環境という大きな枠組みを常に意識しなければならない時代を迎えています。今こそ「人と自然が共生する社会の実現」がもたらされています。自然環境の保全について、あらためて考えてみましょう。

ビオトープ

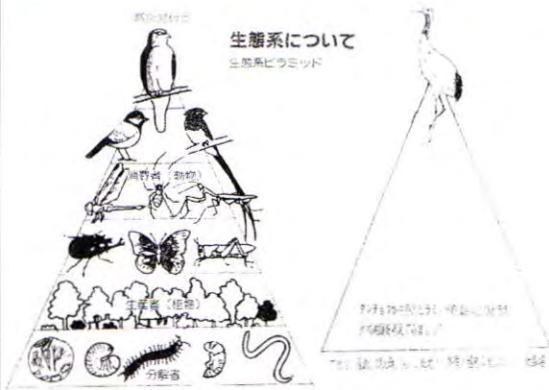
ビオトープとは、ドイツ語で生物が生きていく空間、住み場所という意味です。(いろいろな野生の生きものたちがくらす場所) すべての生物はエサをとったり、子どもを増やしたりして生活しています。その生息・生食のための広さは生物によってみなそれぞれ違います。その広がりの中で、野生の生きものたちはお互いに関係し合って生きています。これを「自然生態系」といっています。

生態系

湖・海・森林など、一つのまとまりを持った自然環境と、そこに住むすべての生物を合わせて「生態系」といいます。この中で生物たちの関係は食物連鎖(食う食われる関係)でつながり互いにバランスをとりあって生きています。生態系をつくる要素となる、水・空気・光・土を無機的環境と呼ばれています。この無機的環境の一つでもくずれると多くの生き物は生きてはいけません。人間の存在も、動物どうしの食う食われるの関係に強く依存し、影響を受けています。



生態系について
 生態系ピラミッド

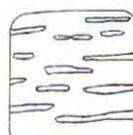


破壊される生態系ピラミッド
 生物たちがお互いに関係する生態系ピラミッドは、より複雑な関係の中で生きるピラミッドの頂点にいるのが消費者の生物ほどダメージを受けやすいのです。

それを1本通すことで大きなピラミッド小さな2つのピラミッドに分断されます。そして、オオカミやサンバウの入る大きなピラミッドの頂点にいた生物たちは絶滅していくのです。

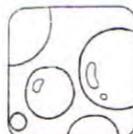


生態系をつくる要素



水のはたらき

生物体の成分として水は最も多く存在し、生物体内の生体活動を支えています。また、地球レベルでは、水は蒸発し、宇宙に熱エネルギーを放出して、冷えてまた水にもどります。こうして地球の温度調節をして、生物の生息できる環境をつくっています。



空気のはたらき

空気中の成分である約21%の酸素、約1%の窒素、0.03%の二酸化炭素は生物にとって大切な成分であり、呼吸作用です。オゾン層は有害な紫外線から生物を守り、二酸化炭素の量によって、地表の温度が変化します。これが人間の活動で多くなると、温室効果がおこり、地球が温暖化するといわれています。



太陽エネルギーのはたらき

植物は光合成を二酸化炭素と水、太陽エネルギーで行い、酸素やでんぷんなどの私たちの利用できるものに変わります。人間や他のすべての生物は、この植物がつくった物に変わられて生きています。また、生物体内でビタミンDを作るためには、日光浴が必要で、



表土

生態系を支える最も大切なところで、植物が育つために必要な有機物を含んでいるだけでなく、ミミズなどの生物や多くの土壌微生物が生きています。これらの生物が、生物の死体を分解し、植物が利用できる栄養分に変えます。表土は、森林伐採等で簡単にこぼれますが、1年でできるためには、100年から400年かかるといわれています。

こわされる生態系の要素



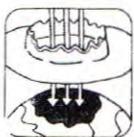
川の汚染

川をコンクリートの管で覆ったこと、川は生物の住む場所やいのちの場から、生活排水の水路になってしまいました。そのために川は、生活排水、工業排水、農薬、家庭の洗剤等で急速に汚染されました。本来、川が持っている自然の浄化作用が、大量の水がこぼれればなくなります。そのために川の水の質が悪くなり、水質が低下してきています。



空気の汚染

工場や自動車、火力発電所からの煙に含まれる有害な酸化物やオゾン層の破壊、雲の次に反応して硫酸や硝酸を降らす酸雨になります。これが酸性雨となり、土壌の酸性化を招き、森林を枯らし、魚や水棲生物を殺します。



温室効果

二酸化炭素やメタン、オゾン層の破壊によって高くなり、北極や南極の氷が溶け出し、海面上昇（海面上昇）と海水の塩分濃度の低下（塩分濃度の低下）が引き起こされる。また、海面上昇によって、低地の土地が水没し、多くの生物が絶滅の危機に瀕しています。



土壌の破壊

森林破壊や、農薬の取扱いのやりすぎ、土壌の塩害を起させ、耕作等の無計画な農地開発によって土壌が薄くなり、洗いやれ、土壌が痩せてしまいます。こうして土壌が痩せると、植物が育たなくなり、動物も食料がなくなると「飢饉」が起ります。世界で、1年間、日本の4倍の土壌を失われ、砂漠化しています。

ピオト プ・牛乳資料「星の環会」ピオト・プノ知蔵編より抜粋 5

サロリン・カムイ (温泉の神) のいわれ

アイヌの人たちはタンチョウのことをサロリン・カムイといいます

サロリン・カムイ物語

アイヌ伝説集・阿寒地方編より
 釧路地方に生息する丹頂鶴のことをアイヌ語でサロリンカムイ（温泉に生息する神）と呼ぶ。この丹頂鶴には二つの伝説がある。
 ＊その1 昔、釧路近くのあるコタンで一人のアイヌが一頭の手色い大熊を飼っているうち、やがて熊は、やぶ原の中に姿を消してしまった。アイヌは「おかしいなあ、そんなに早く逃げさせるわけがないなあ」と、なおも追跡に探しているとき、やぶの中から「ホロロッ、ホロ、ロッ」という鳥の鳴き声を聞いた。

大急ぎでいってみると、その大熊が倒れており、一羽の鶴が熊の鼻さきになって苦しんでいるので、さっそく熊の鼻をとめて鶴を救ってやった。

そのアイヌはコタンに戻り、鶴が熊の居場所を覚えてくれたことを報告すると、コタンの人たちは、鶴も立派なカムイ（神）だといっておかめたてまつるようになった。

＊その2 釧路アイヌの始祖カネキラウコロエカシ（角をつけたカブトを持った古者）は今の釧路鶴岡の近くで大きなツツ（釜）を築き、多くのツツ（神）と平和に暮らしていた。そしてカネキラウコロエカシは、釧路の丹頂鶴を飼い、毎日自分でエサを与えてあげていた。

アイヌ伝説集・阿寒地方編より
 こうした平和なコタンの暮を壊るようになり、ある日、千島方面からクルンセという鶴一族がコタンを攻撃してきた。彼らは森や河原のアイヌを襲い、宝物を奪い、ヒリカメノコ（美しい心女）を掠奪し、西へ西へと進軍してくるのでした。

意いカネキラウコロエカシは、さっそく部下を集めて防戦したが敵はなかなか強いたので、御座内や北見、十勝のアイヌにも援軍を求めて、御座内や内御座で内御座つぎ進軍するうち、鶴ははやがて二年も経過した。

ある日カネキラウコロエカシが御座内に主力を注いでいるうち、ツツの防壁の手薄を知ったクルンセ軍の一部は、ツツを占領して、ツツに残っていたアイヌはクルンセ軍のためみな殺しにされてしまった。

そして、飛びかう丹頂鶴もクルンセ軍の行方のため見失われ、奪われてしまった。ツツが占領された後にカネキラウコロエカシは、急ぎとってかえし、ようやくクルンセ軍をツツから撃退した。

やがてクルンセノモシリ（国）で大地震があり、慌てて彼らは逃げようとしていたので鶴は救われた。キラウコロエカシは再び鶴を飼育しようとしたが、鶴は人の姿を見るとみんな逃げた。

それ以外キラウコロエカシは、コタンの人たちに「クルンセ族は鶴を殺したが、我々は絶対に鶴を殺さないことを誓うことにしよう」と申し合わせ、カムイとして大切にするように言った。クルンセ軍が自分たちのモシリに帰ってからも大地は騒ぎ、たくさんの人

間が死にモシリが陥没して小さい国になった。それが丹頂鶴だといふ。

釧路のエカシたちは「きつとあの時鶴なクルンセたちはサロリンカムイの羽が落ちたのだ。だから起るものではない」と子孫に語り伝えている。

「コスチューム飼育、改良型、出番なし」

有精卵生まれず断念

2年目 改良型、出番なし

阿寒国際ツルセンター

阿寒国際ツルセンターはタンチョウをはじめとするツル類の保護のための研究・教育・増殖を目的として設立された、阿寒町教育委員会管轄の施設です。阿寒町教育委員会と阿寒町タンチョウ保護会、阿寒国際ツルセンターのツル保護活動をボランティアで手伝っていただける方を募集しています。

前号（観覧29号）でも呼びかけましたが、■コスチューム飼育についてはヒナの誕生がなかったため、ヒナの飼育にかかわるボランティアはありません。活動内容 ①施設部門：タンチョウの飼育・飼育施設管理のお手伝い。②解説部門：来館者に対するセンター内外の解説や案内のお手伝い。＊なおボランティアにかかわる日数、時間帯は自由です。懇談会では経費の補助をいたします。＜申し込み 観：0154-66-4011 7ヶ月：0154-66-4022＞

13年度会費納入御礼(5/26-7/2018)

- ☆絵師おかげ
- | | |
|-------------------|--|
| 平間 学様 1口 (阿寒町) | 正意様 1口 (山形県) |
| 中山 二雄様 1口 (阿寒町) | 鶴出真知子様 1口 (阿寒町) |
| 安原 健夫様 1口 (東京都) | 松永るみ子様 1口 (阿寒町) |
| 佐々木三雄様 1口 (阿寒町) | 土田 世紀様 1口 ☆ (東京都) |
| 水野 晃様 1口 (阿寒町) | 羽倉 佳代様 1口 ☆ (徳島県) |
| 大島 桂子様 1口 ☆ (釧路市) | 金子紀美子様 1口 (大阪市) |
| 内山七三雄様 1口 (歌志内市) | 山田 兼司様 3口 (埼玉県) |
| 小松 千恵様 1口 (旭川市) | 河野 平様 1口 (静岡県) |
| 柳原ミヨ子様 1口 (東京都) | 佐藤 眞理様 5口 (千原市) |
| 大野 義行様 1口 (京都市) | 秋場 久治様 1口 (東京都) |
| 福田 善治様 1口 (大阪府) | 宇都 光孝様 1口 (埼玉県) |
| 浦水 博様 2口 (岐阜県) | 生田 眞朗様 1口 (神戸市) |
| 陣島善治様 1口 (東京都) | 宇島 智恵様 1口 (鹿児島) |
| 横田 久様 1口 (神奈川県) | ヤマシタ 隆太郎様 1口 (阿寒町) |
| 立石 浩造様 1口 (千葉県) | 株式会社松屋様 1口 (阿寒町) |
| 大宮美千子様 2口 (仙台市) | 御寄付 |
| 高橋 弘子様 3口 (夕張市) | 日本清酒販売 10万円也(6割) |
| 松井 修治様 1口 (紋別市) | 鶴出真知子様 1万円也(既報) |
| 金子 哲治様 1口 (横浜市) | 朴 喜千 様 5千円也(既報) |
| 桜井 幸次様 1口 (釧路市) | ＊会費納入・御寄付にたいしまして厚く御礼申し上げます。 |
| 佐々木彩和様 1口 (東京都) | ★ あ と が き ★ |
| 木村 邦雄様 1口 (阿寒町) | ※中お見直し申し上げます。会員各位におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。 |
| 宮澤 陽子様 1口 (阿寒町) | 道東は7月に入ってずっとうとういい天気が戻ってきましたがようやく夏が輝きだしました。7月7日昨年人工孵化によって育て上げたカンタは事故により死亡しました。残念でなりません。今年はヒナの誕生もなく寂しさを感じさせます。 |
| 柴地 利勝様 1口 (大阪府) | 笑さはこれからも続きます。皆様のご言葉を祈ります。 (ごばやし) |
| 植木 雅子様 1口 (旭川市) | |
| 間宮あゆみ様 1口 (東京都) | |
| 福澤 慶明様 1口 (東京都) | |
| 石橋 彰様 1口 (東京都) | |
| 松岡 寛様 1口 (釧路市) | |
| 植田 高彦様 1口 (神奈川県) | |
| 佐藤 公様 1口 (三重県) | |
| 中井 茂様 1口 (大阪府) | |

会報 (北北) 40号

阿寒町タンチョウ観覧協会



第 23 報 (40 報)
(原野 74 センター A)
2003. 3. 27 新
@085-0245
TEL0154-66-4011 FAX0154-66-4022

湿原めざして 山越え

道東にも春の兆し、3月下旬旬の冷え込みは続くものの日ざしには明るさと暖かさが増し、雪解けがすすんでいます。タンチョウたちにとっても待望の春、気もそぞろにそれぞれが思いの営巣地をめざして阿寒丹頂の里をあとにしています。毎年のことながらこの時期、給餌場に集まるタンチョウの数も日毎に減り続け寂しさを感じさせます。

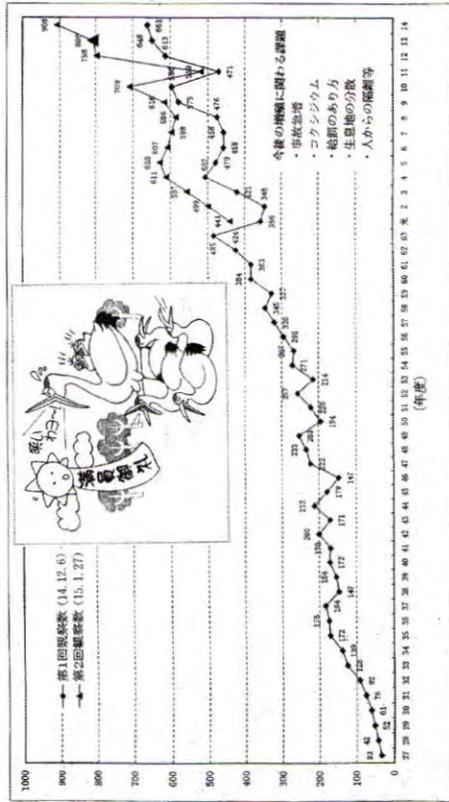
今冬、阿寒の里で越冬中電線事故により6羽が亡くなっています。中でも11月下旬にはわぐらへ帰る途中の親子3羽(家族)が電線衝突死という事故はあまりにも痛ましいものでした。

ともあれ、約300羽のタンチョウたちがこの里で越冬し元気で湿原へ戻ることは喜ばしいことです。秋にはまた、この里へやってくることを待っています。



3月23日/自然観察会参加者

①



タンチョウ生息状況一斉調査結果の推移グラフ

②

平成15年3月11日 北海道新聞掲載



阿寒町タンチョウの生息状況

阿寒町など

野生タンチョウに寄生虫

ヒナが死ぬ可能性

【阿寒町】阿寒町野田の野生タンチョウの繁殖地。3月11日、北海道新聞に掲載された写真には、野生タンチョウのヒナに寄生虫が寄生している様子が写っていた。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。

野生タンチョウのヒナに寄生虫が寄生している様子が写っていた。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。

ツル情報
八代監視所から
ナベツルは3月12日をもって
すべて北帰行しました。
今冬の飛来数
成鳥8羽、幼鳥4羽 家族数4

同僚監視所の監視員が、3月11日、野生タンチョウのヒナに寄生虫が寄生している様子を撮影した。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。寄生虫は、野生タンチョウのヒナに寄生し、ヒナを死に至らしめる可能性がある。

③

タンチョウを観察される
皆さんへのお願い

給餌場は、タンチョウが冬を生き延びるためにあります。
観察することが目的の場所ではありません。
タンチョウが安心して暮らせるよう、マナーを守って観察してください。

① びっくりさせないで!

タンチョウはとても神経の過敏な鳥です。驚いて飛び立つときに、電線に引っかかり立木に衝突して、ケガをしたり死んでしまうことがあります。
タンチョウを驚かせることのないよう、次の点を守りましょう。

フラッシュは
使わないで!

物を投げないで!

大きな音や声
を出さないで!

追いかけ回さ
ないで!



② エサをやらないで!

給餌はタンチョウ保護のため、限られた人により管理されて行われています。エサやりはタンチョウに悪い影響を及ぼします。
エサは絶対に与えないでください。

③ ゴミを捨てないで!

人間が捨てたものを食べると、タンチョウが死んでしまうことがあります。ゴミは必ず持ち帰ってください。

【過去に飲み込まれていた例】

空き缶、リングプル、釣針、袋のおもちゃ、プラスチック、ビニール袋

④ ねぐらに近づかないで!

冬の朝、タンチョウが安心して眠るためには、安全で、凍らない川が必要です。そのような場所は、わずかしがありません。
タンチョウの眠りをおびやかさないよう、遠くからそっと観察してください。

近寄らず そっと見守る 思いやり

タンチョウを事故から守るために
*タンチョウを観察する人々へのチラシが、次の機関によって作成されました。
*環境省・北海道釧路支庁・阿寒国際ツルセンター・阿寒町教育委員会
*阿寒町タンチョウ観覧協会

④

「子どものいる家族にとって
子別れは 大きなイベントの一つです」

□□ もう子どもじゃないよ！おやこの別れ □□
第6回自然観察会おわる <35235>

阿寒町タンチョウ鶴愛護会と阿寒国際ツルセンター 主催で実施している本年度第3回目
高第6回目の親子自然観察会を満員開催しました。
この観察会はこの時期に見られる子別れについて、紙芝居やゲームを通してその概要を
理解したあと観察センター（給餌場）へ出かけ、幼鳥を主体にその様子を観察しました。
実際にはなれ独立した幼鳥を見ることができました。現から離れて大丈夫？心配ご
無用。もうすっかり独りで自然界で生きていく術を身に付けているのですから――。
参加者たちは見聞に真刻に取り組み充実した観察会になりました。
次の繁殖へ向けて遼原へ戻る成鳥たち、いつの間にか減された幼鳥だけが目につく給餌場
になります。3回目のまとめとしてタンチョウの1年の生活サイクルを復習理解し今年度
の観察会を無事に終えることができました。<参加者：親子15名>



⑤

阿寒式鶴 つれづれなるままに
思い出日記

○大阪から参りました。こんな間近でツル
を見る事ができてとても嬉しいです。
感動！ 2003.2.2 YUMI

○青空をバックのタンチョウなかなか写
せないものですね。東京からタンチョウ
を撮影に来ました。
2003.2.3 昭雄 昭雄

○通北の町より初めて60才にて遼東の町
へ来ました。阿寒町の及の道案内でツル
を見せていただき感謝しました。ヨーロ
ッパ研修の集いで赤いベレーに1泊です。
2003.2.6 昭雄 昭雄

○感動、感動です。とてもきれいな、雪
の降ってる日でした。
2003.2.9 昭雄 k.k

○柳亭阿房、白い北海道へ家族で参加。
テレビでしか観てなかつたタンチョウを
見た。実際に見ることができて大変
感動しました。チャンスがあれば再び訪
れたい気持ちです。
2003.2.13 昭雄 昭雄

○はじめてツルを見ました。遠に迷
いながら、やっとどりついて見れたは
鶴はトチモきれいでステキでした。
毎シーズン見たいなや・・と思っ
てました。鶴を見た。鶴を見た！！
2003.2.9 千鶴 昭雄

○沖縄から来てツルを見ました。運がよく
ツルが100羽いた。すごかった。感動
した。 2003.2.13 BYBY

○ドコモ中国の研修で鶴(タンチョウ)を見に
きました。すごく良かったです。はじめてみたの
で感動しました。1000円札の裏のモデルに使わ
れているのが見てよかった。 ちろ ちろ
2003.2.14 ????

○HAWAIIのツアーの仕事で立ち寄りました。
みなさん、喜んでいました。今日はかな
り楽しんで見ごたえ充分！！
ずっとタンチョウの愛護園であってほしいで
す。 2003.2.14 とら 昭雄

○広さ 美しさに感動
2003.2.19 ATUKO

○人生のやすらぎを見つけたような気がします
2003.2.19 淑郎 昭

○銀路晴れの空に舞うタンチョウが見られ感
動しました。3度目でこんなに天気が良いのはは
じめてです。2003.2.20 昭雄 昭雄

○感激！！ ただただ美しい。鶴にあえて良かっ
た。 2003.2.22 昭雄

○3度目のツルセンター来館。結婚前に一度。
昨年と今年です。2才半の息子はツルもわか
つたようになり昨年より2〜3倍楽しんでいます。
また機会があれば皆で来たいと思っ
た。 2003.2.25 昭雄 昭雄

○初めてタンチョウを見ました。雪も降ってき
て、とても神秘的でした。鶴たちが鳴きあ
つて空にも感動しました。1日居たい気持ちにな
りました。ツルたちにありがとう。
2003.2.26 千鶴 昭雄



⑥

○丹頂とは 奥深き 人生のようなもの
2003.2.27 昭雄

○香川県から新婚旅行で来ました。すご
いツルが沢山あって、すこきれいに感
動しました。いい思い出の一つになりそ
うです。 2003.2.27 とら 昭雄

○今日は親子3人でタンチョウを見に来
ました。大きいですね。オゾワシも見
れて楽しかった。2003.3.1 昭

○美しいつるの姿にしばし時を忘れるこ
とができました。ありがとうございます。
2003.3.1 昭雄 昭

○福岡から鶴を見に来ました。すばら
しい一言です。産卵後、出水のナベツル
に比べて大変品柄がありました。
2003.3.2 昭

○福岡県大野城から来ました。この鶴を
見ていると北海道はすごいですね。
餌を求めてくる瞬間がすごいですね。
鶴は美しいきれいな生き物ですね。また
鶴を見に来たいです。ほんとうにありが
とうございました。2003.3.2 昭

○熊本から来ました。つるはすごい！
サムイの顔張っていました。感動しま
した。キレイなつる♡??

○東京から一泊二日の今日丹頂の里に到着。さ
すが自然は美しくまた温かい。大自然の雄大
さと鶴の美しさ。今日3人は忘れないうら。
2003.3.4 昭雄 昭雄

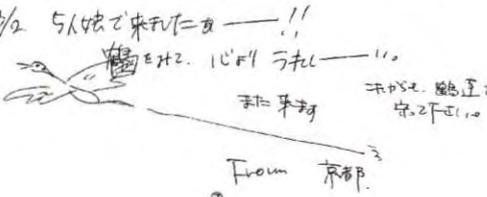
○女二人北海道旅行。ここで鶴の美しさにびっ
くり！ すばらしいものを見ました。私た
らの生涯の思い出になりました。ありが
とう
2003.3.4 昭雄 昭雄

○地元へ居て初めて間近でツルを見た。美し
いキレイだったよ。銀路にこんな穴場があ
つたなんて・・・25年目に知った。
2003.3.6 ???

○北見の病院へ来た帰りにいつもいつも一回拝
見してみたい念が叶い、本当に感動しま
した。すがすがしい容姿に、心の中がす
み切った感じがします。病も治る
2003.3.10 昭雄 昭雄

○サクネンハ再観と、そして今年も友達と鶴を
見に来ました。鶴の美しい姿が忘れられ
ない。再会できたことを嬉しく思いま
した。誕生日を鶴たちと過ごして良い
年になりそうです。
2003.3.13 昭

○小学校卒業記念に来ました。美しい鶴の姿に
感動しました。ちよー感動！！札幌の親子5人
生まれて初めて見たタンチョウすこ
きれいなつる。まじでキレイ
2003.3.21 昭雄 昭雄



⑦

タンチョウの産卵後経過記録
ツルが産む(産卵後)1日

・産卵：午前中が多い。時間は決まってい
ないらしい。

・産卵卵の数：大体2個。1個のこともあ
る。(平均1.8個)

・最初の産卵から次の産卵まで：1日空
くことが多い。連続して産むこともあ
るし2〜4日空くこともある。

・2卵を産み終えると、交尾はピタリと
なくなる。

・卵の形：いわゆる卵形。片方の先端は
少し細身(尖端)、反対側(鈍端)は
すこし太い。

・長さ：サイズ8.3a~10.5a
太さ：サイズ5.7a~8.3a

・殻の厚さ：軽化したあと0.45~0.65mm
(平均0.37mm)

・重さ：産みだて2.00~2.80g
(平均2.60g)

・色：普通(?)少し灰色がかつた薄い
ベージュ色、淡い紫色やこげ茶色の斑
点まばらに散る。

・白い卵を産む割合 西黒に一集(25%)
白い卵を産むメスはいつも白い卵を
産む。中国でも白色卵がわずかに見
つかつている。

・誕生：産卵後3〜2日(前後もある)



⑧

会費納入簿(15.1.2008)

☆会費納付済	☆会費未納
(株)マルカツ様 1口(阿寒町)	
阿寒町わが家 様 1口(阿寒町)	
☆藤田 進 様 5口(大阪府)	
井部 裕子 様 1口(東京都)	
☆武田好永 様 1口(東京都)	
平野 敦 様 14,15,16,17口(京都市)	
石橋 彰 様 15,16口(京都市)	
佐藤 匡志 様 15,16口(森名市)	
☆曾根琢磨 様 15,16口(三島市)	
形山高壽子 様 15,16口(名古屋市)	
岡庭あけみ 様 15,16口(東京都)	
—— ありがとうございます ——	

・お返 願 しい
3月は本会の会計年度の最終月です。
14年度分の会費の納入が済んでい
ない方は、恐れ入りますが15年度分
と一緒に納入くださいますようお願い
いたします。

◆◆◆ あとがき ◆◆◆

・「暑さ寒さも彼岸まで」まさにその
通りのこ阿寒町。春彼岸を過ぎた途
端、寒さはどこへいったのでしょうか。
日中の気温も上がり雪解けが目に見
えて進んでいます。やがて黄金色に輝
く福寿草の季節となります。
さて、今年度の事業も皆様ごたの
ご支援によりおかげさまで無事終了
することができました。大変ありが
うございました。(事務局：小林)

会報 (北九) 50号

鶴群

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

事務局 阿寒23線40番地

(阿寒町北ノ内)

2004.11.26 題

☎085-0245

TEL0154-66-4011 FAX0154-66-4022

凛々 初冬・タンチョウ続々集合

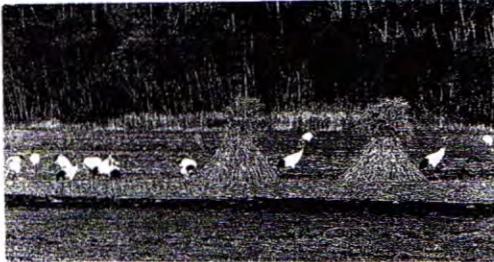
阿寒丹頂の里で越冬 凛々

<11月23現在;約100羽>

・道東、4大給餌場の一つとなっている阿寒丹頂の里に今年もこの地で冬越しするタンチョウたちが集まって来ています。例年になく暖かく経過している11月ですがこれから日毎に寒さが加わり雪が伴う本格的な厳冬を迎えますと、やがて300羽近くまでその数を増すものと思われます。

・現在、集まっているタンチョウの数の約1割が幼鳥たち。親に見守られながら初めての集団生活を体験しています。これから来春まで給餌場とねぐらを往復し越冬地を越す術を身に付けるのです。そして、一層たくましく成長していきます。

・穏やかな阿寒の地で、タンチョウたちが安全に安心して越冬できるように私たちみんながそれぞれにタンチョウの冬の生活を正しく理解して温かく見守ってあげましょう。



<1>

タンチョウ観察センターに

写真交流コーナーが出来ました

タンチョウを愛護する

会員皆様からの写真をお待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

タンチョウを撮影した写真を展示していただくコーナーです。皆さんの力作をお待ちしています。(コンクールではありません。)

<作品の展示期間> 平成16年11月11日～平成17年3月25日

<作品について> *大きさは自由です。
(展示の都合上、額またはパネルでお願います)
* 作品はお一人2点まで。
* 作品の裏面に、氏名、年齢、住所、郵便番号、電話番号を明記して下さい。

<その他> *作品の返却については、希望により愛護会で行いますので、お申し付け下さい(送料は自己負担とします)
* 不明な点は、下記にお問い合わせください。

〒085-0245 阿寒町23線40番地 阿寒国際ツルセンター内
電話(0154)66-4011 Fax(0154)66-4022
阿寒町タンチョウ鶴愛護会事務局まで

<現在 写真交流コーナーに展示中>

毎年タンチョウ観察センターで開催されている写真交流展、現在写真家横田久先生のタンチョウ写真ツアーに参加された皆様の作品を展示しています。(全19点) ご来館の際にはぜひごらん下さい。

<2>

2004年生まれの標識鳥

33P～46Pまでの14羽

環境省の委託を受けタンチョウ基本調査グループが毎年実施しているタンチョウへの標識装着を今年にも行われました。1998年に寿命などの基礎的な生態学的情報を目的として始められ今年で17年目になりました。

飛翔前のひなの時に捕まえ左足にカラーバンド、右足に全翼バンドの標識がつけられ、そのことによって実にいるいろいろなことがわかってきています。

このうち北方領土からの飛来もふくめて、移動の様子や給餌場の利用、毎年同じ繁殖場所を利用すること、実際に繁殖を始める年齢など次第にわかってきています。冬期間、給餌場によってきますと多くの確認が容易になります。

現在、阿寒の給餌場では、T55、15V、83V、40Pのタンチョウが見られます。

タンチョウ基本調査グループの事務局を置く阿寒国際ツルセンターでは、皆さんから標識鳥の情報をお待ちしています。また、タンチョウについて疑問、質問がありましたらお問い合わせください。

標識鳥の年齢早分かり

T01～T02	1988年生	17才	46V～63V	1989年生	6才
T03～T08	1989年生	16才	64V～77V	2000年生	5才
T09～T18	1990年生	15才	78V～94V	2001年生	4才
T19～T34	1991年生	14才	95V～99V		
T35～T49	1992年生	13才	01P～15P	2002年生	3才
T50～T59	1993年生	12才	16P～32P	2003年生	2才
T60～T74	1994年生	11才	33P～46P	2004年生	1才
T75～T93	1995年生	10才			
T94～T99			*T81	1996年生	
01V～14V	1996年生	9才	*T90	1995年生	
15V～26V	1997年生	8才			
27V～44V	1998年生	7才			
45V	(保護鳥年齢不詳)				

ウグイの給餌

阿寒の里の給餌場では例年生きている魚(ウグイ)を与えています。今年も12月上旬から毎日午後2時に与えます。このウグイをねらってまたオジロワシの姿が見られることでしょう。

<3>

タンチョウ鶴愛護会からのお知らせ

皆様のご応募をお待ちしています

2004 タンチョウ・イラスト展 作品募集のお知らせ

阿寒町タンチョウ鶴愛護会では、今年度も大人も子どもも参加できるタンチョウイラスト展をおこないます。あなたの作品を送って下さい。
* 学校・幼稚園・職場など団体での参加もお待ちしております。まとめてお届けください。

会員皆様からのご応募もお待ちしています。奮ってご応募下さい。お待ちしております。

<<作品の応募にあたって>>

1. テーマ タンチョウを描いた絵(版画・切り絵も可)
2. 作品の大きさ ハガキまたはハガキ大の紙
3. 応募数 一人1点とします
作品の裏に住所・氏名・年齢(学校名・学年)を明記してください
4. 応募期間 平成16年11月20日～12月25日
5. 応募先 阿寒町タンチョウ鶴愛護会
〒085-0245 阿寒町23線40番地 阿寒国際ツルセンター内
(お問い合わせは、電話(0154)66-4011 Fax(0154)66-4022まで)
6. その他 *作品は郵送・またはご持参ください。
*作品の審査はしません。
*作品は展示終了後返却いたします。

*平成16年12月30日より2月末日まで
阿寒国際ツルセンターにて全作品を展示します。

<4>

2005年 第8回

丹頂の里・鶴クイズ

<<問題>>

平成17年1月1日、午後1時に阿寒丹頂の里で確認されるタンチョウの数は何羽でしょうか？

<<応募方法>>

答えの他に、住所・氏名・年齢・職業（学年）・電話番号を明記してハガキまたはFaxでお送り下さい。
* ツルセンター・観察センター内に応募箱を設置しています。来館の折りにもご応募下さい。

<<応募先>>

〒085-0245 阿寒町23線40番地
阿寒国際ツルセンター内
阿寒町タンチョウ鶴愛護会
* Faxの方は(0154)66-4022まで

<<当選発表>>

平成17年1月6日(木)
当選者には直接お知らせ致します。
またツルセンターと観察センターに当選者名を掲示致します。

<<賞品>>

飛翔賞 1名様(2万円相当賞品)
賛歌賞 3名様(1万円相当賞品)
乱舞賞 8名様(6千円相当賞品)
楽園賞 30名様(1千円相当賞品)
* 正解者複数の場合は抽選で決定します。正解者がいない場合は正解に一番近い(新録)方とします。この場合も複数の時は抽選で決定します。

過去5年間の正解数は

2000年(H12) 78羽
2001年(H13) 183羽
2002年(H14) 161羽
2003年(H15) 247羽
2004年(H16) 133羽

家族でチャレンジしてみてください!

<<開館時間のお知らせ>>

- ・タンチョウ観察センター(分館)
9:00-16:00(11月~1月) 9:00-16:30(2月~3月)
- ・阿寒国際ツルセンター
9:00-17:00
* 11月~3月まで毎日開館しています(年末年始無休)。
* ぜひお出かけ下さい。

<5>

タンチョウ飛来地立入禁止

古い看板を新しくして設置しました。

阿寒の里地域で多くのタンチョウが越冬します。タンチョウが安全かつ安心して越冬できるように「立ち入り禁止区域」には、立ち入らないことが原則です。タンチョウをあたたく見守りましょう。

山口県 鹿兒島県からのツル情報

<阿寒国際ツルセンターに入っている情報をお知らせします>

山口県八代から ナベツル

渡来日 10月27日 AM7:05 成鳥2羽 幼鳥2羽
10月28日 PM3:48 成鳥2羽 幼鳥1羽
11月1日 AM8:34 成鳥2羽 幼鳥1羽
11月19日 AM6:46 成鳥1羽 合計11羽

案内・注意 * 渡来当初のツルは非常に警戒心が強いため取材、監査等には細心の注意を払ってください。
* 撮影は野鳥監視所より撮影になります。
* 写真等の資料については鶴いこの里より提供します。

〒745-0501

山口県周南市大字八代237番地の3
周南市鶴いこの里センター
TEL 0833-92-0008 fax 0833-92-0042
ツル情報 TEL 0833-92-0031 [初渡来以降随時更新]
http://www.city.shunan.yamaguchi.jp/hb/turu/
E-mail km-yashi-shi@city.shunan.yamaguchi.jp
〒745-0501
山口県周南市大字八代237番地の3
野鳥監視所
TEL 0833-91-5537

鹿兒島県出水市から

11月13日の調査結果から
ナベツル 8860羽 マナヅル 224羽 クロヅル 2羽
カナダヅル 3羽 アネハヅル 1羽 ナベクロヅル 1羽
合計9,091羽

<内訳> 荒先8867羽 東千拓224羽>

平成16年11月13日
鹿兒島県ツル保護会事務局(出水市ツル博物館内)
電話 0996-63-8915
FAX 0996-62-8915

<6>

あなただけの鶴日記

□熊本から来ました。北海道は寒い！ツルはじめてみた。もっと近くで見えたかった。 11/5 せいせき 9755

□余市から来ました。ツルをはじめてみました。こんなにきれいなんだもと思えました。 11/16 せいせき

□6日の夜中から出発して札幌からやってきました。6時間ほどかかりました。ツルを見て本当に良かったです。2月にもこれら来たい。 11/7 せいせき 9757

□東京から社員旅行で来ました。今度は彼女と一緒に来たいです。 11/8 せいせき 9758

□大阪から来ました。丹頂の群れに向かって、クワッってしたいですね。いつまでもこのままで。しかし大阪と違って風を渡る建物がなく、さびい。 11/17 せいせき

□新婚旅行で北海道へ来ました。今日ここにきて本当に良かったです。丹頂ツルのような夫婦になりたいです。 11/10 せいせき

□心に傷を持った長男と妻と3名で来ました。丹頂の姿に、子供の心が癒されますように願いつつこれからの旅行を続けます。 11/13 せいせき 9762

□偶然ですが私も千歳産鳥孫子市からやってきました。タンチョウツルに逢いに来ました。優雅な姿とたくましい生

□沖縄の佐敷町の皆さん+知念さんときました。稚内~4日間旅行で今日は釧路の空港でお別れで最後にツルを見に来ました。また一つ思い出が増えたらいいなあ。無事帰れるように祈っています。 せいせき 本当に私も楽しかったです。4日間ありがとうございました。 11/14 せいせき

□丹頂鶴に感動しました。 11/14 せいせき

□日和よく 丹頂もよく 歳もよく 11/14 せいせき 9763

□感動しました。すごかったよかったです。双眼鏡で鶴を見たら子どもは茶色でした。はじめてみたのですごかったです。 11/14 せいせき

□函館より来館。ツルをもっと真近で見たいです。来年も来たいな。 11/17

□朝7時50分の飛行機で神奈川から来ました。月曜日は有給とって4連休。自然ってイナ。人間も素直になるの必要だね。心がきれいになれる。今度はまたツルを見に来ます。雪の降る時期愛に好きな人ときたいな。 11/20 せいせき

□群馬から9人で来ました。つるの数に人数が負けました。 11/20

□昔は子供を連れて今は孫たちを連れて3回目になります。いつも感動します。 11/20 せいせき 9764

□北海道蜜月旅行 丹頂鶴公園 留念。 11/21 せいせき 9765

釧路空港⇄丹頂の里

バス利用の皆さんへ

平成16年11月1日改正

阿寒線

釧路駅前⇄釧路空港⇄鶴公園⇄阿寒町⇄丹頂の里⇄阿寒湖畔

路線番号	30	30	30	30	路線番号	30	30	30	30
釧路駅前	7:20	11:10	14:55	17:25	阿寒湖畔	7:35	10:20	15:00	17:20
大衆毛駅前	7:51	11:41	15:26	17:56	丹頂の里	8:17	11:00	15:40	18:00
釧路空港	8:00	11:50	15:35	18:05	阿寒町	8:22	11:05	15:45	18:05
鶴公園	8:08	11:58	15:43	18:13	鶴公園	8:35	11:17	15:57	18:17
阿寒町	8:22	12:12	15:57	18:27	釧路空港	8:42	11:24	16:04	18:24
丹頂の里	8:27	12:17	16:02	18:32	大衆毛駅前	8:56	11:40	16:20	18:40
阿寒湖畔	9:20	13:10	16:55	19:25	釧路駅前	9:40	12:20	17:00	19:20
便名	101	103	107	109	便名	102	104	108	110

阿寒湖・釧路空港 シャトルバス

阿寒湖⇄釧路空港

運行時刻は飛行機時刻により変更となりますのでご確認ください。

阿寒バス株式会社

TEL 0154-37-2221

会費納入御礼

ありがとうございました

16.7.28-11.20 翌

島田 寛 様 1口(阿寒町)

荒木千枝子 様 1口(阿寒町)

*矢田 重吉 様 1口(横浜市)

塩田 和夫 様 16-20歳 1口(東京都)

山崎 定義 様 1口(阿寒町)

(*新会員です。よろしくお願ひいたします。)

◇未納の方々へ：年度内に納入下さいますようよろしくご協力下さい。

あ・と・が・き

・暑かった夏、温暖の秋、11月下旬も例年より高めの気温が続いています。

今冬はどんな冬になるのかな？

厳冬？ 暖冬？ 大雪？ 気がかりな初冬の今日この頃です。

・他府県からの来館者はすっかり冬支度です。午後3時半、もう日没です。早い日没に驚いています。4時を過ぎるとタンチョウたちはねぐらへと帰ります。

・日増しに寒さが加わります。冬をより健康に！会員皆様のご自愛を祈ります。

(編)

<8>

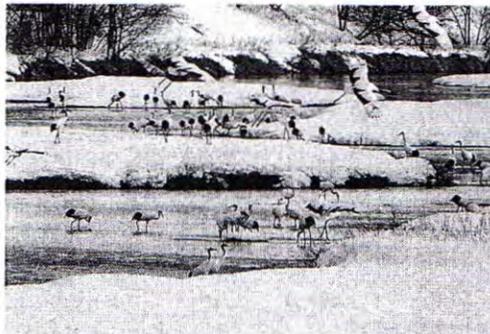
会 員 名

(敬称略) 17年8月末現在

阿寒ライオンズクラブ (阿寒町)	関根 陽子 (白糠町)	秋場 久治 (大田区)	橋本 貴子 (阿寒町)
株式会社松屋 (阿寒町)	藤次 禎広 (阿寒町)	濱谷 恭子 (取手市)	山崎 定作 (阿寒町)
ヤマシタ工業株式会社 (阿寒町)	伊藤 智 (阿寒町)	福田 晋治 (柏原市)	金子 信治 (阿寒町)
北泉開発株式会社 (阿寒町)	新川 篤 (阿寒町)	中地 茂 (高槻市)	今村美智子 (阿寒町)
阿寒共立土建株式会社 (釧路市)	小池 智如 (阿寒町)	猪原 昌彦 (川崎市)	佐藤 照雄 (阿寒町)
村井建設株式会社 (釧路市)	大島 桂子 (釧路市)	速水 博 (羽島市)	荒木千枝子 (阿寒町)
株式会社佐藤組 (阿寒町)	中山 三雄 (阿寒町)	大野 義行 (京都市)	村井 廣彦 (阿寒町)
株式会社マルカツ (阿寒町)	宮本 稔 (阿寒町)	山田 兼司 (大宮市)	小林 靖之 (阿寒町)
株式会社小野寺組 (阿寒町)	鈴木 和裕 (阿寒町)	万字 嘉弘 (犬山市)	稲場 志江 (阿寒町)
阿寒町校長会 (阿寒町)	西村 毅 (釧路市)	生田 眞朗 (神戸市)	北村 剛 (阿寒町)
阿寒町教頭会 (阿寒町)	北村 康春 (釧路市)	金子紀美子 (大阪市)	山下 昭彦 (阿寒町)
	佐藤 清彦 (恵庭市)	須賀嘉和作 (上尾市)	藤村 力 (阿寒町)
	松実 寛 (釧路市)	塩田 和夫 (品川区)	鶴田眞知子 (阿寒町)
	大西美和子 (厚真町)	原島寿恵治 (府中市)	小林 正昭 (阿寒町)
	若狭 靖 (厚岸町)	佐藤 匡志 (桑名市)	大西 由恵 (阿寒町)
	桜井 幸次 (釧路市)	桑岡 茂雄 (稲沢市)	大山 昇 (阿寒町)
	松井 修務 (紋別市)	石幡 彰 (江戸川区)	藤嶋 憲雄 (阿寒町)
	青山 良一 (釧路市)	安岡 健雄 (小金井市)	加地 政富 (阿寒町)
	若狭 純子 (厚岸町)	羽倉 佳代 (出雲市)	佐々木三男 (阿寒町)
	橋本 雅子 (旭川市)	片野 明宏 (足立区)	水野 晃 (阿寒町)
	高橋 弘子 (由仁町)	井部 祐子 (板橋区)	小北 瀧雄 (阿寒町)
	小松 千恵 (旭川市)	宇都 光孝 (岩槻市)	石岡 国義 (阿寒町)
	矢田 重吉 (横浜市)	横田 久 (横浜市)	山崎 定義 (阿寒町)
	名児耶 宏 (北見市)	梅原ミヨ子 (渋谷区)	松永るみ子 (阿寒町)
	菅波 博光 (高萩市)	工藤 正喜 (山形県)	福澤 慶明 (目黒区)
	内山七三雄 (歌志内市)	一木あずさ (松本市)	小島 司郎 (名古屋市)
	道辻文太郎 (阿寒町)	宇山 豊春 (平塚市)	小島 和子 (名古屋市)
	島田 覚 (阿寒町)	立石 浩道 (船橋市)	平戸 登 (福山市)
	山内 敏夫 (札幌市)	片山嘉壽子 (名古屋市)	瀧 昭 (北茨城市)
	堀川 栄一 (札幌市)	齊藤トシエ (札幌市)	吉岡 晶子 (目黒区)
	久保 千尋 (厚岸町)	大宮美千子 (仙台市)	金山 泰明 (阿寒町)
	河野 平 (静岡県)	村松 竜子 (甲府市)	宮澤 香 (川崎市)
	向井 克志 (志木市)	清水 徳江 (日野市)	佐久間あかね (苫小牧市)
	佐々木彰和 (杉並区)	内沖 茂樹 (瀬戸市)	上原 朗 (阿寒町)
	工藤 広美 (台東区)	畠山 宜子 (朝霞市)	柴田 雅男 (阿寒町)
	辛島 智恵 (瀬戸市)	佐藤 公 (松阪市)	中村 有来 (中標津町)
	辛島 貞子 (瀬戸市)	金子 賢治 (横浜市)	山口 隆 (釧路市)
	永野 正樹 (狛江市)	平野 敦 (京都市)	中条 裕子 (福岡市)
	間庭あゆみ (板橋区)	佐藤 眞理 (千葉市)	林 欣司 (豊橋市)
	武田 好永 (中野区)	上見 政司 (奈良県広陵町)	曾根 瑞穂 (三島市)
	奥山 勝男 (阿寒町)	山瀬 一史 (釧路市)	竹本 和彦 (阿寒町)
	渡辺 紀子 (洞爺村)	二村ゆうき (中野区)	海田 昌孝 (三木市)
	大石 哲久 (阿寒町)	松本 実 (東大和市)	古山 誠 (練馬区)
	八幡 由美 (練馬区)	金 性洙 (韓国)	朴 喜千 (韓国)
	安藤 弘子 (阿寒町)		
山崎 一彦 (阿寒町)			
松永 征明 (阿寒町)			
山下 和憲 (阿寒町)			
木村 邦雄 (阿寒町)			
田西 一郎 (浦幌町)			
岩橋 尊和 (阿寒町)			
吉田 守人 (阿寒町)			
堀内 英司 (釧路市)			
栗野 二郎 (阿寒町)			
中村 時彦 (阿寒町)			
平間 学 (阿寒町)			
藤次 教夫 (阿寒町)			
清水 勇二 (阿寒町)			
福浦 拓也 (阿寒町)			
伊藤 博通 (釧路町)			
藤田 進 (大阪池田市)			
本吉 俊久 (阿寒町)			
斉藤 和幸 (大田区)			
斉藤 聡子 (大田区)			
上原 花子 (練馬区)			
河野スイ子 (福島県)			

資
料
編

厳寒期、鶴居村
雪裡川を埋める
タンチョウ



タンチョウ生息数調査で1003羽確認

繁殖地 湿地の保全必須

かなった! 「千羽鶴」

タンチョウ保護調査連合(正富宏代表)は9日、今年1月に阿寒町や鶴居村、音別町などで行ったタンチョウ生息数調査で1003羽を確認、「千羽鶴」の舞台に達したことを発表した。タンチョウは19世紀末に道央から消息が絶え、1920年代に釧路湿地で発見されるまでは絶滅視されていた。一方で生息数拡大と相反し、繁殖地である湿地の縮小や周辺環境の悪化が問題となっており、同連合では「保護策には環境、社会科

学も含めた新たな展開が必要」と訴えている。

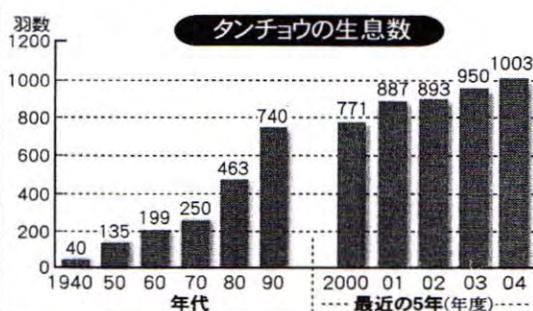
1952年されたのはわずか33羽だに全道で確認したが、50年代後半から

1952年されたのはわずか33羽だに全道で確認したが、50年代後半から

今年度の調査は1月21日から24日まで、阿寒町や鶴居村、音別町の主な給餌場を中心に行い、3月算出。同連合では、今年1月に確認した幼鳥数が

初は(85)は「最も増やすだけでなく、周辺の自然、人間社会とのかわりを、地域ぐるみで考える新たな展開が必要」と話している。

タンチョウ保護調査連合調べ 北海道の野生タンチョウ個体		
年度	総数	幼鳥
1985	339	42
1986	383	44
1987	421	45
1988	390	38
1989	416	44
1990	463	38
1991	453	58
1992	505	74
1993	522	54
1994	569	52
1995	-	-
1996	600	55
1997	619	59
1998	615	74
1999	706	103
2000	771	92
2001	887	119
2002	898	122
2003	950	104
2004	1003	123



これまでも「かきもあつた、うれしいね」と千羽鶴実現の朗報を喜ぶ。

一方、生息数拡大と相反し近年、タンチョウの主な繁殖地である釧路湿地や周辺の環境悪化進んでいるために、人の生活環境近くまで繁殖地が拡大し、電線や道路などで衝突事故や農薬による死亡事故が発生するなど問題が生じている。

同連合の古賀公也事務局長は「今後のタンチョウ保護事業には生息数を増やすだけでなく、周辺の自然、人間社会とのかわりを、地域ぐるみで考える新たな展開が必要」と話している。

*1985年度より調査開始

2002-2003年度の調査データについては論文印刷中

2004年度の調査データは未発表(2005年5月現在)

タンチョウ生息状況一斉調査結果の推移表

回	年 度	平均気温		観 察 数				調 査 日
		11 月	12月(上)	成 鳥	幼 鳥	不 明	合 計	
1	昭和27	①					33羽	S 27.12.29
2	28	①					42羽	S 28.12.4
3	29	①					52羽	S 29.12.3
4	30	①					61羽	S 30.12.3
5	31	①					76羽	S 31.12.3
6	32	①					92羽	S 32.12.5
7	33	①					125羽	S 33.12.5
8	34	①					139羽	S 34.12.8
9	35	①					172羽	S 35.12.13
10	36	①					175羽	S 36.12.5
11	37	①		164羽	20羽		184羽	S 37.12.5
12	38	①	4.8℃	1.6℃	128羽	19羽	147羽	S 38.12.12
13	39	①	3.4℃	-0.2℃	137羽	17羽	154羽	S 39.12.5
14	40	①	3.6℃	-1.1℃	148羽	24羽	172羽	S 40.12.4
15	41	①	4.8℃	-1.8℃	144羽	26羽	170羽	S 41.12.5
16	42	①	1.5℃	0.8℃	176羽	24羽	200羽	S 42.12.5
17	43	①	5.3℃	-0.3℃	147羽	24羽	171羽	S 43.12.5
18	44	①	3.6℃	-0.5℃	188羽	24羽	212羽	S 44.12.5
19	45	①	4.5℃	-1.5℃	146羽	33羽	179羽	S 45.12.5
20	46	①	3.7℃	-1.3℃	129羽	18羽	147羽	S 46.12.4
21	47	①	3.2℃	-2.9℃	195羽	27羽	222羽	S 47.12.5
22	48	①	3.9℃	-0.3℃	204羽	29羽	233羽	S 48.12.5
23	49	①	2.7℃	-4.0℃	221羽	32羽	253羽	S 49.12.5
24	50	①	5.0℃	-0.8℃	180羽	14羽	194羽	S 50.12.6
25	51	①	2.7℃	0.2℃	180羽	40羽	220羽	S 51.12.6
26	52	①	4.7℃	-0.9℃	229羽	28羽	257羽	S 52.12.5
27	53	①	3.0℃	0.6℃	195羽	19羽	214羽	S 53.12.5
28	54	①	3.9℃	1.8℃	235羽	36羽	271羽	S 54.12.5
29	55	①	4.5℃	1.0℃	229羽	38羽	267羽	S 55.12.5
30	56	①	1.9℃	-2.5℃	267羽	28羽	295羽	S 56.12.5
31	57	①	4.6℃	2.0℃	285羽	35羽	320羽	S 57.12.4
32	58	①	3.7℃	-1.0℃	312羽	33羽	345羽	S 58.12.5
33	59	①	2.7℃	0.9℃	294羽	33羽	327羽	S 59.12.5
34	60	①	3.8℃	-0.6℃	352羽	32羽	384羽	S 60.12.5
35	61	①	3.1℃	-0.7℃	344羽	39羽	383羽	S 61.12.5
36	62	①	3.1℃	-1.0℃	381羽	43羽	424羽	S 62.12.5
37	63	①	2.8℃	2.5℃	432羽	53羽	485羽	S 63.12.5
38	平成元	①	5.5℃	1.7℃	330羽	26羽	356羽	H 1.12.5
		②	-	-	401羽	40羽	441羽	H 2.1.26
39	2	①	6.4℃	5.5℃	309羽	36羽	345羽	H 2.12.5
		②	-	-	438羽	61羽	499羽	H 3.1.25
40	3	①	4.5℃	1.2℃	357羽	64羽	421羽	H 3.12.5
		②	-	-	480羽	77羽	557羽	H 4.1.24
41	4	①	4.4℃	1.0℃	453羽	54羽	507羽	H 4.12.5
		②	-	-	544羽	67羽	611羽	H 5.1.25
42	5	①	4.7℃	0.2℃	375羽	41羽	416羽	H 5.12.6
		②	-	-	566羽	62羽	628羽	H 6.1.25
43	6	①	4.5℃	2.3℃	390羽	43羽	433羽	H 6.12.5
		②	-	-	547羽	60羽	607羽	H 7.1.25
44	7	①	5.6℃	1.6℃	414羽	42羽	456羽	H 7.12.5
		②	-	-	533羽	65羽	598羽	H 8.1.25
45	8	①	3.8℃	0.1℃	437羽	39羽	476羽	H 8.12.5
		②	-	-	538羽	48羽	586羽	H 9.1.24
46	9	①	6.0℃	0.2℃	514羽	65羽	579羽	H 9.12.5
		②	-	-	503羽	55羽	558羽	H 10.1.26
47	10	①	3.6℃	-3.1℃	519羽	77羽	596羽	H 10.12.4
		②	-	-	609羽	100羽	709羽	H 11.1.25
48	11	①	5.6℃	-1.0℃	420羽	51羽	471羽	H 11.12.6
		②	-	-	457羽	53羽	510羽	H 12.1.25
49	12	①	3.0℃	-2.3℃	542羽	71羽	613羽	H 12.12.5
		②	-	-	708羽	79羽	787羽	H 13.1.25
50	13	①	5.5℃	-4.6℃	571羽	77羽	648羽	H 13.12.5
		②	-	-	725羽	82羽	807羽	H 14.1.25
51	14	①	3.4℃	-1.4℃	577羽	79羽	656羽	H 14.12.6
		②	-	-	783羽	115羽	898羽	H 15.1.27
52	15	①	4.9℃	-2.3℃	574羽	67羽	641羽	H 15.12.5
		②	-	-	732羽	90羽	822羽	H 16.1.23
53	16	①	6.1℃	1.2℃	786羽	70羽	856羽	H 16.12.13
		②	-	-	581羽	68羽	649羽	H 17.1.25

〈北海道釧路支庁発表〉



阿寒町長
大野直栄

郷土の民芸として育てよう
このたび「タンチョウ鶴音頭」が両先生のお陰で完成しました。
この音頭がぜひ、町民皆さんの郷土の御協力で広めていただき、当町はもとより北海道の代表的民芸として育て、いただきたい。



阿寒タンチョウ鶴
愛護会長
吉田勝美

ツル音頭で幸福を招きましよう
「丹頂鶴は印の本、祝いの瑞鳥、たくさん幸福を呼んでくる」この音頭により我が日本がそして郷土がより豊かに、より和やかなまとまりのある町になることを願いました。



阿寒町教育長
佐藤八夫

物心両面の貴重な教材として
タンチョウ鶴のように気品を備えた美しさマリモのようにまろやかな永遠の若さを、さらに、タンチョウ鶴音頭の完成とともにこの音頭を教育のこころに生かし物心両面の貴重な教材としたい。



作詞者
藤田久

人間と鳥との交歓、無言の愛情、自然との調和、たちょうこの美しさ、このやさしさを何とか芸術作品にまとめそのよろこびを世に分ちたいと念願して、私は想を練り上げました。できることなら、全国各地の種々の行事に採用されるまで成長することを祈って



作曲者
飯田三郎

この「丹頂鶴音頭」は新民謡として全国的に愛唱されるものをとの意気込みでの快心作であり、現代の若い人たちにも理解出来るリズム感と同時に北海道先住アイヌ民族の調べも取り容れるよう考慮しました。



振付者
花柳徳保

踊りの振付けに入る前と大体出来た頃とに関係者の意見を十分に述べ合い多少の変更を認めてというお約束通り振付作業が進められました。
私自身の勉強としては阿寒町の山崎さんのお二階で特別に鶴の群れの観察の便を与えられました。又丹頂鶴自然公園の高橋さんに鶴の舞う秘伝の伝授を願ったり鶴の特別演技を鑑賞の機をお恵みいただき、決定版を構成しました。

特別天然記念物愛護運動
強化の民族芸能誕生！

「丹頂鶴音頭」の

普及に一役を

北海道社会教育委員

丹葉節郎

たちょう自体が拘束されず自由意志で安住の適地と信頼し永久に棲みついたのが阿寒国立公園まりも国道沿いの阿寒町である。農家山崎定次郎さんの畑に次々と天女のごとく舞い下りて最高九十羽の一大群舞、一方釧路市の丹頂鶴自然公園では管理人、高橋良治さんの合図で気高い丹頂の舞。鶴居村の分教場ではオルガンの音につれて名バレリーナーにも似た鶴の踊り、釧路地方はまさにたちょうのパラダイスであり仙境の感あり、時、関係者にその人を得久しく待望の丹頂鶴音頭ここに芽出度く誕生！特別天然記念物として世界的に貴重価値の丹頂鶴の愛護運動強化の民族芸能丹頂鶴音頭なら、その普及にわれも一役のり出そう
できることなら二役を

さらに三役を

(一九六七・三・五)

昭和42年3月 制定
昭和60年3月 踊り方(その2)に改める

丹頂鶴音頭

振付
花柳徳保

踊り方(その2) — 昭和六十年三月



⑦ 右足出し、左上向に左上にあげ、右手は伏せて右下へ伸ばす



⑧ 左足出し、右上向に右上にあげ、左手は伏せて左下へ伸ばす
⑦⑧をくり返す



⑨ 右足出し、両手伏せ前へ伸ばす
身体の向きはななめ左向き



⑩ 左足出し、手は伏せたまま左下へながす



⑪ ⑨のように右足出し両手前におくる
次は、左足から身体右向きで⑨⑩⑪とくり返す



⑫ 両手ふせ、ひしから折って顔横に上げ、右足を出す



⑬ 左足出し、両手横に伏せて伸ばす



⑭ 右足を左足に揃えチョヨンがチョヨンと打つ



① 足をそろえて立ち、手はチョヨンがチョヨンと三回うつ



② 右足前に出し、両手平上向にしてななめ上に上げる(鶴がさつと羽根をひろげた感じで)



③ 左足出し、両手ふせ、手先を重ね前にはさす
(鶴の口ばしの感じで) ↓



④ 両足そろえ①の様にチョンチョンと手を打つもう一度
②③④をくり返す



⑤ 右足出し、右手伏せ右横に伸ばし、左手伏せひじより折って胸前に



⑥ 左足出し、左手左横に伸ばし、右手ひじより折って胸前に
⑤⑥をくり返す

◇◇◆◇◇◆◇◇ 丹頂鶴音頭 ◇◇◆◇◇◆◇◇

丹頂鶴音頭 作詩 藤田 久
作曲 飯田 三郎

Moderato (全4)

ホロロンホロロン イヤココ ホロロンホロロン
イヤココ
ホロロンホロロン イヤココ
① つまは 日のしんて いはいのめが
あいに こたんて つもりのめが
ふれ こくさんい しあかんてに
よんぞい かつ かくさんい
しあかんてに よんぞい かん
ホロロンホロロン イヤココ ホロロンホロロン
イヤココ イヤココ

阿寒町タンチヨウ鶴愛護会制定
丹頂鶴音頭

作詩 藤田 久
作曲 飯田 三郎
振付 花柳 徳保
歌 佐々木 新一
キン グオーケストラ
キン グ合唱団
下谷 二三子

一、
ハアアア
ホロロン ホロロン イヤココ
ホロロン ホロロン イヤココ
丹頂鶴は日の本 祝いの瑞鳥
たくさん幸福わせ 呼んでくる
ソレ
たくさん幸福わせ 呼んでくる

二、
ハアアア
愛にこたえて 丹頂鶴の群
ここに阿寒に 棲みついた
ソレ
ここに阿寒に 棲みついた

三、
ハアアア
朝日照る照る 雪の原
目出たい羽衣 舞いおりる
ソレ
目出たい羽衣 舞いおりる

四、
ハアアア
静かに集う 丹頂鶴
雪より白く 清らかに
ソレ
雪より白く 清らかに

五、
ハアアア
湖 近く 里ちかく
すがた美しく 鶴の舞
ソレ
すがた美しく 鶴の舞

三、
ハアアア
ホロロン ホロロン イヤココ
ホロロン ホロロン イヤココ
ソラ イヤココ
ソラ イヤココ

阿寒町タンチヨウ鶴愛護会

タンチョウ

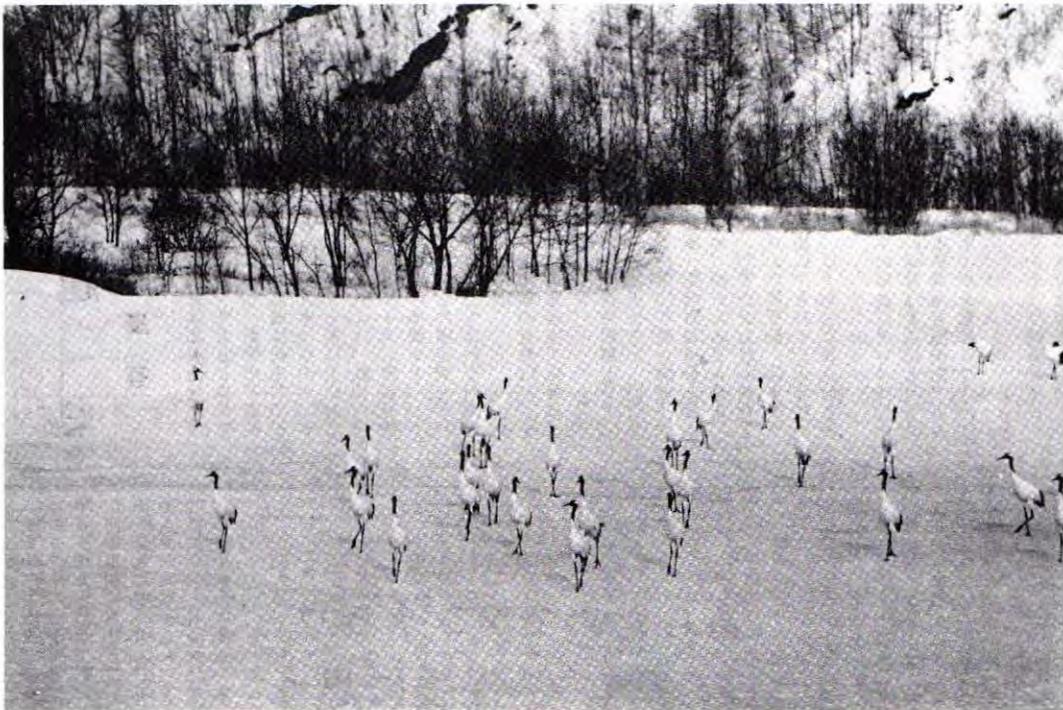
1982.12.10 第1号

タンチョウ保護情報

編集発行

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

北海道阿寒町中央町



発刊にあたって



会長

吉田勝美

当愛護会は昭和四十年に設立以来、タンチョウの唯一の愛護団体として給餌活動に保護思想の啓発活動に地道ながら努力を重ねてまいりました。わが町に飛来するタンチョウも設立当時からみると飛躍的に伸び、多い時で生息数の半数にもなったことは、愛護活動のあらわれと自負しているところであります。

また、私どもの運動の一環として実を結んだタンチョウ観察センターは、タンチョウのためにも訪れる人たちのためにも保護の拠点として期待にこたえることができたことは喜びにたえません。

今年はまだ、愛護会にとって喜びの年でもありません。それは北海道文化財保護功労団体としての受賞であり、そしてタンチョウ保護三十周年記念の保護団体受賞であります。長い間の保護活動が評価されたことに喜びを感じると共に、これまで以上に強い保護活動が求められている今日、より一層の努力を覚悟した次第であります。

愛護会では、これまで積み重ねてきた活動の輪を町内のみならず全国に広げ、賛助会員を募って大きな保護活動を進めることにし、昨年からの募集を開始しています。その結果、遠くは九州からの入会もあるなど予想以上の反響で、タンチョウ保護に関心を寄せている人の多いことに驚くとともに、多くの賛同者に心からお礼を申し上げます。このたび、これらの協力者にタンチョウ保護に関する情報をお届けするため会報を発行する運びになりました。この会報は、タンチョウの情報提供紙として、また、タンチョウを愛する人たちの交流の場として意義ある編集をする所存であります。今後ともタンチョウ保護に協力をいただくとともに、この会報をおしてご意見をお寄せくだされば幸いです。

**タンチョウ保護に
あなたの力をおかしてください**

賛助会員におさそい

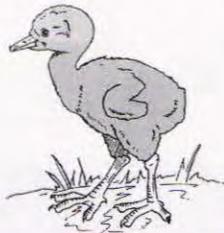


(タンチョウの生息状況一斉調査)

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
(事務局) 阿寒町中央町
 阿寒町民センター内
 TEL.0154)66-3663

阿寒国際ツルセンター

Cranes



1996.4.25. OPEN!

Akan
International
Crane Center



鶴の声……
永遠に続け 阿寒町

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 事務局 阿寒町教育委員会内
 TEL 阿寒2番/168番

**すばらしき
タンチョウ**
～生きる～



阿寒町タンチョウ鶴愛護会
阿寒国際ツルセンター

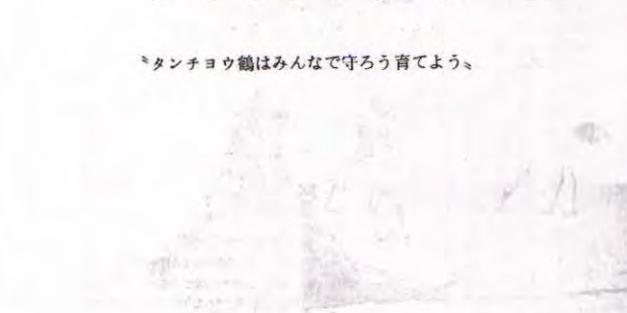
タンチョウの里



タンチョウ観察センター

日本のタンチョウ

♪タンチョウ鶴はみんなで守ろう育てよう♪



阿寒町タンチョウ鶴愛護会
 事務局 阿寒町教育委員会内
 TEL (阿寒局) 2 番

スケルトンクイズ

<もんだい>

世界には15種類のツルがいます。
日本で、タンチョウといえば北海道の
東部（釧路・根室・十勝・網走管内）
は有名です。

さて、ツル15種類のスケルトンクイズ
です。完成後、A～Jの文字を順につなぐ
と道東の2つのマチの名前ができます。



オグロヅル

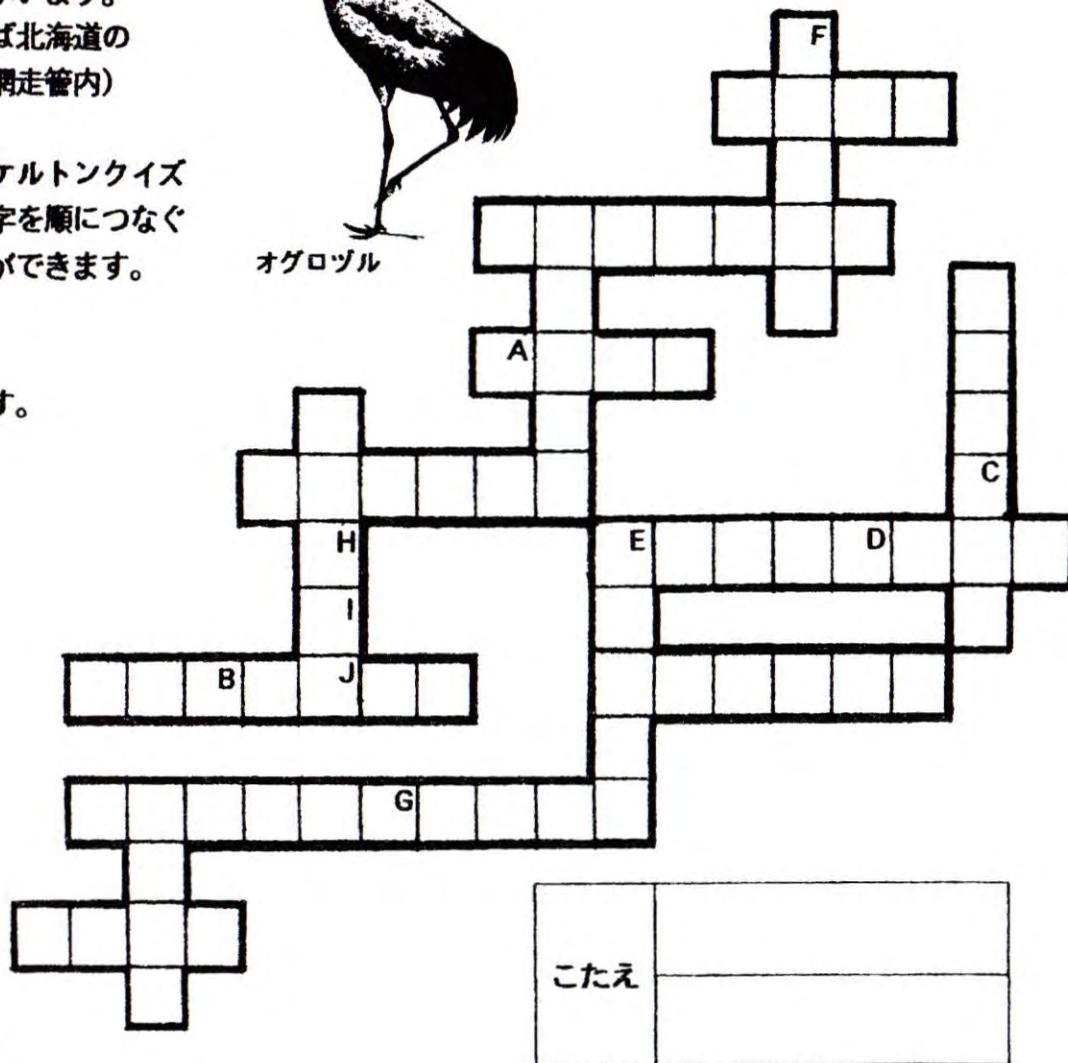
- ・クロヅル
- ・マナヅル
- ・ナベヅル
- ・オオヅル
- ・オグロヅル
- ・カナダヅル
- ・タンチョウ
- ・アネハヅル
- ・ソデグロヅル
- ・ハゴロモヅル
- ・カンムリヅル
- ・ホオカザリヅル
- ・ゴウシュウヅル
- ・アメリカシロヅル
- ・ホオジロカンムリヅル

<やくそく>

ツル15種類全部を使います。
2度は使えません。



タンチョウ



こたえ	

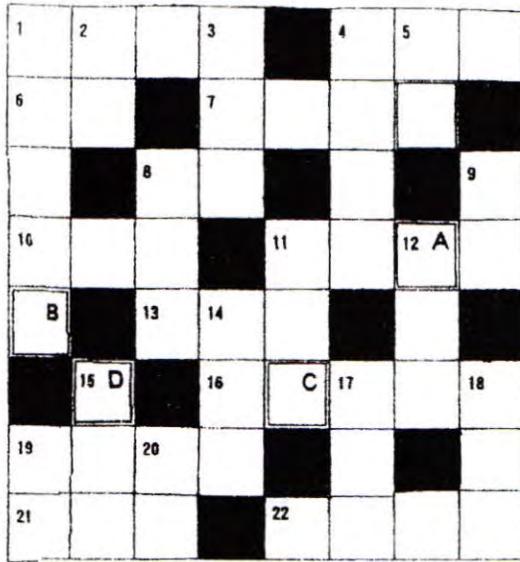
クロスワードパズル

タテとヨコのカギを解き、A～Eの5文字を順につなぐと答えがでます。

ヒント

今、世界中の国々がその取り組みにしんげんに立ち向かっています。

* 答 じゅうご面にあります。



タテのカギ

- 1 「歌謡曲」・白かば 青空、 ?。
- 2 歌のことば。
- 3 空気のように形も体積もない自由に流動する物体。?ー固体ー液体。
- 4 神や仏の前のかざりつけ。
- 5 とんぼの幼虫。
- 8 側面。?カー、?スロー、?ブレイキ蚊を防ぐためにつりさげるおおい。
- 9 国会 二院制。衆? と 参?
- 11 会社、官庁などの出張所。
- 14 床にはいらすにうとうととすること。
? 寝。
- 15 赤道から北極にいたる緯度。
- 17 近いところ。近所。
- 18 いちばん外がわに着る衣服。?下着
- 19 そら? 黒? ?つぶ ?まき。
- 20 昔話。おじいさんは山へ?かりに...
おばあさんは川へせんたくに...。



タンチョウ

ヨコのカギ

- 1 毎月の三日に出る月。細い月。
- 4 「童謡」お馬の ?は仲よしこよし...
だじゃれ。山があっても 山?奥。
- 7 竹で纏んだ物を入れる生活用品の一つ。
いまは、あまり見られなくなりました。
- 8 インド、アフリカにすむ巨大な草食獣。
鼻の上に角がある。
- 10 ヒラメ科の海魚。体は偏平で目は二つと
も右側にある。
- 11 オリンピック発祥の国。首都はアテネ。
うれしいーほそくなつて。胸まわりのこ
と。
- 16 特別天然記念物。北海道の東部で見られ
る大型の鳥で頭頂が赤い。
- 19 すももの階級で十両と三段目のあいだ。
名高い馬。すぐれた馬を言う。
- 21 カレーライスの食材の一つ。皮をむくと
き涙が出るんですって。
- 22

阿寒国際ツルセンター
阿寒町タンチョウ鶴愛護会

製作

タンチョウ Q&A

1

ツルセンターによせられたご質問の中から
そのいくつかにお答えします

Q. タンチョウは、シベリアから渡ってくるの？

A. 北海道にいるタンチョウは、渡りをしません。

一年中を北海道東部（根室・釧路・十勝・網走）で過ごします。

Q. タンチョウは今どこにいるの？

A. 春から夏のおわりまでは、道東（おもに根室・釧路・十勝）の湿原で、つがいに分かれて子育てをしています。秋からしだいに人里へ集まり、阿寒・鶴居の給餌場などで冬を越します。タンチョウ観察センターで野生のタンチョウが観察できるのは、11月から翌年の3月末までです。

Q. オス・メスはどうやって見分けるの？

A. 外見ではわかりません。

一番確実なのは「鳴き合い」で見分ける方法です。

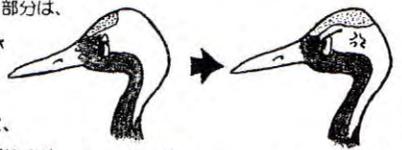
つがいになったタンチョウは、オス・メスが声を合わせて鳴く「鳴き合い」をします。「鳴き合い」では、オスが一声「コー」と鳴くと、それについで、メスがかん高い声で二声「カッ、カッ」と鳴きます。またこのとき、普通オスは、メスよりも翼を少し高く持ちあげます。



Q. 頭の赤い部分はどのようにになっているの？

A. タンチョウの頭の赤い部分は、皮膚です。赤い色は、血がすけてみえるためです。

怒ったり興奮したりすると、真っ赤になり、大きく広がります。《うたん》



《おんたとき》

Q. 北海道に野生のタンチョウは何羽いるの？

A. タンチョウ保護調査連合による調査では、2001年2月の野生タンチョウの総数は、771羽を記録しました。



Q. 給餌場ではどんなえさをあげているの？

A. 阿寒の給餌場では、毎朝タンチョウが現われる前にデントコーン（飼料用のトウモロコシ）を平均60kgほどまいています。

またそれだけでは栄養がたよるので、自然の餌が少なくなる12月中旬～3月中旬まで、午後2時に10kgのうぐいをまいています。



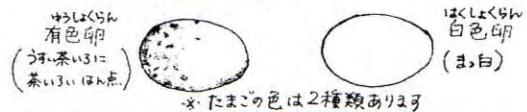
※ オゾロワシとウグイの取りあいに
なることもあります。

Q. 鳴き合いにはどんな働きがあるの？

A. ツルは、鳴き合いによって、つがいのきずなを確かめ合うといわれています。また自分のなわばりに入ってくるツルや、給餌場で近くにいるツルを追いはらうときも、鳴き合いをします。

Q. タンチョウの卵はどのくらいの大きさ？
いつ産むの？

A. 長さは10cm、幅は6cmくらいで、重さは200～230g（ニワトリの卵の約4倍）ほどあります。タンチョウは普通春先（3-4月）に2個の卵を産みます。



北海道阿寒郡阿寒町 23 線 40 番地

TEL (0154) 66-4011 FAX (0154) 66-4022

発行：阿寒国際ツルセンター

mail: aicc@poplar.ocn.ne.jp

2001.9.20 発行

タンチョウ Q&A

2

ツルセンターによせられたご質問の中から
そのいくつかにお答えします

Q. ツルのダンスはプロポーズ（求愛）なの？

A. タンチョウがなぜダンスをするのか、よくわかっていません。春になると、タンチョウはさかんにダンスをします。そのため求愛行動の一つと考えられています。しかしタンチョウは、季節に関係なく一年中ダンスをします。また1羽で踊ることもありますし、集団のときもあり。ダンスには求愛のほかにも何か役割があるようです。



Q. どのくらいでおとなになるの？

A. タンチョウの年齢は、人間と同じように生まれてから1年で1歳と数えます。だいたい3歳でおとなと同じ姿になり卵を産むことができますが、ふつうは野外で子育てに成功するようになる4-5歳を、おとなとみなしています。



Q. つがいになったら死ぬまで 相手を変えないというのは本当？

A. 親と別れてひとり立ちした子どものツルは、おとなになるまで若いツル同士で集まって過ごします。その間につがい相手を見つけますが、仲良くなってもやがて別れてしまうことがあります。しかし、一度産卵や子育てに成功したつがいは、どちらかが死ぬまで、相手を変えないといわれています。

Q どうして一本足で眠るの？

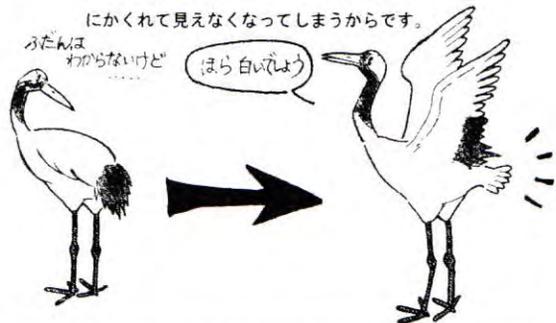
A. 実はツルだけでなく、多くの鳥の仲間は片足で立って眠ります。(あまり楽そうには見えませんが・・・) この姿勢で眠ると、外気のある体の部分を最小限にできるので、冬の厳しい寒さの中でも凍えることがないのです。

※冬は一日中マイナス気温!!
だから水の中の方があたたかいのです。



Q タンチョウの尾ばねは何色？

A. タンチョウの尾ばねは真っ白です。しかし翼を広げたときにしか見えません。翼をたたむと、翼の黒い羽(三列風切)といいますが、にかくれて見えなくなってしまうからです。



Q タンチョウは何を食べるの？

A. タンチョウは雑食です。季節によってとることができるエサは様々ですが、植物の根・芽・花・実、昆虫(トンボ・バッタ・アメンボウなど)、魚、カエル、タニシ、ザリガニなどを食べます。



〒085-0245 北海道阿寒郡阿寒町 23 線 40 番地

TEL (0154) 66-4011 FAX (0154) 66-4022

発行：阿寒国際ツルセンター

e-mail : aicc@poplar.ocn.ne.jp

ホームページ : http://www3.ocn.ne.jp/~aicc

2001.9.20 発行

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

会員を広く募集

☆ 阿寒町タンチョウ鶴愛護会の歴史

「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は、昭和40年に発足して以来長年にわたり保護活動の歩みが続けてきました。これまでに、タンチョウの給餌活動をはじめ飛来地やねぐらの監視活動、丹頂鶴音頭の普及、愛護発祥の碑の建立、ツルに関する資料の発行などタンチョウの保護や保護思想の啓発活動を幅広く行ってきました。おかげで今日、タンチョウの営巣地である湿地の環境が年々悪化する中で、この阿寒町には毎年、およそ300羽の群れが越冬する一大鶴の楽園となり、全国から訪れる多くの人々に優雅な舞を見せてくれています。

このように、タンチョウが飛び交う平和な郷土をこのまま次の世代に引継ぎ、人と鶴が共存できる環境を保全していく努力が今、私たちに求められています。

☆ 阿寒町タンチョウ鶴愛護会は

従来から行ってきたタンチョウの保護活動を発展させながら、更にツルの調査研究と教育活動を主な目的に設置された阿寒国際ツルセンターが行う事業活動に協力して、ツルと共存する地域の発展に寄与することとしています。

- ① タンチョウ保護のために給餌や監視活動を行います。
- ② ツルに関する学習会、観察会、展覧会などを開催します。
- ③ 会報や解説書等の出版物を刊行し頒布します。
- ④ 国際ツルセンターの事業活動に協力します。
- ⑤ 国際ツルセンターの活動を支援するボランティアを養成し窓口になります。
- ⑥ ツルの保護思想を普及するために、グッズを開発し販売します。
- ⑦ その他、丹頂鶴音頭やタンチョウ愛護発祥の記念碑を保存する活動を行います。

会員になると

- ★タンチョウ鶴愛護会が発行する会報やツルに関する資料のほか、国際ツルセンターの事業案内など新しい情報を逐次お送りします。
- ★国際ツルセンターの売店で5%引き（テレカなど一部商品を除く）のサービスが受けられます。

■感動が羽ばたく鶴の里■

あなたもタンチョウ鶴愛護会の活動に参加しませんか。



編集委員感想一言



藤嶋 憲雄

記念誌編集に関わってはじめて、長年タンチョウの保護に尽くしてきた人々の苦勞を垣間見ることができました。今、地道な保護の成果が現れ、ようやく千羽鶴になりました。永遠に、この阿寒の地に飛来することを願わずにはいられません。



奥山 勝男

自然破壊が大きく懸念されている昨今、阿寒の地を始め鶴の棲息地がすばらしい将来環境でありますように期待します。タンチョウの優雅な舞いがいつまでも見られるよう、タンチョウのように深い愛情に富んだ未来社会が創造されますよう。



小林 靖之

丹頂の保護に携わり早一〇年。保護の一方で起こる様々な問題を知ることができました。ツルのみならず人の世の流れも大きく変わり始めています。いつまでも丹頂の里に舞う鶴の姿が見られることを願っています。



安藤 弘子

私たちは、環境を介して将来の世代とつながっており、私たちの子孫が生きていく上で、豊かな自然の恩恵を享受できるよう、よりよい環境を未来に引き継がなければなりません。タンチョウの飛び交う平和な郷土でありますよう頑張ります。



竹本 和彦

四十年という長きに亘るタンチョウ鶴愛護会の歴史を振り返れば振り返るほど、阿寒の人々の丹頂に寄せる熱い想いが伝わってきます。丹頂がいつまでも阿寒の誇りであり、素晴らしい財産であることを後世にしっかりと伝えていきたいものです。



橋本 貴子

雪原に佇立する丹頂は自然の猛威から身を守るすさまじいものがあるはずなのに、クワツと鳴き、はばたき空を舞う姿は華麗です。丹頂を保護され守り続けた多くの方々の心にふれ嬉しく思います。



山崎 定作

厳寒時も、早朝丹頂の飛来前に膳立て完了。やがて寒気をついて続々飛来。午後は活魚（ウグイ）の給餌の毎日。今日も元気な姿を見てホツとする。これからも可愛い丹頂のために頑張りたい。



水野 晃

大正十二年に釧路湿原で丹頂が発見されてから、今年で千羽を超えた。丹頂の保護思想の普及など、愛護会の一層の活躍が期待される。昨今である。自然環境を保全し、丹頂の優美な姿が各地域で見られることを願っている。



伊藤 博通

愛護会設立当時に係わり、四十年目にして記念誌の編集をお手伝いでき感無量なものがありません。表紙の写真を林田恒夫氏よりご寄贈賜り、岩松健夫氏の写真を北海道新聞社の提供を受けて随所に使用させていただき心より感謝申し上げます。



大山 晃

これまでの丹頂の保護活動が現在も続き、三十五羽が一〇〇〇羽にまで増えたという事実は、驚きと感動です。この感動を多くの人々に味わっていただき、愛護活動の心が永遠に広がっていくように今後とも頑張りたいと思っています。

タンチョウを愛する人々と
給餌と続ける人々がいる限り
永遠に丹頂の里は
鶴達の越冬地たらん

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

風雪に耐え、阿寒の地を越冬の地として生き抜いてきたタンチョウ、調査機関の発表によるとその数は今年千羽を越した。

めでたく千羽鶴が確認された今年、息長く活動を続けてきた愛護会がいみじくも設立四十周年の記念すべき節目を迎えた。記念誌の編集を担当するにあたって、この歴史ある会の活動とともにそれを支援してきた皆さんの活動も視野に、そのご努力の跡を残し、この記念誌が皆様にごゆっくりご覧いただけるものになるよう不慣れ乍ら努めさせていただいた。現時、自然環境破壊が心配されるが、人間の知恵と努力でタンチョウに最適な環境が残されるよう祈りたい。

この編集にあたっては、多くの個人、関係機関のご理解ご協力をいただき心から感謝申し上げます。

編集委員長 奥山記

阿寒町タンチョウ愛護会
設立四十周年記念誌

発行者 阿寒町タンチョウ愛護会

発行日 平成十七年十月一日

印刷 釧路総合印刷株式会社